東京・横浜を歩く

VOL. 2

三　浦　良

2018 年 4 月 28 日

目　　次

（東京編）

34 江戸の範囲　（都心部）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
35 待乳山聖天　（浅草）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
36 両国国技館跡　（両国）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
37 染井　（駒込）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
38 神田川　（お茶の水）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
39 辰巳芸者　（深川）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
40 亀戸天神　（亀戸）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
41 松竹キネマ蒲田撮影所　（蒲田）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27

（横浜編）

横 11 百段階段　（元町）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
横 12 金港　（金港町）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
横 13 大正活映　（元町）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
横 14 大江橋　（桜木町）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
横 15 高島遊郭　（関内）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
横 16 チャブ屋　（本牧）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
横 17 外国人遊歩道　（山手）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
横 18 本牧　（本牧）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
横 19 横浜市電　（磯子）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
横 20 横浜駅の変遷　（横浜）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64

横 21 山下公園　（山下町）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71
横 22 外国人墓地　（仲尾台）・・・・・・・・・・・・・・・・・・76
横 23 横浜道　（浅間台）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・81
横 24 井伊直弼像　（戸部町）・・・・・・・・・・・・・・・・・・84
横 25 神奈川宿　（青木町）・・・・・・・・・・・・・・・・・・88
横 26 保土ヶ谷宿　（天王町）・・・・・・・・・・・・・・・・・・90

横 27　中華街　（山下町）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・96
横 28　戸塚宿　（戸塚町）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・101
横 29　鶴見川橋　（鶴見中央）・・・・・・・・・・・・・・・・・105
横 30　六郷の渡し　（川崎）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・109

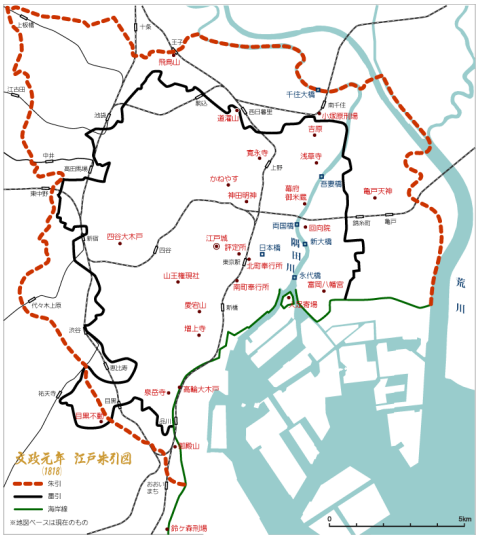
横 31　金沢八景　（瀬戸）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・112
横 32　泥亀新田　（釜利谷町）・・・・・・・・・・・・・・・・・115
横 33　塩の道　（六浦町）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・119
横 34　姫小島　（平潟町）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・122
横 35　称名寺　（金沢町）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・126
横 36　鎌倉街道　（鎌倉）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・131

写真について

本文作成日と写真撮影時の表示が異なる場合があります、記事の正確性を期すために、本文の校正の都度、新しい写真に変更することがあるためです。

34　江戸の範囲

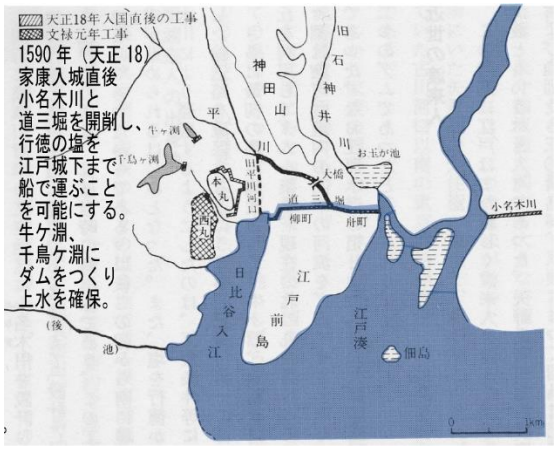
よく「大江戸八百八町」という。しかもこれは実際の町数でなく、江戸にはたくさんの町があったという一種の慣用表現だ、という落ちもよく聞いている。
ところで、江戸の町づくりを見ていると、最初の町が発展して年を追って町が拡大していく様子がよくわかる。それも極めて短期間のうちに成長しているのだ。1657 年の明暦の大火（振袖火事）で新たな都市計画が行われて、本所深川が開発される。1673 年頃には街道に沿って品川から千住まで町屋が連なる「大江戸」が出来上がって、これまで二里四方だった江戸が四里四方まで広がった。こうした街の発展は急激な人口増加によって生じている。さらにその人口増は当時の経済成長によって起きていることがわかる。
そこで江戸の範囲について街の発展と人口増加の過程から調べてみる。

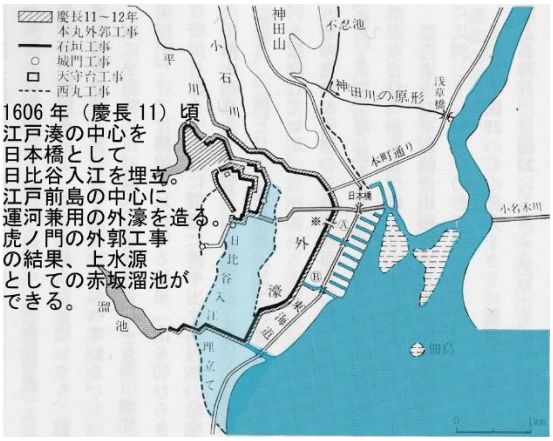


江戸時代は町民・武士・僧侶により支配する機関もそれぞれ独立し、今日の行政区画の制度はなかった。そこで幕府は統一見解を示すように求められて文政元年（1818）、「江戸朱引図」を作成した。
・外側朱引き線（札懸場堺筋 並 寺社方勧化場堺筋）　・内側墨引き線（町奉行支配場堺筋）

（江戸の誕生）

1590 年、家康が江戸へ入府したころの江戸は、江戸湾奥の日比谷入り江に面した小さな江戸城といくつかの寒村が散在するだけだった。城の東側は入り江とそれに続く湿地帯で、西側は武蔵野台地の原野である。城へ入った家康は、初めに城の拡張と同時に道三堀を開削して行徳の塩を城へ運ぶ運河や飲料水の確保を開始した。さらに、平川の下流を城の濠とし、その上流部は新たに開削した神田川へ接続させて、神田川の流れも隅田川へ流れ込むように変えるなど、大規模な都市改造を繰り返した。





（江戸の人口推移）

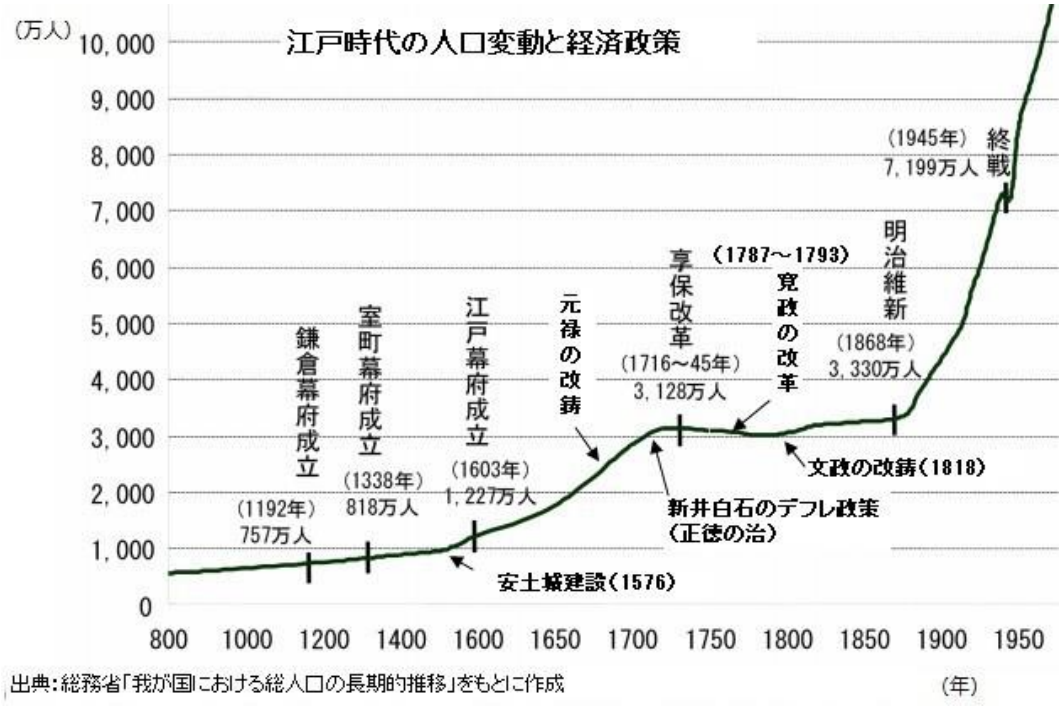
1603 年家康が江戸幕府を開いてから、諸大名が普請役になって城下町作りも始まった。これに伴い家臣団、諸大名、商工業者らが江戸に住むようになった。1609 年江戸を訪問したフィリピン総督ロドリゴ・デ・ビベロは見聞記で江戸の人口は 15 万人と書いている。その人口が急増した契機は三つある。

第一は参勤交代制度の導入。1635 年参勤交代が本格的に始まり、まず外様大名が妻子を永住させて 1 年おきに江戸に共住することが命じられた。1642 年には譜代大名もまた参勤交代が命じられた。これにより江戸の人口は急速に増大した。

第二には明暦 3 年の大火。1657 年（明暦 3 年）1 月 18 日午後 2 時頃本郷の妙法寺から出火し火事は三日間燃え続けて 1 月 20 日に鎮火。死者 10 万人余、市街地の 6 割が焼失し、特に江戸城本丸や多くの大名屋敷、古くからの旧市街地の大半が焼失する被害が発生した。
この大火を機に本所深川の開発や寺社の郊外移転などにより江戸の町の急激な拡大が進められた。その結果、1679 年には町奉行が支配する町は 808 町になった。（1662 年 674 町、1713 年 933 町だったという、）

また河川を使う水運も発達して物流が盛んに

なった。貨幣流通が盛んになって貨幣改鋳によるインフレも発生し、大名貸しでやってきた初期商人が没落して物流を扱う新興上人が台頭。北前船などにより大阪の海運業が発展した。この高度経済成長に伴い、人口も江戸の初期に比べて 2 倍に増えた。



出典:総務省「我が国における総人口の長期的推移」をもとに作成

江戸の範囲と言っても役所ごとに独自に範囲を聞けていたので、一定の境界があるわけではなかった。町奉行支配場・寺社勧化場・江戸払御構場所・札懸場など、異なる行政系統により独自に設定されていた。

① 町奉行が支配の対象とする江戸は江戸の町人地に限定されて、町人地の発展とともに、外延へ拡大。

② 寺社勧化場として許可された江戸は、勧化場として寺社建立等のため寄付を募ることを許可された地域だったので、町人地よりも広かった。

③ 江戸払の御構場所とされる江戸は、御構場所ということで放刑者が立ち入ってはいけない地域で、四宿（千住・板橋・品川・内藤新宿）以内と本所・深川。

④ 札懸場（芝口）が対象範囲とする江戸は、札懸場ということでその対象範囲における変死者や迷子の年齢・衣服の特徴等を高札によって掲示した場所。これも町人地よりも広かった。

⑤ 旗本・御家人が外出を届ける際の江戸が、江戸御曲輪内から四里以内。

（吉宗の人口調査）

1721 年吉宗により人別帳作成が命じられて、人口調査が行われた。対象は町奉行支配下の 15

歳以上の町人だったが、のちに寺社奉行支配下の町人（門前町や寺社）や出稼ぎ人も加えられた。それによると、1721 年 501,394 人、1843 年 587,458 人だった。しかしこの調査では武士や公家は除外され、町奉行が支配する黒引内にとどまり、御府内だった朱引内が省かれているので、江戸全体の総人口データはなかった。それでもこれからわかることは当初女子が極端に少なかった人口構成だったが、100 年後の享保時代頃にはほぼ同数に達した。

江戸時代・明治初期の三都の推定総人口遷移(斎藤誠治)

主要都市	1650年	1750年	1850年	1873年	1879年
江戸	430,000	1,220,000	1,150,000	595,905	671,335
大坂	220,000	410,000	330,000	271,992	291,565
京都	430,000	370,000	290,000	238,663	232,683

（江戸の町の拡大）

東京都の資料によれば、街の拡大を時系列に並べると次のようになる。

年代	事項	増加分	総町数
慶長～寛永年間（1596～1644）	江戸城を中心として多数の町が新設。古町と呼ばれる。	約 300 町	約 300 町
明暦３年（1657）大火～	新たな都市計画。京橋木挽町東の海洲部分、赤坂・小日向などの湿地の埋め立て。本所深川の開発。→江戸の発展の基礎となる。		
寛文２年（1662）	芝・三田・飯倉～下谷・浅草にいたる街道筋の代官支配地に建設された町屋を、町並地として町奉行支配に組み込む。	約 300 町	674 町
延宝年間（1673～1681）	ほぼ江戸の原形ができあがる。 北は千住から南は品川まで町屋が続く「大江戸」が出現。以前は二里四方といわれた江戸の町も、この時期には四里四方といわれるまでに拡大。		
正徳３年（1713）	本所・深川一帯、山の手の町屋を町並地に。	259 町	933 町
延享年間（1744～1747）	町地の強制移転により「代地町」が増加。居住町人の増加により、寺社門前町を町奉行支配に。	745 町	1678 町

（2018 年 4 月 4 日（水））

35　待乳山聖天（まつちやましょうてん）

待乳山聖天は「まつちやましょうてん」と読む。

ここは小高い丘になっていて（この丘を待乳山という）、山谷堀が隅田川（大川）と合流するところである。そこで、昔から隅田川を上って舟で吉原へ行く人はこの寺又は寺が立つ丘を目印にしてきた。

この寺は、聖天が男女抱擁の歓喜天がシンボルで、寺の御利益がお金儲けと夫婦円満にあり、寺

のロゴマークも巾着と二股大根になっている。そのためかどうか確かではないが、やけに色っぽく、明るい寺である。

あちこちに大根と巾着がある。大根は身体を丈夫にし、良縁を成就し、夫婦仲良く末永く一家の和合を表しているとパンフにありました。巾着は商売繁盛のシンボルだ。大根は　　単に聖天さまが大根好きだったというだけでなく、想像すると抱き合う男女の下半身を表しているようにも思われる。吉原の入り口だったことも影響しているかもしれない。入り口という意味では、司馬遼太郎の「峠」に、主人公の河井継之助が待乳山聖天からの眺望を楽しんでいると、吉原方向に上がった火の手を見て、馴染みの太夫のところに駆けつけるという場面もある。誰もがこのお寺を色恋がらみで眺めてきたようだ。

（2013 年 1 月 20 日）

36　両国国技館跡

両国駅を降りて南へ200mほど歩くと京葉道路へ出る。その道沿いに住宅と商業、業務棟からなる大きな再開発ビルが建っている。旧両国国技館跡に建てられた「両国シティコア「である。それに隣接して回向院がある。昔は全部回向院の敷地だったというから、回向院の規模のすごさを改めて感じさせるのだが、大相撲関連では再開発ビルに昔の土俵のモニュメント、回向院に「力塚」の大きな石碑が建っているだけで、ここが大相撲の聖地であることを見失いそうだ。そこで両国国技館跡から大相撲の聖地の歴史を振り返ってみる。

日本相撲協会によると、大相撲の歴史は次のようになる。

1648年(慶安元年)　　辻相撲禁止令
1684年(貞享元年)　　富岡八幡宮境内で勧進相撲
1833年(天保4年)　　回向院境内で勧進大相撲(年2場所、晴天10日興行)
1909年(M42年)　　回向院境内に国技館(大鉄傘)
1954年(S29年)　　蔵前国技館
1985年(S60年)～現在　両国国技館

（江戸時代の大相撲）

大相撲は江戸時代の 1684 年にあった富岡八幡の勧進相撲に端を発している。「勧進相撲」というのは、寺社の建立や修繕のためにする営利目的の相撲興行のことで、江戸時代には寺社奉行の許可により実施された。もともと相撲は上方が中心で、1600 年頃には相撲を本業にして生計を立てる相撲人による巡業が行われていた。同時に神社の祭礼で相撲がよく行われて、1648 年頃になると浪人や侠客が出入りして喧嘩が絶えず、幕府は風紀を乱すという理由で勧進相撲が禁止された。その後数十年たって徐々に解禁されてくるのだが、江戸の場合は街中での興行（辻相撲）は禁止され、これまでの町奉行から変わった寺社奉行の所管になって寺社の境内で勧進相撲の興行をすることを条件にして許された。これが 1684 年富岡八幡の勧進相撲の始まりである。

再開された勧進相撲は、富岡八幡宮、回向院、湯島天神など各所で開催された。寺社の境内には常設小屋があったわけではなく、よしず張りの仮設小屋が建てられた。小屋といっても、2 階席、3 階席まで作られた巨大な建物で相撲が行われた。

1742 年になると、相撲に関する規制がさらに緩んで、春は江戸、夏は京都、秋は大阪、冬は江戸で「四季勧進相撲」を行う体制が出来上がった。天明、寛政時代（1781～1800）になると、大阪や京都にいた力士も江戸へ集まるようになって、谷風、小野川、雷伝などの名力士の活躍も重なり、江戸相撲の人気も大いに高まった。これまでは回向院は多くの開催場所の一つに過ぎなかったのだが、この頃から回向院での開催が多くなり、1833 年からは回向院が江戸の大相撲の開催場所を独占するようになった。

（大阪、京都相撲の衰退と東京相撲の繁栄）

もともと大相撲は上方が盛んだった。1702 年に寄進しない勧進相撲が公認されると、大阪商人が後援する職業相撲が始まって、紀州、泉州、讃岐などから力士が集まった。さらに各地の相撲団も競って大阪に行くようになって、国内の相撲の中心は大阪になった。職業相撲の団体は、江戸時代には大阪、京都、江戸の三都だけでなく、名古屋、仙台など各地にあって、それぞれの親方が力士を育成し独自に地方巡業を行っていた。

当時、三都の間では力士の実力はほぼ拮抗していたと言われているが、明治になるとその均衡が崩れて、東京相撲へ実力者が集中するようになった。大阪、京都の凋落は、相撲の主要なスポンサーだった天皇家や公家がいなくなり、大阪経済も東京の躍進に後れを取るようになって力士が流出し、単独興行が難しくなったためである。大正期になると、京都や名古屋相撲も解散し、相撲の興行団体は東京と大阪のみになった。その大阪相撲も引き続き低迷を続け、博徒や侠客がまた周囲に群がるようになった。

大阪、京都の大相撲人気の凋落に対して、明治 42 年に回向院に隣接して「国技館」を建築するとともに、東京相撲は皇族や政財人々をパトロンにして人気を高めた。T14 年 4 月、東宮御所で相撲大会が開かれて、当時摂政宮だったのちの昭和天皇から寄付金 1 千円を得て、これにこれまでの貯えから 2 千円を支出して 3 千円の優勝杯を製作したという話もある。その後その年のうちに、大阪相撲と東京相撲が合併して、「大日本相撲協会」が発足した。形式的には対等合併だったが、実質的には東京が大阪相撲を吸収したものだった。

（初代国技館）

明治 42 年（1909 年）、回向院の境内を買収して「国技館」が建設された。初代国技館は 1.3 万人を収容できるドーム型屋根の洋風建築で、大相撲の常設館として建設された。その施設名ははじめから「国技館」ではなく、「両国元町常設館」と呼ばれた。市民は大型のドーム屋根を見て「大鉄傘」という愛称で呼んでいたが、建物の名称に関する議論はまとまらず、最後に開館委員会委員長の板垣退助が「国技館」という名称を指定して決まったという。ここから大相撲が国技だというイメージが作られるようになった。

この初代国技館は、大相撲の歴史に二つの大きな役割を果たした。
一つ目が大相撲を国技というイメージを作り出したこと、
二つ目が東京相撲、大阪相撲、京都相撲などというように別々の職業相撲団体が行ってきた大相撲を東西統一して大相撲の近代化を進めたことである。

↑初代国技館　↓両国シティコア内に設けられている国技館跡のモニュメント

（国技館というネーミングが大相撲＝国技というイメージを作り出した）

現在では多くの人々が大相撲は国技だというように思っている。そのイメージを初代国技館が作り出してきた。

「国技」というのには 2 種類あって、

① 国家が国技として認めて、特別な地位や待遇を与えているスポーツで、例えば韓国のテコンドー、カナダのアイスホッケーをいう。

② 国民に親しまれて多くの人々が国技だと思っているスポーツのことで、アメリカのアメフト、バスケ、イギリスのクリケット、サッカーをいう。

世界的に見れば、法律で国技を定めているのは少数派で、ほとんどの国の国技は②である。
これらはみな、その国の法令で定められておらず、国民に親しまれていてその国の文化にも重要な位置を占めているかどうか、が判断基準になっている。
このような考えから見ると、現在の大相撲は国民の親しみ度、支持度、文化貢献度からみて「国技」といってよいだろうが、明治 42 年当時はまだ大相撲は今ほど国民的規模で多くの人々が支持し、応援するスポーツとは考えられていなかったので、国技として考えられていたわけではない。だから、国技を行う場所だから国技館と名付けたわけでなく、国技館で行われるスポーツだから国技として語られるようになったとみることができる。

（大日本相撲協会の誕生）

大正 14 年の大日本相撲協会の設立によって、これまで各地でばらばらに行われてきた大相撲が一元化された。東西が統一された大相撲は、当初は 1927 年（昭和 2）から 1 月・5 月に東京で、3 月・10 月に大阪で、年に計 4 回の本場所を開催することになった。しかし大阪での本場所は次の番付編成に関係しない事実上の準本場所であり、力士たちも本気を出さなかったといわれており、1933 年（昭和 8）になると本場所は東京での 1 月・5 月場所のみとなり、大阪場所は準本場所に格下げさた。また、力士の処遇にも東西で差があった。合併当時、大阪相撲の幕内力士の実力は東京の幕下並みといわれたが、合併後場所を重ねるにつれ大阪力士は実力通りに番付を下げ、この頃には大阪相撲出身の幕内力士は数人に減ってしまうほどだった。
大阪で正式な本場所（春場所）が復活するのは、戦後の 1953 年（昭和 28）からである。その後 1957 年から九州場所、1958 年から名古屋場所が開催され、現在の年 6 場所制が定着した。

（両国国技館の変遷）

初代国技館はその後 3 度焼失し再建される。
1917 年（T6 年）失火で焼失し、1920 年（T9 年）再建
1923 年（T12 年）関東大震災で倒壊、1924 年（T13 年）再建
1945 年（S20 年）東京大空襲で焼失、
1946 年（S21 年）両国メモリアルホールとして米軍が接収 （～1952 年まで）
1952 年（S27 年）国際スタジアムに売却（プロレスなど）
1958 年（S33 年）日大講堂
1982 年（S57 年）使用停止、翌年解体

2 代目国技館の「蔵前国技館」

この建物の開業は 1954 年（S29 年）9 月だから、大相撲は 1944 年（S19 年）から 10 年間、都内各地をジプシー興行していたことになる。現在は蔵前ポンプ場になっている。

3 代目国技館の現在の両国国技館。

1985 年（S60 年）開業で地上 2 階、地下 1 階、総工事費 150 億円だったが、相撲協会は春日野理事長（栃錦）の下で無借金で建設したと当時有名になった。

37　染井霊園

巣鴨へ行く用事があり、桜のソメイヨシノが咲いたので、駒込の染井霊園まで足をのばした。染井は、横浜の人にとっては掃部山（かもんやま）の横浜能楽堂に移築された染井能舞台（松平頼寿邸）があったところという思いが強い場所である。染井能舞台は、もともとは根岸の旧加賀藩主前田斉泰（まえだなりやす）の屋敷にあったが、大正時代に染井の松平邸へ移築された。この染井能舞台は戦災の被害を受けなかったので、戦後は能再興の拠点として広く利用されてきた。しかし、1965 年解体されてその部材が田邊竹生（観世流能楽師）氏によって長い間保管されていたが、その後横浜市へ寄贈されて 1996 年に横浜能楽堂に復元した。桜より能舞台に縁が深いのだが、実際に行ったのは初めてだった。

（桜のソメイヨシノが誕生した土地）

駒込の染井霊園は都心に近い都営墓地がある場所だが、桜の染井吉野が誕生した土地としても有名だ。

染井吉野は、江戸時代末期にここ染井村の植木屋が、どこかで偶然見つけたかそれとも誰かがかけ合わせで作り出したかはよく判らないが、「吉野桜」という商品名で売り出したのが始まりと言われている。奈良吉野の桜とは別のものだったが、植木屋は吉野というならの桜の名所にちなんだ名前を付ければよく売れるだろうと考えたかもしれない。

ところがこの桜が、優れた特徴を持っていた。

① 先に花が咲いて後から葉が開く。ほかの桜が花と葉がほぼ同時に開くのに対して花が先のほうが見ばえがするため評判がよかった。

② 花が少し大き目で、花付きもよく、見た目が豪華。

③ 成長が早くて 10 年も経てば立派な木になり、他の桜に比べて若いうちから花を付ける。

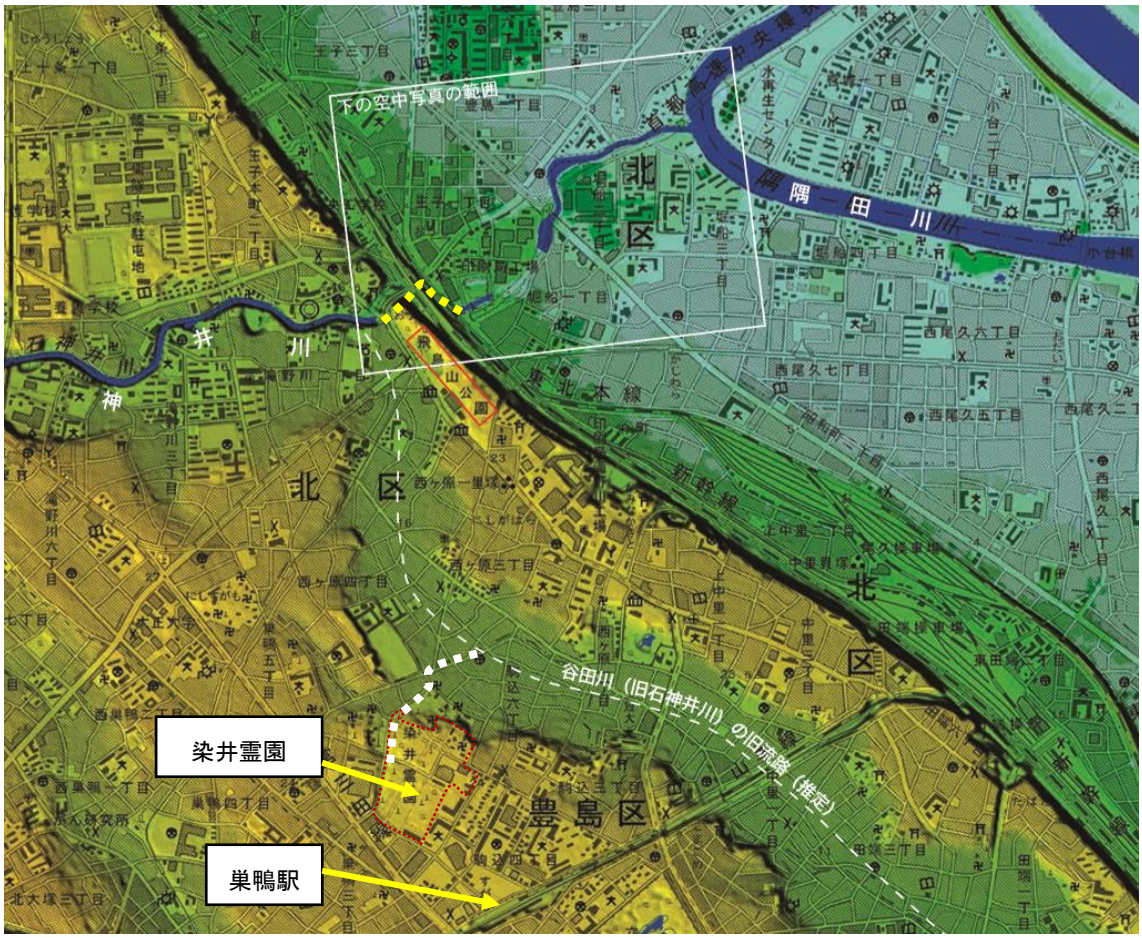
これらの長所があったため、「吉野桜」の評判は上々で、明治になって「吉野桜」というネーミングがよくないとして「染井吉野」に変更された。その後、染井吉野は全国の城跡や公園、学校、道路などに植えられ、急速に普及した。

現在、墓地内には約 100 本のソメイヨシノがある。

（染井霊園は矢田川の源流）

昔、飛鳥山の南を水源にして、根津神社の脇を通って上野の不忍池へ注ぎこみ、隅田川へ合流する川があった。矢田川といって、明治時代には漱石や鴎外が歩き、昭和の初めころまで使われていた川である。今では川は全部埋められて、「谷根千」と呼ばれて昔の面影を残す東京の下町で有名になった「よみせ通り」とか「谷田川通り」の名前の道になっている。

この矢田川の源流が染井霊園の中にあった長池だったと霊園のパンフレットに書かれている。この長池には大きな湧水があったわけでもなかったので、周辺の宅地開発が進むにつれて水が枯れだして水源機能をなくしたと思われる。これに対して、矢田川はもともと石神井川の一部だったとするもう一つの説がる。石神井川は小平に水源をもち、武蔵野台地を東に流れて台地の東端の飛鳥山でトンネルになって下を通過して隅田川へ合流している。飛鳥山の下をトンネルで越すというのは人為的で不自然だったので、調べてみると、川底の幅や高さなどは二つの川がほぼ同一であること、先般デジタル地形図が開発されて地域全体の標高差が明らかになると二つの川の標高にも強い連続性があることがわかった。そこで、石神井川と矢田川測っては一つの川だったと考えられるようになった。だから矢田川の主な源流は石神井川で、染井霊園の水もそれに合流していたのだが、ある時から石神井川が流れを変えたため、染井霊園の水だけが流れたと考えたい。



38　神田川

神田川は神田上水を調べた時にも登場したが、東京を東西に横断する川である。この神田川の歴史を国土交通省の調査書に沿って要約すると次のようになる。

① 江戸時代には、神田川は神田上水として江戸の人々に飲料水を供給していた。また、下流部は物資輸送のための舟運に利用され、さらには、江戸城の外濠の一部を形づくっていた。

② 明治には市街地の整備、生活様式の近代化の進展にともない改良水道工事業が完成 し、明治 34 年に神田上水は、玉川上水とともに廃止された。

③ 大正 10 年頃は、山手線より西側では、本川・支川ともに幅 100～300m 程度の広い氾濫域を有していた。（氾濫域とは洪水時に浸水が予想される区域をいう。）

④ 昭和 30 年頃には、河川改修と市街化の進展により上流の一部を除き氾濫域が失われた。また、昭和 30 年代には河川が直線的形状に変化し、延長が短くなっている。

⑤ 現在では、河川沿いの氾濫域は全て消失しており、かつての遊水機能は期待できない。

今日では、神田川はあまり活躍しておらず、「神田川クルーズ」の名称で、日本橋発着 130 分墨田川～神田川～日本橋川を回遊する遊覧船が走っている程度だが（料金 2,900 円）、今回は神田川が一番華やかに活躍した江戸時代に遡ってみてみる。

（家康の江戸入府）

織田信長没後、家康は大坂の秀吉と一時対立したが、秀吉の支配下に家康が入ることで和睦した。秀吉は九州の島津氏を平定後、次は関東の北条氏を帰属させようとした。北条氏は、小田原を本拠にして、伊豆、相模、武蔵、上野、下野、下総、上総などを支配する関東の大勢力だった。秀吉は、東海道ルート、中山道ルート、海路ルートから北条支配地を攻めた。秀吉は家康とともに、東海道ルートで北条氏の拠点の小田原城を攻めた。小田原評定と呼ばれた和議決定の遅れもあったが、多くの支城が次々と陥落する中でこの城は包囲されながらもよく持ちこたえた。

長期戦を予想した秀吉は、小田原城の西の石垣山に城を築いた。この城は、山の高木に隠されたまま約 3 か月の突貫工事で築城された。この城は小田原城を見下ろす位置にあって、竣工して城の前面の高木が切り倒されると、小田原城からは突然城が現われたように見えた。このためこの城は「石垣山一夜城」と呼ばれて、秀吉の底知れない実力を象徴するものと言われてきた。

その小田原包囲の際、陥落寸前の小田原城を見ながら、秀吉は城を見下ろす高台に家康を誘って、並んで立小便をした。

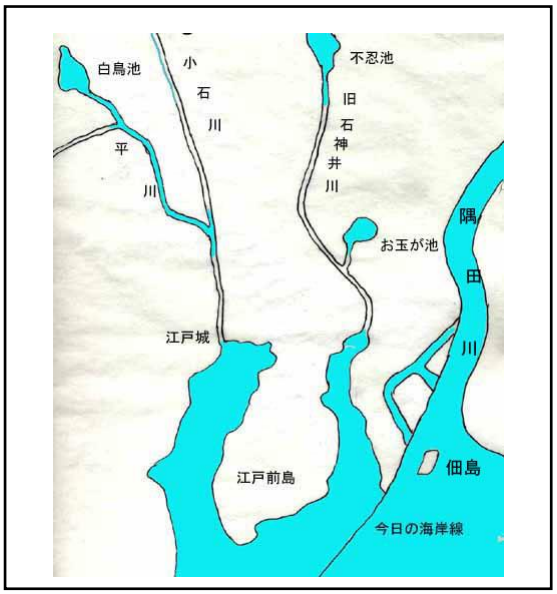
「家康、ぬしも小便をめされよ」と誘い、二人並んで放尿しつつ、

「あの城も間もなく落城しよう」

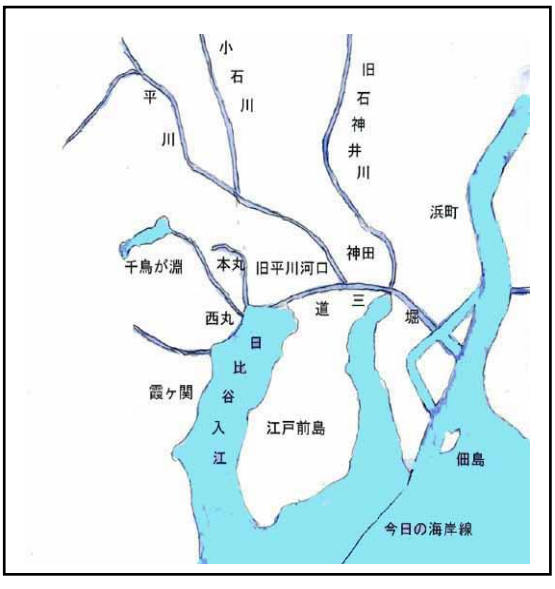
「左あらば、関八州は貴客に進らすべし」といった。

この秀吉の一言で家康は、先祖伝来の三河を引き払って江戸へ移ることを決した。

天正 18 年（1590 年）8 月 1 日、家康は江戸城に入った。江戸城と言っても、当時は日比谷入江に面する崖の上に立つ小さな城だった。城の東側は湿地帯で、西側は武蔵野の荒地だった。そこで、家康は城の拡張と水と塩を確保するための水路や運河づくりを命じた。そこから城と江戸の街づくりが始まった。



家康入府前の江戸



家康入府後の江戸

（神田川を新たに整備して、平川を運河へ改修）

1590 年家康入城直後から、道三掘と小名木川を開削して水路を作って行徳の塩を江戸城まで船で運ぶようにした。あせて千鳥ヶ淵にダムをつくりせき止めて上水を確保した。城から東側の湿地帯では、雨が降ると氾濫したため、平川を日比谷入江へ落さず道三掘へ付け替え、その支流をお城の堀に変えた。

1636 年江戸城竣工時頃の水路網

その後の 1620 年頃、平川と旧石神井川の水を隅田川へ落とすために、本郷台地の南端を開削して神田川を整備した。これにより道三掘は運河として、大雨や多台風による増水被害を受けにくい物流幹線になった。神田川の水道橋からお茶ノ水の区間は、人工的な崖ではあるが深い谷ができて江戸の名所の一つになった。

江戸城の整備は、全国の諸大名に工事を請け負わせ、各地から石を運ばせて石垣をつくり、本丸や西の丸の城郭も順次整備して行った。この築城工事や神田川開削で発生した残土で日比谷入江を埋立て盛土し、そこに町人の町割りを実施した。

1636 年（寛永 13 年）、江戸城が完成すると、この城は神田川から汐留川に至る外周に外堀があって、その内側には何重もの内堀と運河がめぐらされ、水に囲まれた城郭都市となった。各々の堀には、場内に入るための橋が架けられ、橋の内側には「枡形門」が設けた。枡形門は、敵の侵入を想定した防衛拠点だったので、江戸城は戦略上の配慮に基づいて作られた城だった。

（神田川が物流の幹線になる）

近代時代から明治時代の初期まで、物資の大量輸送の主役は船だった。当時関東地方の中心であった鎌倉から、船で様々なものを運ぶために江戸湊が作られます。江戸城から江戸湊への交通の便を考えて、平川の流路を変えたのが江戸発展の礎になった。江戸時代になると、江戸城を囲む軍事目的と江戸市中へ水を運ぶ道として平川が利用された。

まず、江戸城外堀として機能させるため、仙台藩に神田台地を切り崩し浅草橋で隅田川に合流させた。切り崩した台地のあたりが神田であったことから、神田川の名前がつけられた。

神田川の上流では目白下関口に取水場が設けられ、ここから取水された神田上水は江戸市中へと導かれた。元の平川は現在の三崎町付近に土手を築き、神田川の流れとは一時分断されましたが、江戸湊から船便が行き来する重要な水路として機能した。五街道の出発点、日本橋もこの流れの上に架けられた。神田川と平川が再び結ばれたのは、明治時代で、合流点の三崎橋近くに飯田町駅が作られ、鉄道輸送が始まった。この駅までの鉄道と船便の接続をさせるために、M38 年に土手が切り崩され再び神田川と平川が接続された。

（2014 年 12 月 6 日）

39　辰巳芸者

明暦 3 年（1657 年）1 月 18 日、江戸で「明暦の大火」があった。本郷の本抄寺から出火し火災は折からの北西の風もあって神田、浅草橋、日本橋、京橋。さらに隅田川を超えて本所、深川の一部

まで広がった。翌日の午前 11 時頃には小石川の伝通院からも出火し、江戸城天守閣、本丸、二の丸が炎上した。夜になると番町方面の出火で、溜池、日比谷、新橋芝へ広がった。この大火は、約4百町を焼いて江戸の街を嘗め尽くし、死者も 10 万余という被害を生んで、3 日後の 20 日午前 8 時頃に鎮火した＊。

＊本妙寺で、施餓鬼という法事で焼いた振袖が空へ舞いあがったのが原因とされて、「振袖火事」とも呼ばれている。

この江戸城炎上という事態が幕府を驚かせた。幕府は、庶民に当面の小屋作りは簡便にして置いておくように呼びかける一方で、他方では、大火後に江戸の実測図を作り、橋や、広小路を作り、武家屋敷、町屋を移転する大規模な市街地改造を行った。

①避難と延焼防止のために道路拡幅、広場造成、両国橋の架橋。
②寺院も外堀の外側や新開地へ移転（西本願寺（横山町→築地）、東本願寺（神田明神下→浅草）霊厳寺（霊厳島→深川）、山王権現社（三宅坂→溜池）
① 城内にあった尾張、水戸、紀伊の御三家の屋敷を移転し、吹上の庭として整備
② 本所、深川が造成されて、武家屋敷や町屋を移転。大火犠牲者を祀る回向院建設（本所）。堅川や横川などの運河も整備。
③ 吉原遊郭を人形町から浅草へ移転

幕府の対策を受けて、明暦の大火(1657 年)以降、深川へ多くの人々が移住してきた。その中には吉原芸者もいた。
深川は、新開地だが、水運が便利で深川八幡宮があり、隣接して木場があって商売は盛んである。1684 年頃から富岡八幡の境内では寺社への寄進を目的とする勧進相撲興行も始まった。門前町が栄えると、木場の旦那衆を相手に芸者の活躍も始まった。花町の原点は吉原だが、明暦の大火で吉原が浅草へ移転すると、吉原芸者の一部は深川へ移って深川芸者(場所が江戸城からみて東南方向＝辰巳の方向にあったため辰巳芸者とも呼ばれた)が隆盛するようになった。

深川芸者は当時男のものだった羽織を着て、漁師や木場の荒くれ男を相手に粋と厚い人情を売り物した。色を売るものを女郎といい、芸を売るものを芸者と呼ぶが、元禄頃から深川でも色と芸を兼ねる女郎芸者が増えて、幕府もそうした岡場所を放置できなくなって規制を強め出した。

規制が厳しくなると、辰巳芸者の多くが、舟運の地で吉原へ向かう男たちが立ち寄る柳橋へ移り、柳橋芸者となった。柳橋芸者は日本橋界隈の老舗の旦那衆の支持を得ていた。

幕末になると、各藩の屋敷は留守居役を残して故郷へ帰るようになり誰も住んでいない屋敷が増え、米の値段高騰などでうちこわしや火事も多発するようになった。汐留川周辺の船宿や料亭が勤王派の武家を相手に繁盛するようになった。その頃、能役者の屋敷跡へ住み始めた芸人が「金春芸者」と自称するようになる。明治維新以降、国会や官庁が並び始めた新橋周辺が栄えるようになって、この金春芸者が明治維新以降は新橋芸者となり、柳橋芸者に代わって隆盛を誇るようになった。

明治 5 年に芸娼妓解放令が出されて、人身売買禁止、年期奉公禁止、借金棒引きにより芸者も自由の身になった。しかし、実際に芸者をするものが絶えないので、芸伎、娼伎規則が作られて県知事へ届出て営業許可証(鑑札)をうけて毎月 3 円の鑑札料を払うようになった。
こうして東京には、新橋(銀座 8 丁目)、赤坂(溜池)、神楽坂、芳町(浜町)、向島(向島 5 丁目)、浅草(猿若町、山谷堀)の6花街が今日残された。

（2013 年 3 月 9 日）

40　亀戸天神

両国を歩いた後、バスに乗って亀戸天神へ行った。芥川龍之介の「両国本所」にも登場するし、ちょうど藤祭りの最中で東京市の藤の名所というのを見ておこうと思った。

亀戸天神の女橋。 大鳥居を入ると心字池にかかる最初の太鼓橋が男橋で、その先の本殿前にかかる橋が女橋。

神社のマークを見て、梅が枝餅についている太宰府天満宮と同じだと判った。後で調べたら、明暦の大火後に本所が江戸の大名屋敷や社寺、町人地の移転先になって、幕府はこの亀戸天神に地域の守護神になるよう土地を分け与えた。亀戸天神は、もともと九州・太宰府天満宮の神官が布教のために江戸へ来て作った神社だという。そのため、初めから東の大宰府の「東宰府天満宮」と呼ばれたという。

菅原道真候を祀った神社だから、学問や受験に効用があると言われているが、藤の花が多い花の神社である。太鼓橋の上から眺めると一望できると人気があった。今年の藤の花は桜と同様に早い時期に満開になったようで、私たちが行った時にはすでに盛りが過ぎていた。でも見物客は多く、出店もたくさんあった。

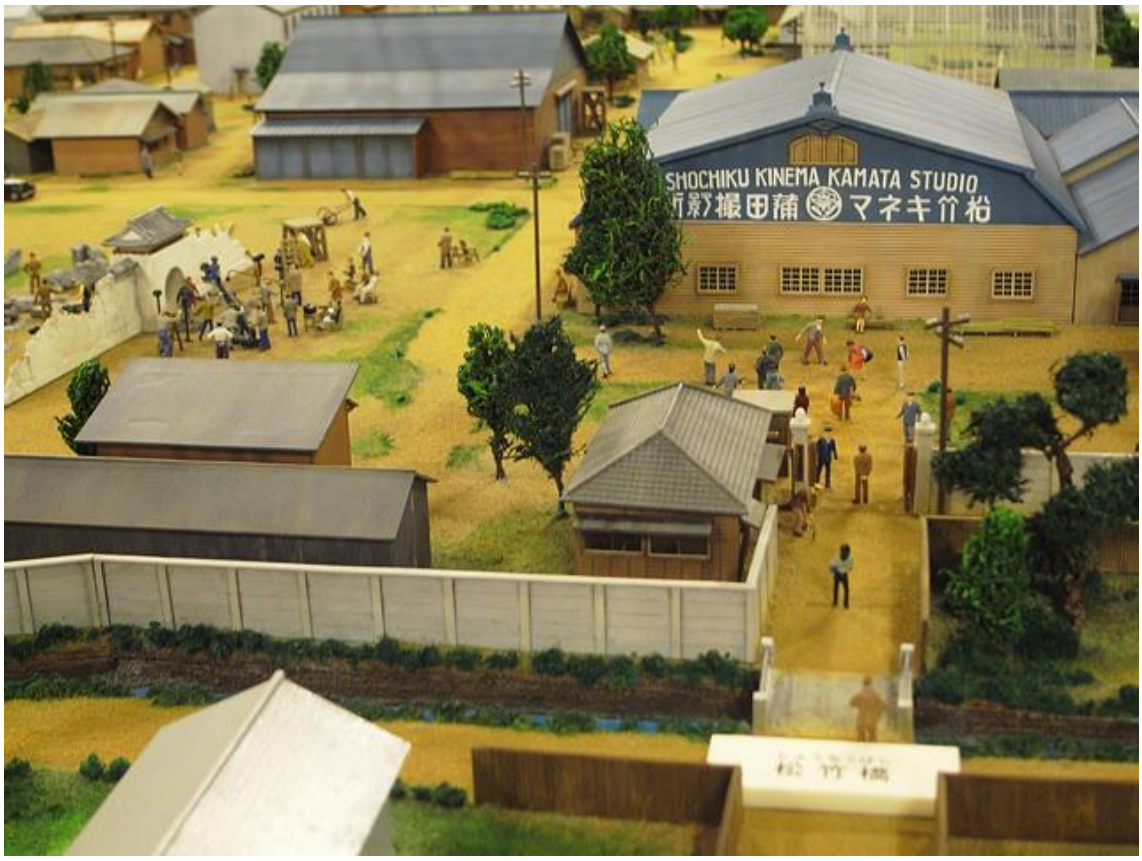
（2013 年 4 月 29 日）

41 松竹キネマ蒲田撮影所

蒲田駅の電車の発着ベルは「蒲田行進曲」である。ご当地メロデーの代表格のようなもので、昔ここに松竹蒲田撮影所があって約 1,200 作品の日本映画が作られたという話を思い出す。撮影所があったのは戦前で、大正 9 年 1920 年から昭和 11 年 1936 年までの間の 16 年間に過ぎない。

昭和 11 年 1 月に撮影所は大船へ移転するのだが、無声映画全盛期に建てられた撮影所は 6 千坪の敷地だったが、トーキー時代になると面積が狭くて大船に２万坪の用地が確保できたことと周辺工場の騒音がひどくてトーキーの撮影でその音が映画に入ってしまうというのが移転理由だった。

サイレント全盛期に建てられたこの撮影所では、所長の城戸四郎氏がリーダーになって従来の新派調現代劇に対して、庶民の生活感を笑いとペーソスで描く手法で日本映画に新しい息吹を生もうとしていた。撮影所が大船へ移転しまうと蒲田は元の場末の町に変わっていったが、戦後になると、大田区内で軒を並べていた中小零細工場が地方出身の若者たちを集めたため、蒲田は場末ではあったが、若者が大勢集まる街になった。



撮影所の跡地には再開発ビル・アロマスクエアと大田区民文化ホール・アプリコが建っている。そのアプリコの B1 階のロビーに蒲田撮影所のジオラマ模型が置かれている。この事務所の所歌にも「蒲田行進曲」が使われていた。

（東映京都撮影所が舞台なのになぜ「蒲田行進曲」なのか）

映画「蒲田行進曲」（1982 年）は、新選組を題材にした映画を太秦にある京都東映撮影所で製作中の話で、土方役の俳優・倉岡銀四郎、彼を慕う大部屋役者のヤス、二人の間で揺れ動く女優・小夏の三人の悲喜劇を描く映画である。その山場は、銀四郎が寺田屋の二階に集まった勤王の志士たちを捕えに行くと、志士役の一人だったヤスが銀四郎に斬られて 2 階から 30 段の階段をころげ落ちる階段落ちのシーンが山場である。

製作上の裏話を聞くと、初めにつかこうへい著「蒲田行進曲」を映画化しようと考えたのは角川春樹氏だった。角川氏が東映の岡田茂社長に話すと、「当たりそうにない」と断ったので、松竹が受けることになった。松竹/角川事務所が制作会社になったものの、撮影場所は東映京都撮影所、監督は東映の深作欣二氏と決まり、東映と松竹の間で奇妙なねじれがあって生まれた作品である。

もともと原作は松竹の蒲田撮影所が舞台であるのに、映画では時代劇全盛の東映京都撮影所の話になっているし、ヤスの住むアパートは太秦で、小夏が出産する病院も京都である。だから、映画の舞台はあくまでも京都で、「蒲田行進曲」にうたわれた懐かしい「キネマの時代」をモチーフにしたドラマということだ。実際にもつかこうへいの原作も当初は「欽ちゃんの話」だったがのちに改題したという。

蒲田行進曲の歌はよくできていて、一番で虹の都、光の港であるキネマの天地では命が踊り青春が燃える世界であると歌う。二番ではキネマの世界というのは消えて結ぶ幻の国だと歌い、映画を

称賛する歌になっている。最後の三番で初めて蒲田の町が登場する。

「春の蒲田　花咲く蒲田　キネマの都　　空に描く白日の夢　あふるる処　輝く緑さえ　とこしえの憧れに　生くる蒲田　若き蒲田　キネマの都」とうたっている。蒲田がある時期キネマの都となって、若く生き生きとした街だったと言うのである。

これから見ると、映画「蒲田行進曲」は、若者たちによる映画文化を称賛した映画であって、蒲田の町はその映画文化の一つの発信地だったとつけ足しているだけのようである。

（蒲田行進曲」と「キネマの天地」の違い）

蒲田撮影所を正面から扱った映画といえば「キネマの天地」だろう。山田洋二氏が監督になって作られ「キネマの天地」は 1986 年に公開された。映画の舞台になったのは、撮影所が大船へ移転する直前の 1934 年昭和 9 年頃の蒲田撮影所である。先行した深作欣二氏の「蒲田行進曲」が 1982 年に公開されてから 4 年遅れの作品だったが、大ヒットした「蒲田行進曲」が東映京都撮影所が舞台で松竹蒲田撮影所が登場しないこと無念に思った野村芳太郎が、対抗して自らプロデューサーとなって企画し、松竹大船撮影所 50 周年記念作品として、当時の松竹の総力を挙げて豪華メンバーで製作された。

この映画は、所長の城戸四郎のもとで斉藤寅次郎、島津保次郎、小津安二郎、清水宏らの新進気鋭の若手監督たちが競うなかで、田中絹代と思われるヒロイン田中小春が大スターの階段を上って

ゆく話である。

田中絹代といえば、14 歳で 松竹蒲田撮影所に入り、無声映画から映画デビューし、21 歳の時日本映画で初の本格的トーキー「マダムと女房」に主演した。以降、数々の大作にも出演し、平凡な容貌と下関訛りがあるしゃべり口で明るく暖かな気持ちで未来を見つめる芯の強い女性として蒲田映画の看板女優になった人である。その代表作には、「井原西鶴」(1952 年)、「雨月物語」(1953 年)、「山椒大夫」(1954 年)、「楢山節考」(1958 年)などの傑作が並ぶ。
しかし咲き誇る花はやがて散るときを迎えるという言葉通り、歳を重ねてくると、高峰三枝子ら若手女優が台頭してきた。それでも田中は映画出演に激しい欲求をもち続けて、64 歳で「サンダカン八番館」(1974 年)、65 歳で「ある映画監督の生涯・溝口健二の記録」(1975 年)などに出演した。67 歳の 1977 年 1 月 12 日に順天堂大学病院入院し、3 月 21 日脳腫瘍で死去した。死期迫る最後の時まで映画出演にこだわった彼女だったが、晩年には鎌倉市鎌倉山の自宅の、白黒テレビと置炬燵だけの小さな和室で過ごすことが置かったという。

「キネマの天地」では、「浮草」撮影時にヒロイン役の川島澄江が恋人と失踪してしまう事件が起きて、(川島のモデルは岡田嘉子で、妻子ある男優と駆け落ちしたり、演出家とソ連へ亡命した)、急遽小春がヒロインに大抜擢される。劇中では小春が「浮草」のあるシーンがどうにもうまくいかず、落ち込んで帰宅すると小春に父喜八が一座の看板女優った母との恋愛話をする。それを機に撮影は再び順調に進み映画が完成し、映画も大ヒットするというストーリーである。

こうしてみると、田中絹代の映画デビューを描いた「キネマの天地」こそが真の「蒲田行進曲」で、あの「欽ちゃんの話」を描いた「蒲田行進曲」がむしろ「キネマの天地」と名付けられるべきものだったように思われる。

(2018 年 4 月 8 日(日))

(追記)

「蒲田行進曲」は、1980 年 11 月舞台、1981 年単行本、1982 年映画＋直木賞受賞。しかし、舞台公演の 5 年前の公演予告では、評伝「ビビアン・リーの生涯」からヒントを得て、松竹蒲田撮影所を舞台に年老いた往年の人気女優の物語だった。5 年間の難産の末、出来上がったものは、東映京都撮影所を舞台にした三人の若い俳優の物語で、81 年の小説では「銀ちゃんのこと」という表題だった。単行本化で改題した。

(つかこうへい「蒲田行進曲」(角川文庫、平成 6 年)に掲載された扇田明彦氏「解説」)

横 11　百段階段

元町通りのほぼ中央に、中華街南門から前田橋を渡ってくる道がある。その道を先へ進むと元町中通りへ出て「霧笛楼」がある。その霧笛楼の奥側が大きな崖になっている。元町のＧＬ4.4m、崖上の公園のＧＬ28mで、その落差は約 24m ある。昔ここに百段階段があった。霧笛楼はフランス料理で有名な店だが、横浜出身の作家・大佛次郎の小説「霧笛」からとったと言われている。その小説「霧笛」の舞台が、中華街から元町に通じる前田橋から眺めた百段階段周辺だった。昔の写真を見ると、前田橋から崖の上にあった浅間神社へ登る直線の階段が「百段階段」である。百段階段山上の浅間神社では、港に出入りする船や居留地がよく見え、遠くには神奈川宿の旅籠や東海道を歩く人馬も見えたという。
関東大震災で崩落し、以降、階段は復元されることはなく、百段階段があった辺りは霧笛楼が店を増築しており、崖の上の浅間神社は今、「百段公園」となっている。

S9 年に書かれた「霧笛」は、明治維新当時の横浜外人居留地を舞台に、白人以外を虫けらとしか

思っていない冒険商人クーパーと、その財布を掏った千代吉が、奴隷扱いされながらクーパーへの屈折した畏怖心と反感を抱き続けた末、クーパーが商用で旅に出ている間に、その愛人（らしゃめん）お花を奪い、凄惨な破局を迎える話である。

千代吉はクーパーの力を恐れてきたが、ある日、酒場でお花とクーパーに遭遇したとき、「お花はオレの女だ」と言うと、クーパーが怒り、千代吉に拳銃を突きつける。

「面白い、撃つなら撃ってみろ」と千代吉が言い、、「やめて」と、お花がふたりの間に立ちはだかると、クーパーは自分の敗北を認め、酒場から去る。お花はよろこぶが、千代吉がもっていたクーパーの拳銃が火を吹き、お花はその場に崩れ落ちていく。

治外法権の居留地を舞台に、クーパーは欧米列強の象徴的存在である。クーパーは威厳を保つために、徹底した暴力を行使する。その屋敷で働く千代吉は、強い主人に対して畏怖しながら、他方で強いあこがれを抱いている。後にクーパーの愛人だったと判明したお花が、それでもクーパーにへつらって虚勢を張る様子は、欧米列強に媚を売る日本の姿を重ね合わせているように見える。それに気付いた千代吉は激しい嫌悪感に襲われて、お花を打ち殺したように思われる。
居留地では強者と弱者が明白だが、その力関係が暴力で支えられたために、絶えず一触即発の危険をはらんでいたことを示しているように見えるのである。

なお、浅間神社は、もともとは横浜村洲干島にあったが、万延元年 1860 年この付近の住民が立ち退きを迫られて元町へ移住した時一緒に移転し、山手の丘の上へ移されたものである。この神社は当時元町 1 丁目 15 番地にあった厳島神社の末社で、風光明媚で小さな茶屋もあったので、百段階段を上って外国人もよく訪れていた。しかし、関東大震災で浅間神社の社殿と百段階段が壊滅して以降復旧されることがなかった。但し、本寺の厳島神社もまた大地震で焼失したが、しばらくは仮設だったが、昭和初期に元町 5 丁目 208 番地に再建された。この寺は第二次世界大戦で再度焼失するが、S36 年に社殿が再建されて、現在に至っている。

（2014 年 4 月 18 日）

横 12　金港

昨日、Ｆ氏の「横浜港の歴史」の講演を聞いた。昨日の話は、戦後長い間接収されていた横浜港がやっと返還されるとすぐ高度成長の渦中に取り込まれて大忙しだった話だった。
話はあちこちに脱線しまくり、どこまで行くのかと心配になるほどだが、最後はうまくまとめて終わる。相変わらずの巧者ぶりである。脱線話にＦ氏の人生訓である「義理と人情と恩返し」がまた登場した。Ｆ氏が言うのは、やくざの仁義の話ではない。外国人が多く混ざる船社や荷主、乗組員が働く港湾物流の世界は、契約社会の典型のようなところである。契約した時刻に遅れれば遅延金、数量・目方に過不足があれば損害金、商品を壊せば損害賠償が日常的に繰り返される。それは仕方がないと考えるＦ氏は、だからそういうことが起きないように、日頃から準備をするのが大切で、そのために「義理と人情と恩返し」の心構えが大切だというのである。なかなか含蓄に富む言葉である。

Ｆ氏の講演で、横浜港は昔、金港と呼ばれた時代があった、という話が出てきた。その言葉がずっと引っかかっていたので後日語源を調べた。すると、神奈川区役所のHPに「神奈川区の町の名」

というページがあって、神奈川＝金川の港、もう一つは「錦の港」だったことから横浜港は「金港」と呼ばれていた、とあった。

横浜駅東口の北側に「金港町」と言う町名があり、会社名にも「金港タクシー」があるので、「金港」自体はよく聞く名前だったが、まさか横浜港の別名だったとは知らなかった。神奈川の港→金川の港→金港となると、まるで三段落ち噺のようだ。誰がどういった時に使ったかまでは書かれていないが、黄金の国ジパングを連想させるし、大金が動いて羽振りが良かった時代の港を連想させる。

ついでにほかの項も見た。わが町「神大寺」（かんだいじ）は16Cの戦国時代にこの村にあった寺の名前だったこと、昔は「神台地」とも呼ばれたと新編武蔵風土記の一説が紹介されていた。「栗田谷」は昔住んでいた栗田某の名前に由来し、「白楽」は白楽山、「斎藤分町」は斎藤兼実（かねざね）という武士の知行所（領地）を示す「斎藤分」に由来し、「白幡」は白幡神社に由来するとあった。また、地形から「菅田」は「洲の上の田」、「沢渡」は「沢を渡る場所」、「桐畑」は「開墾地の焼畑」、「羽沢」は「沢の端側」があった。そのほかには、「栄町」はS7年いくつかの町から分離独立した時に「縁起を担いだおめでたい名前」としてつけられたこと、「鈴繁町」はS33 年埋め立てで出来た町に進出してきた横浜倉庫（株）の取締役だった鈴木繁一氏から付けたともあった。また、「ガーデン山」という地名も、明治の資産家が私邸の庭園を「横浜ガーデン」として開放。地元に親しまれて地名が残ったという。横浜のように江戸末期に建設された新しい都市には古いものはないだろうと思っていたが、地名だけでも新旧入り混じって面白い。古いものは港に関係ない名前だが、新しいものは港や埋め立てに関係するものが多いことが面白い。　　（2014年4月18日）

横 13　大正活映

昔、横浜に映画撮影所があった。大正 9 年（1920 年）～11 年（1922 年）の間、元町プールの下にあった「大正活映」（以前は「大正活動映画」、略して「大活」と呼ばれた）である。大活の本社は山下町 36 番地（今のホテルニューグランドの裏側）で、撮影所は山手の外国人墓地下の三角地帯に建設された。
横浜で活躍した女性の掘り起こしを行っている五大路子氏は自らが主宰する「横浜夢座」の第 1 回公演（1999 年）で「横浜行進曲」、第 6 回公演（2007 年）で「ヨコハマ・キネマホテル」を公演した。2 作の間に 8 年の間隔があるが、いずれもあの大正活映で映画作りに集まった青年たちの物語を描き、横浜第 1 号の女優となった紅沢葉子を中心にトーマス栗原監督、脚本を書いた谷崎潤一郎らの活躍を紹介した。

大正活映は、東洋汽船社長の浅野良三が 1920 年 4 月に、本社を山下町 31 番地、撮影所を山下町 77 番地（現在は元町 1 丁目 77 番地）において設立した。大活では、ハリウッド俳優だったトーマス栗原を撮影所所長（監督）にして、脚本を作家の谷崎潤一郎が書いて、無声映画の製作と配給を行った。

1922 年、松竹キネマへ版権を譲渡し、3 月に映画製作を終了して、大正活映は消滅した。

この撮影所の第 1 作は、栗原監督、谷崎原作による「アマチュア倶楽部」（当初の題名は「避暑地の出来事」）で、鎌倉由比ガ浜を舞台にプレイボーイとおてんば娘が展開するアメリカンコメデイ風の作品だった。トーマス栗原がここで行った工夫は、第 1 に、主演女優に谷崎の千代夫人の妹せい子を葉山三千子の芸名で出演させ、夫人の千代、娘の鮎子らの素人を大勢使ったことである。それ以前の映画と言えば歌舞伎出身の俳優が主流だったので、アマチュアの若者を主演や脇役で大勢使う映画は斬新だった。第 2 に、主演の葉山三千子を水着姿で登場させて脚線を露出して、これまで日本女性と言えば和服姿しか見たことがなかった観客を驚かせた。第 3 に、以前の据え置かれたカメラの前で俳優が演技する映画作りの手法から。海辺を走る女性を撮影したり、クローズアップを多用して人の自然な表情をとるなど独自の映画作り手法を採用した。
この第 1 作は斬新なアイデアにあふれたもので好評だったし、興行的にも成功をおさめた。

こうした新しい映画作りは、ハリウッドで映画修業を積んできたトーマス栗原のアメリカ流映画観と作家谷崎潤一郎が主張した現代生活から遊離した女形が登場するような古臭い映画は廃止すべきだとする純映画運動論（「映画芸術論」）を反映したものだった。当時谷崎は、35 歳で小田原に住んでいたが、文壇の寵児で、千代夫人を佐藤春夫に譲渡する問題‘小田原問題）を抱えていたが、映画製作に強い関心を持ち大活文芸部顧問へ就任して、夫人を小田原へ残したまま単身で横浜（本牧宮原 883 番地）へ引越してきた。
なお、この本牧時代の谷崎については別途「チャブ屋」の項で紹介する予定である。

このように日本映画刷新に取り組んだ大正活映は、設立から解散までわずか 2 年弱の間に、30 本の映画を製作し、多くの人材を育てたが、2 年後に廃業するのだが、その理由についてはよく判らない。世界大恐慌の影響を受けて、浅野良三の父・浅野総一郎が起こした東洋汽船の本業の低迷と始まったばかりの日本映画づくりの混乱ではないか思われる。

まず映画づくりについては、1895 年リュミエール兄弟がパリでシネマトグラフ（スクリーンへ映す映写機）を上映して初めて映画上映が始まった。それから 2 年後の 1897 年、留学生でオーギュスト・リュミエール（兄）と同級生だった稲畑勝一郎（京都の染物屋）が日本へ持ち帰って、日本の映画がスタートしたと言われている。1903 年に浅草に初めての映画専門館「電気館」がオープンし、以降各地に映画館が誕生した。

これに対して映画製作面では、初めは演芸の幕間に上映される短編映画や日露戦争の戦地ニュースが作られていたが、初の本格的な劇映画は 1908 年牧野省三の「本能寺合戦」によってつくられた。好評で続いて「碁盤忠信」（1909 年）、「忠臣蔵」（1910 年）が制作された。それに伴って、東京で吉沢商会（1908 年）や京都で横田商会（1910 年）などが各々撮影所を設置された。1912 年

にこれら最古の撮影所 4 社が合併して「日本活動写真社」(日活と呼ばれた。)になり、本格的な映画作りが始まった。

1914 年に第一次世界大戦がはじまり、欧州の戦争で被害を受けずに急激な輸出拡大を遂げて漁夫の利を得た日本は好景気に沸くようになると、映画にもその影響が及び、1919 年国際活映、1920 年帝国活動写真(1921 年松竹キネマに改組)などが続々と誕生した。ここには横浜で誕生した大正活映(「大活」、1920 年)もその一翼を担った。特に大正活映は、第一次大戦後のハリウッドの映画技法やスターシステムなどを移入したため、映画を新しい芸術表現手段とする道を開いた。しかしながら、1923 年の関東大震災で、すべての在京、在横撮影所が壊滅したため、こうした運動は頓挫した。

大きく見れば、初期の日本映画は第一次世界大戦(1914 年～1918 年)後に急成長を遂げ、1923 年の関東大震災で終焉するのだが、横浜にあった「大活」は、それより 1 年も早く幕を閉じた。その理由は、大活の資本と経営が浅野総一郎に大きく依存していたためである。浅野は、1896 年に設立した東洋汽船でサンフランシスコ航路を看板にして豪華船を就航させた。1914 年に始まった第一次世界大戦でアメリカのパシフィック・メイル社が航路から撤退すると、空前の利益を得るようになった。浅野は次男の良三に東洋汽船を継がせる意図で彼をハーバード大学へ留学させていたが、1912 年に卒業すると再びサンフランシスコへ研修派遣し 1913 年に横浜へ戻った。東洋汽船では、常に太平洋航路の乗客のために船内で上映するアメリカ映画を購入していた。だから、サンフランシスコ滞在中の良三も手伝いをしていたと想像される。それだけでなく、当時上映されていた「A Trip Through China」という中国紹介映画を通じて、その製作者のベンジャミン・ブロツキーらとも知り合う。ブロツキーは 1913 年、横浜にバライエテイー・フィルム・エクスチェインジ社を作り、アメリカ映画の配給と上映機材販売を行った。

しかし、第一次世界大戦が終わり欧米からの観光客が大幅に減少すると、欧米の観光客確保が東洋汽船にとって急務になった。大戦前から始まった日本人排斥運動への対策のためにも、日本紹介映画を作成し、アメリカ本土や船内で上映して起死回生を図った。日本紹介映画は「Beautiful Japan」で、ブロッキーが製作することになり、1918 年その撮影のために来浜した。その時、ブロッキーは浅野と共同出資で東洋フィルム会社も設立した。

> Beautiful Japan は、大正、昭和初期に、日本が行った外客誘致キャンペーンのタイトル。1917-18 年、アメリカ国籍のユダヤ人映画人ベンジャミン・ブロツキーが、鉄道院の後援のもと日本全国を周り、日本紹介映画「Beautiful JAPAN」を撮影したものである。

1920 年、ブロツキーは東洋フィルム社の建物、機材を良三に残して同社を去った。その年良三は大正活映を興す。良三は、太平洋航路の客船で外国人観光客にアメリカ映画を見せるために映画購入をしていたのだが、今度は大活で映画の自社制作を試みたのである。しかしながら、期待し

た効果は得られず、1922 年良三は大活を松竹キネマへ譲渡した。その翌年の 9 月には関東大震災の被害を受けて壊滅していくのだが、こうしてみると、浅野総一郎と浅野良三らは、よく聞くような個人的な趣味で映画界へ参入したのでなく、東洋汽船の立て直しのためであった事情の方が強い。大正活映の製作した映画も利益を生むに至らず、がんばって芸術作品制作をしても赤字がかさむばかりでは、大正活映を手放さざるを得なかったと思われる。

（2014 年 4 月 20 日）

大正活映の碑

1920 年～1922 年、ここに大正活映株式会社の撮影所があったと記されている。この映画会社は浅野良三（浅野総一郎の次男）で総支配人はハリウッド帰りのトーマス栗原、文芸顧問に谷崎潤一郎がいた。ここでは古い映画でなく新しい映画作りを目指して「アマチュア倶楽部」など約 30 本の映画が製作された。なお、この敷地はもともとフランス人ジェラールが斜面の湧水を利用した水事業を起こして船舶へ給水した場所であると同時に、ジェラール瓦と呼ばれたレンガの製造工場があった場所である。写真の奥の碑が「大正活映の碑」で、左側の水道跡は水事業発祥の遺跡である。

横 14　大江橋

桜木町から尾上町へ向かう時に大岡川を渡る橋がある。これが「大江橋」である。今の橋は 1973 年（S48 年）に架け替えられたものだが、もともとは 1872 年（M5 年 5 月）に架設された。M5 年は、5 月 7 日に新橋横浜間の鉄道がひかれて仮営業が始まった時である（本営業は同年 9 月 12 日から）。当時の横浜駅は今の桜木町駅だったので、大江橋は鉄道の開通に合わせて、桜木町から居留地がある関内へのメイン道路として整備されたものである。この橋の名前は、マリア・ルス号事件で名を上げた大江卓に因んでつけられたと言われている。この大江卓はこの事件で中国人奴隷を解放したのだが、横浜で活躍する前のM4 年 8 月 28 日に公布された「賤称廃止令」（解放令）の成立に深くかかわりその成立を陰で支えるなど、この時期には珍しい人権感覚に富んだ政治家だった。

マリア・ルス号事件は、1872 年（M5 年）、嵐で緊急避難してきたペルー船マリア・ルス号に対して、横浜で国際裁判を開いて騙されて運搬中だった中国人奴隷 231 名を解放した事件である。

6 月 4 日、マカオからカヤオ（ペルー）へ向かっていたペルー船マリア・ルス号が時化にあって横浜港へ緊急避難してきた。3 日後その船から木慶（モクヒン）が逃げ出して停泊中の英軍艦アイアン・デューク号へきて、大勢の中国人が水夫として雇用契約したが奴隷の虐待を受けているので助けてほしいと言ってきた。アイアン・デューク号のワトソン船長はマリア・ルス号のエレイラ船長に事実

関係を尋ねるがらちが明かず、木慶の身柄を日本に渡す。はじめは神奈川県令の陸奥宗光は、船内は治外法権で、ペルーとは国交もない。これに手を出せば国際問題に発展すると考えて、彼を船へ帰してしまう。
しかし、その後も脱走者が続くので、ワトソン船長は英米公使に手紙を送って解決を依頼する。英米からの要請を受けた明治政府は、司法卿・江藤新平や神奈川県令・陸奥宗光は逃げ腰だったが、外務卿・副島種臣は積極的で、太政大臣・三条実美の了解を得て神奈川県参与だった大江卓を神奈川県権令（副知事）に任命しその解決に当たらせる。
7 月 4 日から大江を裁判長とするマリア・ルス号裁判を神奈川県庁で開いた。エレイラと英人弁護士デッケンズは、日本とペルーは国交がないので裁判権がないこと、日本にも公娼制度があって人身売買が常態化しているのだから奴隷制度の良しあしを裁く資格がないなどと主張した。これに対して大江は米人弁護士デビットソンとともに、日本にはペルー船の中にいた中国人が奴隷かどうかを審査する権限はないが、船内で彼らが暴力を受けて不当に自由を拘束されていれば、日本に住む外国人同様に彼らに自由を与えなければならないといって、9 月 13 日中国人たちが解放されることになった。

しかし問題はこれで終わらなかった。翌年の 1873 年 2 月にペルー政府は、マリア・ルス問題に対して謝罪と損害賠償を日本政府に要求した。この両国間の紛争解決のために、第三国のロシア皇帝による国際仲裁裁判が開催されることになった。ロシア皇帝・アレクサンダー2 世による国際裁判は 1875 年（明治 8 年）6 月に「日本側の措置は国際法上の問題はあるが、人道上から見れば当然のことをしたもので、日本が責任を追及されることはない」とする判決を出し、ペルー側の訴えを退けた。

大江と解放令について。
大江卓は横浜へ来る前のM2 年頃から参議大隈重信の屋敷へ出入りし、大隈が担当していた野非人対策（のびにん、浮浪者対策）のための救育所事業に関与した。そこで 13 代目浅草弾左衛門（団内記）と知り合い、彼らが取り組んでいた「被差別民の醜名除去」に共感して、M4 年 1 月と 3 月に大江も「エタ等を平民とする建議」を提出するなどの支援をした。その功もあって、8 月 28 日「賤称廃止令（解放令）」が出されるという成果を生んだ。大江の支援があって 8 月 28 日賤称廃止令（解放令）が出されたと一部の人たちは言うが、実はそうではなく、弾内記が取り組んでいた賤称廃止問題はそれが幕府の身分制度を揺るがす性質の問題だったので、もっと奥深く長い歴史のある問題だった。

弾内記が実際にいつのころから自分たちの身分引上げを考えるようになったかよく判らないが、幕末時 1864 年の長州征伐で農民が「歩兵組」に加わり農民が武士と肩を並べて活躍すると、多くの人々は幕藩体制を支えてきた身分制度が崩れてきたと感じた。弾内記も同じで、数年前から幕府は函館に奉行所や人足寄場を作るので配下の非人を送れと指示があったし、長州征伐に弊馬や

兵士の遺骸収容のために長吏派遣や銃撃隊派遣の指示もあった。このため彼らは関東に散在する部落の壮年男子の名簿つくりを進めていた。幕府の指示は人足派遣に止まらず、御用金の寄付まで広がってくる。それに対して弾内記は、それらの要請にできる限り応えて幕府に協力し、手柄を上げて幕府の役に立つことで被差別民の身分引上げを図る戦略を考えていた。

そんな折に、将軍家茂や慶喜の典医だった松本良順が新町の弾内記の屋敷を訪問する。松本良順の真意は弾内記に薩長側につかないように求める要請だったが、そのために醜名廃止を支援すると述べたという。弾内記は松本良順との間で、まず弾自身の身分引き揚げ、次いで弾を支える幹部の身分引き揚げ、最後に被差別民全員の身分引上げというように段階的な措置を考えていた。ところが、1868 年慶応 4 年 1 月 3 日鳥羽伏見の戦いで敗色濃厚になって将軍慶喜が 1 月 12 日に江戸へ逃げ帰ってくると、翌 1 月 13 日弾内記は身分引上げの申し渡しを受けた。「出格の訳をもって身分平民に仰せられる」と北町奉行から申し渡された。2 月上旬には新町の手代 65 名の身分引上げも実現した。

そして、慶応 4 年 3 月 15 日から江戸城明渡しが始まって、4 月 11 日慶喜は寛永寺から水戸へ去って、徳川幕府は滅んだ。その後新政府は、慶応 4 年 5 月中旬に、これまでの寺社奉行→寺社裁判所、町奉行→市政裁判所、勘定奉行→民政裁判所に名前を変え、小伝馬町牢屋敷、浅草と品川の溜や石川島人足寄場はそれぞれの裁判所管轄に組み入れなどの組織改革が行われると同時に、弾内記に士分とすること、家職はこれまで通りで市政裁判所の管轄下に入る旨の処遇を言い渡した。

（2014 年 5 月 15 日）

中国から贈られた大旆（たいはい）。事件発生から 3 か月後の 1872 年明治 5 年 9 月 13 日、中国人奴隷 230 名は解放されて無事中国へ帰国した。帰国後、中国人たちは、事件の経過を書いた冊子「夜半鐘声」（よわのしょうせい）を発行するとともに、副島外務卿と大江県令に対して感謝の言葉を刺しゅうした「大旆」（たいはい）を贈った。

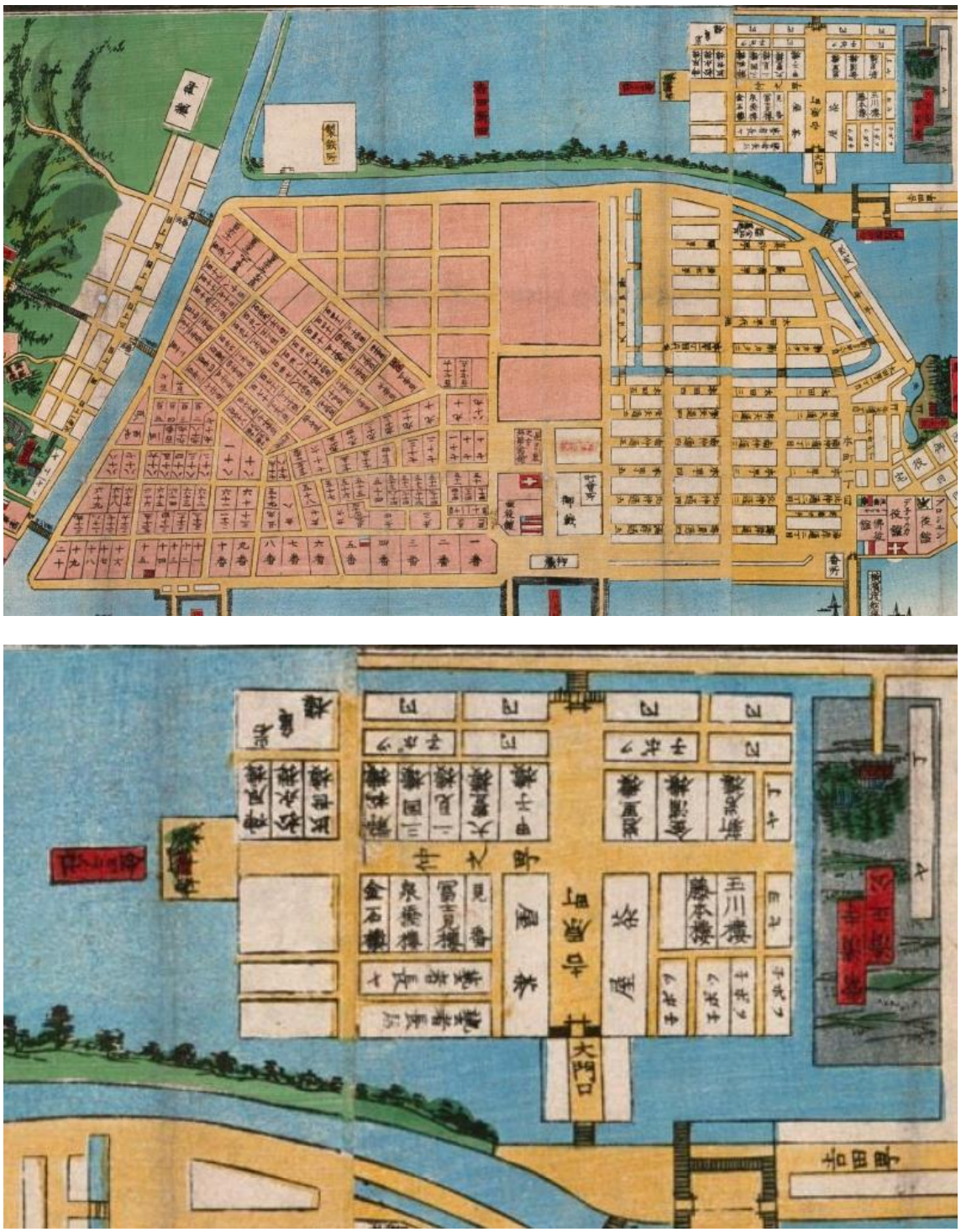
横 15　高島遊郭

前に岩亀楼のらしゃめん・喜遊が自害した話をとりあげた時に、幕府主導でつくられた港崎遊郭が 1866 年（慶応 2 年）豚屋火事（末広町・今の横浜市役所付近にあった豚肉料理屋鉄五郎の店から出火した火事）で全焼したところで記事が終わった。その後の横浜の遊郭がどうなったのかをしないままだったことがとても気にかかっていた。

岩亀横丁（西区戸部１丁目）

港崎遊郭は、幕府の命令で江戸で成功していた岩槻屋佐吉が太田屋新田の沼地を埋め立てて整備した遊郭である。安政 6 年（1859 年）5 月に営業を開始した。岩亀楼の喜遊の自害が文久 2 年（1863 年）1 月、慶応 2 年（1866 年）12 月に隣接した豚肉料理屋から出火した火事で焼失した（豚屋家事）。

普通ならすぐにも再建されるところだが、1864 年幕府と居留地外国人の間で結ばれた「覚書」で元の場所にはつくれなくなっていたので、翌年 1861 年、吉田新田（羽衣町）に作られて、羽衣遊郭あるいは吉原遊郭と呼ばれた。



羽衣遊郭。江戸吉原と同様に大門を入ると仲ノ町大通りとの交差点で、藤本楼、玉川楼、岩亀楼がある。

この羽衣遊郭もM4 年 1871 年火事で焼失。移転先を物色していたところ、高島町が埋め立てで造成されたため、地主や政府の許可を得て、1872 年に高島遊郭を整備した。

〔高島町時代の岩亀楼〕

ところが、今度はその高島遊郭の真ん中を新橋横浜間を結ぶ鉄道が通ることになって、1882 年までに移転することになったこうして 1882 年（M15）、今の南区の永楽町と真金町にまたがる地域へ移転し、「永真遊郭」と呼ばれた。

「永真遊郭」の時代になると、かって隆盛を誇った岩亀楼も次第に勢いを失ってきた。岩亀楼は高島時代に一旦経営難に陥り、創業者の佐吉も病に伏すようになる。それでも「永真遊郭」が開業して 2 年後の 1882 年に何とか進出を果たすが、翌 1883 年佐吉死去、1884 年台風で大きな被害を受けてそのまま廃業していった。

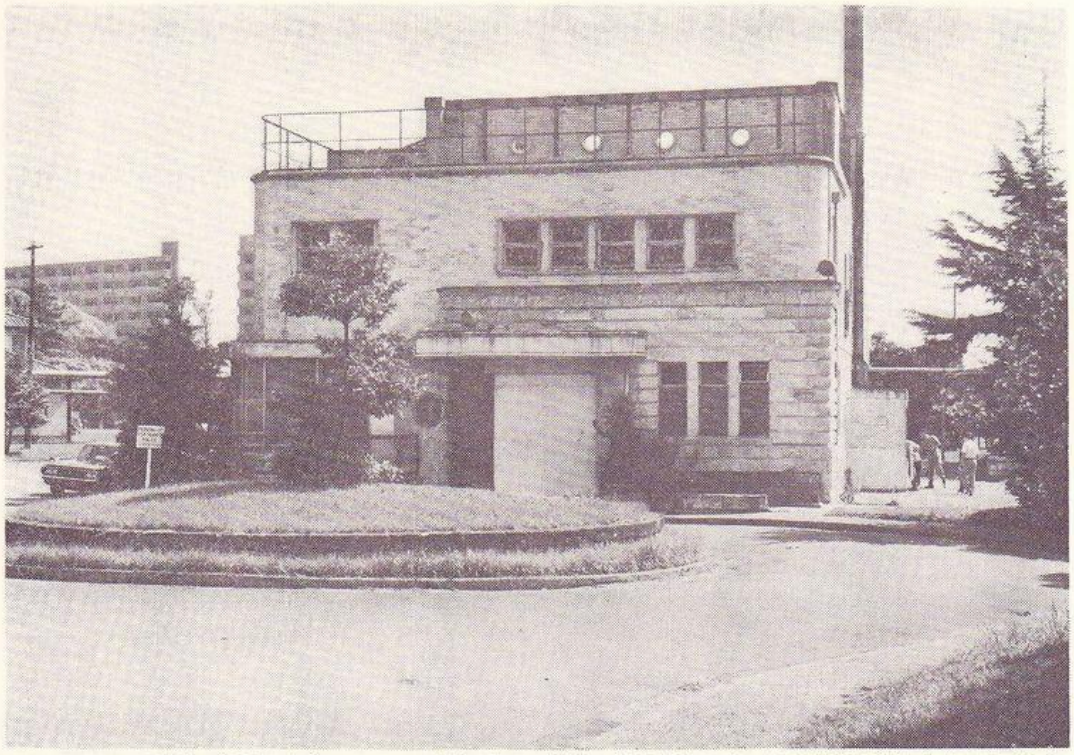
その後「遊郭」が 1958 年の「売春防止法」によって、昔「赤線」と呼ばれた合法的な風俗地帯が消滅した。その結果、「永真遊郭」も消滅した。ただ現在でも街へ入ると、昔の遊郭時代の名残があちこちに残っている。中央に広い分離帯がある道は昔の大門があった大通りの跡だし、その先の行き止まりには大鷲神社があり、昔のカフェーの跡のアパートの雨戸の戸袋には絵が描かれている、などである。

次いで、高島遊郭についてみると、国 1 の高島町交差点の以前東横線の高島町駅があったあたりが「高島遊郭」の跡になるのだが、今では何の痕跡もない。しかし、桜木町と高島町の中間あたりに、雪見橋から戸部 4 丁目交差点へ向ける通りに岩亀横丁がある。その通りの中央あたりに「岩亀稲荷」が今も残されている。その説明板には、遊女達が病気療養した時に使った寮があって、その寮内に遊女達が信仰したお稲荷様があり、それが「岩亀稲荷」として今に伝わっていると言う。移転してきた高島遊郭には触れていないが、病気になった遊郭の女たちの寮がここにあったと書かれているのだが裏手で、通り名が「岩亀横丁」、「岩亀本店」という料理屋さんま遊郭があったに違いないと思われる。

（20114 年 12 月 7 日）

横 16　チャブ屋

横浜を代表する遊郭は永真遊郭である。永真遊郭は、高島遊郭がM13 年 1880 年鉄道建設で移転してM15 年 1882 年から始まり、S33 年 1958 年に売春防止法が施行されて遊郭が全国一律に廃止されるまで続いた。もちろん赤線（S21 年に公娼制度が廃止された時、特例措置で売春を営業許可したエリアのこと。警察が当時そのエリアを赤線で囲ったことに由来する。青線は警察の営業許可なしに売春をしていた飲食街で、警察ではそのエリアを青線で囲っていた）がここ一か所しかなかったわけではない。その外にも相鉄線和田駅の「楽天地」、南浅間町の「新天地」、京急線黄金町の「黄金町」などがあったが、最も一番横浜らしいところは「本牧」だろう。



スターホテルの建物（昭和56年）――チャブ屋の唯一の遺構，接収地内にあったが昭和57年にとりこわされた

本牧の北方や十二天の特殊飲食街は、遊郭と呼ばれたことはなかった。これらは明治期に出現して「チャブ屋」と呼ばれて、もっぱら外国人相手に売春をしていた点で他に類を見ない。チャブ屋は大抵が洋館で、1Fがバーとダンスホール、2Fが女性の部屋で宿泊出来た。広辞苑では「チャブ屋」を「卓袱屋」と書いて、横浜や神戸で発達した船員や外国人相手の手軽な小料理店をさすと言う。横浜では外国人が英語の CHOP HOUSE(チョップハウス、簡易食堂の意味)と言うのを聞いて、チョップ＋ハウス＝ちゃぶ＋屋と呼ぶようになったともいう。いずれにせよ、外国人相手の今の「スナック」のようなものだ。ただし、横浜のチャブ屋という時には、明治以来の古いタイプのものと戦後進駐軍用の新しいタイプの特殊慰安施設があることに注意する必要がある。ここでは、初めに明治

のチャブ屋、後半で戦後の進駐軍用のチャブ屋をとりあげる。

(1)明治のチャブ屋

本牧十二天の茶屋

根岸の茶屋

開港して間もない 1865 年、英米仏蘭 4 カ国と幕府の間で「横浜居留地覚書」が交換されて、山手から根岸湾にかけての丘一帯を周回するように外国人遊歩道が作られた(約 8.5km)。そのルート上に外国人専用の休憩所として 13 軒の茶屋(チャブ屋)もつくられた。最初は茶屋で酒や料理を初めて女性が接待をしたか、本牧十二天の場合は海水浴場(サマービーチ)で外国人の海水浴が始まって、酒、料理とともに風俗営業も始まった。

10 年ほどたった 1877 年頃には当初の 13 軒のチャブ屋以外に本牧や北方に 30 軒ほどまで増えた。「あいまい屋」「もぐり屋」と呼ばれるようになった。

1892 年頃になると、チャブ屋は「外国人遊歩道」沿いだけでなく、中華街、横浜公園、関内、寿町、野毛などへも広がった。この頃になると、建物の外観を洋風に改装しペンキ塗装され、内部のインテリアも洋風になった。名称も○○屋、○○楼が減り、○○ホテル、○○ハウスの屋号が多くなった。

1919 年には散在したチャブ屋を警察が小港と大丸谷の 2 か所へ集約した。小港に 26 軒、大丸谷に 16 軒だった。断髪したドレスの女性がお酒やダンスの相手をした。

日本人がチャブ屋へ出入りするのは 1923 年の関東大震災以降だが、それ以前から著名人はしきりに出入りしていた。谷崎潤一郎が有名で、1921 年本牧のチャブ屋キヨホテルの隣に引っ越してきて、チャブ屋へ出入りした。その様子を谷崎は「本牧夜話」に書いている。

大正 10 年頃の横浜本牧海岸にあった別荘(サマーハウス)での複雑な恋愛関係を描いた話。

別荘主の日本人夫婦は夫が混血、妻が日本人で、別荘で夜毎ダンスパーテイを繰り返していた。夫セシルは外国人の女性ジャネットに浮気。妻初子は、客のロシア人アレキシーノフから好意を寄せられるが、内気で生真面目だったのでその浮ついた雰囲気になじめない。そのロシア人はジャネットにも恋していた。恋愛関係のもつれから夫セシルはピストルで愛人ジャネットを殺し、自らも自殺する。アレキシーノフは結局初子の妹弥生と結ばれて、初子だけが残される。このように、登場人

物のうち日本人は初子だけで他は全部混血か外国人ばかりという多国籍の人々が日本離れした別荘で起こしたハイカラな事件だった。

谷崎の脚本の冒頭に書かれたセット説明もハイカラだ。
「赤ペンキを塗った和様折衷の平屋。ベランダがあり、前方に芝生の庭、後方に生垣があってその外は砂浜の道路で真直ぐ海へ続いている。庭から室内が見渡せる。中央にテーブル、鋳巣が、5,6脚、壁に食器棚、ベランダ近くに長椅子、小テーブル、棕櫚の植木鉢がある。
・・・夏の夜である。幕が開く前にフォックス・トロットの蓄音機の奏楽につれて、男女数人がダンスをする足音が聞こえる。(やがて幕が上がる)大勢が踊っているのは奥の部屋らしく襖が閉まっているので人影は見えないが、華やかな電燈の光がちらちらと戸の隙間から食堂の方へ洩れている。食堂の燈はすべて消えていて、誰もいない。ただ飲み散らかした酒やソーダ水の壜やコップが卓上に残されている。しばらくの間、ダンスに熱狂する賑やかな足音が一定のリズムを繰りかえす外には、辺りはしーんとして何も聞こえない。・・・」(「本牧夜話」PP1-3　(谷崎潤一郎「愛なき人々」所収、改造社、大正 12 年))

ここに書かれた海辺、ダンス、洋風調度品などの叙述から、このサマーハウスは当時谷崎氏が住んだ本牧の自宅かそうでなければ隣接のキヨホテルではないかと思われる。本牧のこの辺りは今では海辺ではないけれど、大正 10 年頃と言えば本牧十二天に海水浴場があったように、このあたりは本牧海岸だった。また、キヨホテルのようなチャブ屋というと 1F にピアノがあるホールで蓄音機からジャズが流されて、昼間からダンスをしていた。2F は女性の自分の部屋で、売春が行われていた。このサマーハウスは平屋建てであるが、チャブ屋を髣髴とさせる。

＊谷崎が「本牧夜話」(戯曲) を書いたのはＴ12 年で、翌年 13 年には日活で映画化された。もともと彼は映画に強い興味を持っていて、Ｔ9 年に初めて彼は映画「アマチュア倶楽部」を作っていた。谷崎が原作を書いた。そのことは以前に横浜に映画撮影所があったことを紹介した時に述べたことがある。

ミナト横浜で発展したチャブ屋は、1923 年の関東大震災でその多くが倒壊したが、その後いち早く立ち直って、次第に日本人客も出入りするようになって、繁栄した。谷崎がいた頃がもっとも繁栄した時代だった。しかし、今度は太平洋戦争が始まり、1945 年の大空襲ですべて焼けて、明治のチャブ屋は壊滅した。

(2)戦後のチャブ屋

1945 年 8 月 15 日日本が敗戦すると、8 月 30 日マッカーサーが指揮する第 8 軍が横浜へ進駐した。

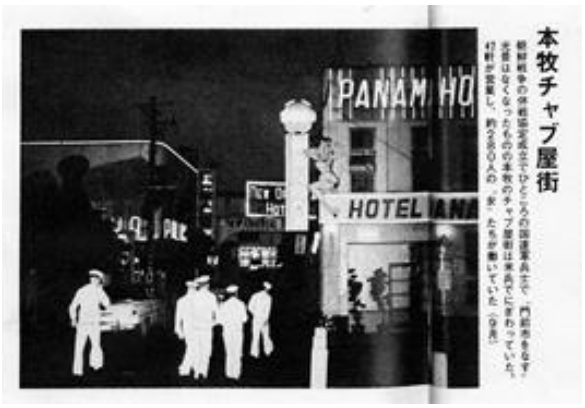
最初は進駐軍から慰安施設が欲しいとの要請で、神奈川県警が市内の公娼私娼業者に共同経営させて慰安施設「互楽荘」（山下町）を用意した。9 月 1 日にオープンすると米兵が列をなして押し寄せたため、それぞれの地区で営業するよう方針変更されて 1 週間で閉鎖した。
その後、横浜では小港 3 丁目、本牧 2 丁目に 42 軒のチャブ屋が復活した。言うまでもなく、進駐軍専用で、日本人はオフ・リミットだった。

終戦直後の昭和 20 年 9 月、小港周辺は米軍が接収し、「米軍海浜住宅 1 号地」として金網が張り巡らされた。そこにはあたかもアメリカの住宅地のような外観を呈した。しばらくすると、接収地の反対側の道一本隔てた小港 3 丁目や本牧 2 丁目辺りに新しいチャブ屋が建ちだした。続いて朝鮮戦争が始まると、来店する兵隊もそれまでの英米仏だけでなく、オーストラリア、フィリピン、コロンビアなど多様な人種が加わって、この一帯はますます栄えた。お客は進駐軍を中心とする兵隊限定で、日本人はここでもオフだった。昔風の遊郭でもなく、ヤクザが支配する場所でもなかった点では戦前のチャブ屋と共通するが、気が荒い兵隊相手のパンパン娘が出入りし、一戸建て二階屋だった昔のチャブ屋とはその中身も雰囲気も全く異なる街になった。

S28 年に休戦協定が結ばれた。この戦争では日本は米軍の基地で、戦争物資の調達先になったので、特需景気に沸き、チャブ屋の景気も大いに沸いた。昭和 33 年 1958 年に売春防止法が施行まで続くが、今では跡形もない。

本牧では、昔のチャブ屋と大きく違う点があった。
谷崎の住まいやキヨホテルがあった場所はすべて進駐軍に接収されて、土地造成のうえアメリカンハウスが立ち並ぶ住宅地に変わった。そのあたりは市電の電車道以外は両側にネットフェンスが張られて進駐軍以外は誰も入れなくなった。
だから、戦後のチャブ屋は接収地に隣接した一角で始まった。今では本牧ふ頭として大規模に埋め立てられているので判り難いが、今の山手警察署の西側一帯がそのエリアだった。
もう一つの大きな違いは、戦前のチャブ屋は高級船員や焼香が出入りする店と下級船員や兵隊が出入りする店ははっきり分けられていたが、戦後は誰かれなしに出入りするようになったことである。小堺昭三「メリケンお浜の一生」は戦前から戦後の両方のチャブ屋を体験し、S44 年何者かに殺害された関根イチさんの伝記だが、そこにも覗える。

（2014 年 12 月 9 日）



パナマホテルの昼と夜

戦前と戦後ではチャブ屋の気風がまるで違った…という。横浜・本牧のチャブ屋も売春防止法施行と同時にその姿を消した‖昭和28年

横 17　外国人遊歩道

「外国人遊歩道」は、開港して間もない 1865 年、英米仏蘭 4 カ国と幕府の間で「横浜居留地覚書」が交換されて、山手から根岸湾にかけての丘一帯を周回するように整備された遊歩道である（約 8.5ｋｍ）。今では横浜の観光名所の一つで、区役所では「緑と洋館の巡り道」というキャッチコピーで売り出しを図っている。遊歩道のルートは昔のままだが、周囲の景観は大きく異なっている。昔は海や崖が見える風景だったが、今では大規模に埋め立てられて、高速道路が前面を走り、海岸線はずっと遠くへ移って、本牧崖も昔の景観を保っていない。それでも、昔つくられた根岸競馬場や白滝不動尊などは今もそのまま残っている。

(1)居留地

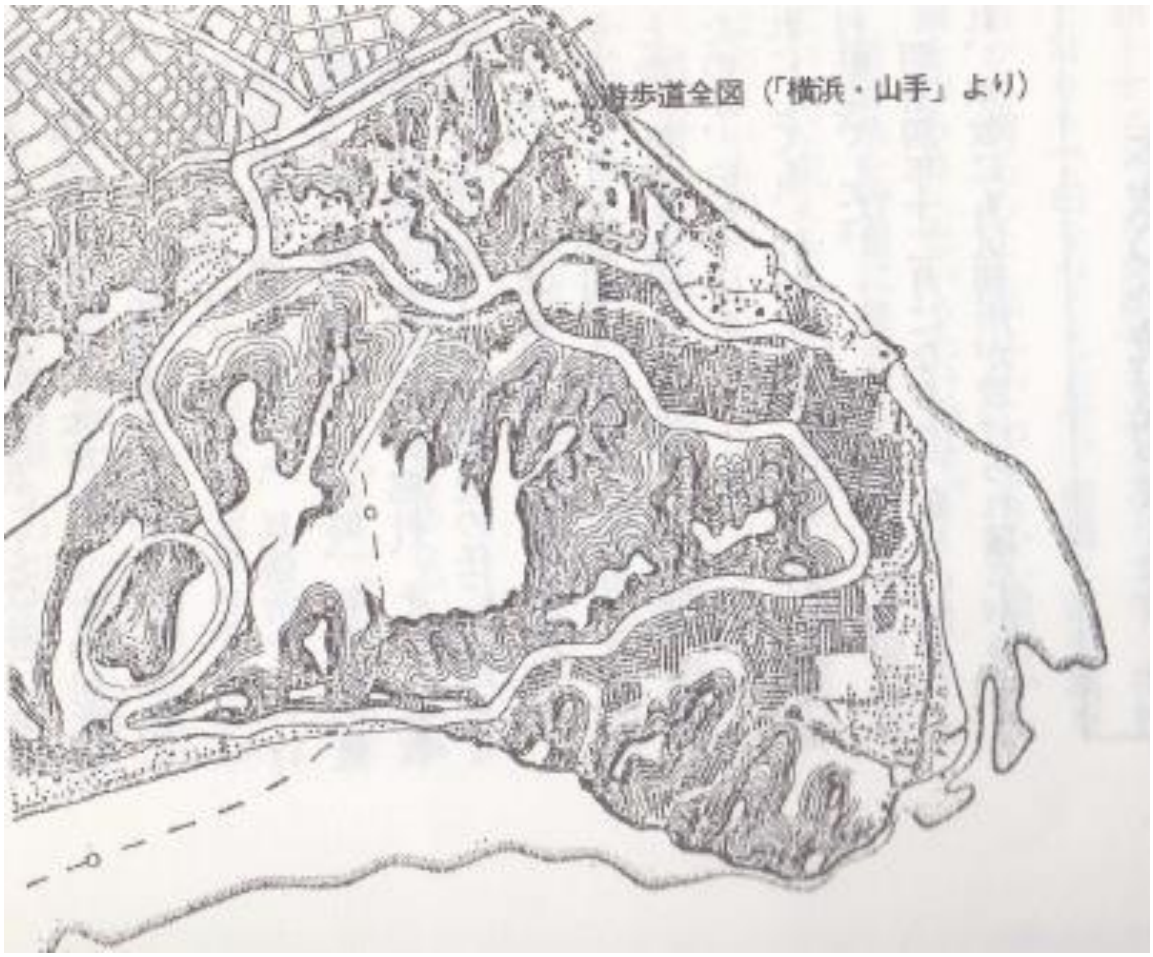
横浜に来た外国人は、初めは山下居留地だけに住んだ。沼地を埋めた造成地につくられた山下居留地は海と運河で囲まれていたため拡張の余地はなかった。貿易が発展し来日する外国人が急増すると、住まいを隣接する高台の山手へ移住する人々が増えて、山手居留地が生まれた。

M30 年頃の横浜居留地

通商条約で外国人のために 5 開港場（函館、横浜、新潟、神戸、長崎）と東京、大阪の 2 都市に市街を開くことが決められた。この開港場と市街に、外国人のために設けられた居住と営業できるエリアを「居留地」という。横浜には山下居留地と山手居留地があり、外国人と日本人がともに居住を許された「雑居地」はなかった。明治 4 年、1871 年までは出入りを取り締まるための関所があった。他の港の「居留地」の実態を見ると、横浜と長崎には「居留地」だけ、神戸、大阪、東京には「居留地」と「雑居地」、函館、新潟には「雑居地」だけが作られた。

横浜居留地は、開港直後の 1860 年に山下に開設され、順次山手にも拡大したが、1899 年 M32 年の条約改正により廃止された。しかし、山下町や山手には、1923 年 T12 年の関東大震災までは居留地時代と変わらない街並みがあったという。

1864 年元治元年 11 月に結ばれた「横浜居留地覚書」では、当時居留地に住む外国人に対して自由に移動できる範囲を横浜から 10 里以内と定めていた。しかし、実際には尊王攘夷を叫ぶ志士たちの襲撃の危険を感じながら生活しており、そこへ生麦事件が起きため、身近な場所の山手の丘に遊歩道が欲しいと望むようになった。



「横浜居留地覚書」には、根岸湾（ミシシッピーベイと呼んでいた。）を廻る長さ 4～5 マイル、幅 20 フィートの馬車道を作ることが決められていた。その他には狭くなった墓地の拡張、食肉の処理場、疫病を防ぐ官設種痘病院、射撃場、競馬場も要求されていた。上図にも、競馬場と射撃場があったことが記されている。

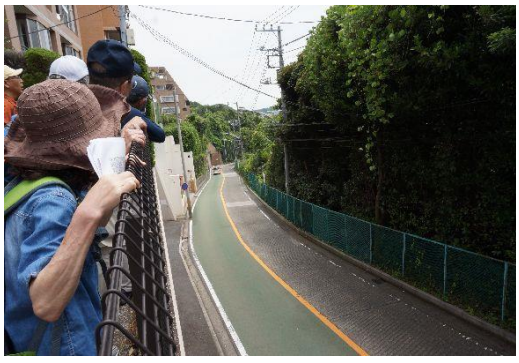
「本牧の歩み」によれば、この道はかっての畑や田んぼの中を通る細いあぜ道であったものを拡張したものだが、山手から小港、本牧、根岸を通ってまた山手へ戻る回遊ルートで、馬に乗って安全に散歩が楽しめる立派な道路だったと言う。だから、もともとの遊歩道は、元町から地蔵坂を上がり、麦田、和田山、間門を回って不動坂から根岸森林公園を抜けて再び地蔵坂へ戻るルートということになる。それにヒゲのように山手公園から北方を通って本牧十二天へ出るルートが併設していた。

実際の建設は、1863 年文久 3 年から山手へ駐留した英仏軍のうちの英国軍隊が指揮して一年で遊歩道は完成した。当時の居留地整備がそうだったように、費用は幕府が捻出した。
この遊歩道は丘の上を回遊するルートで、崖の上から岬や海を臨む独特な景観を持つ道だった。今では都市化と港湾埋立で海岸線がすっかり沖合に行ってしまったが、昭和 30 年代まで本牧十

二天や三溪園の前は砂浜の海水浴場だったし、本牧岬には白波が打ち寄せていた。しかも、M44年になると、桜木町から本牧まで市電が開通して（S45 年廃止）、関内や伊勢佐木町方面から遊びに来る人々も多かったと言う。今日でも遊歩道は残されていて歩くことができるが、歩行者専用の道ではなく、車も走り抜ける道になっているので、昔のような情緒はない。

（2014 年 12 月 14 日）

地蔵坂（遊歩道の起点）



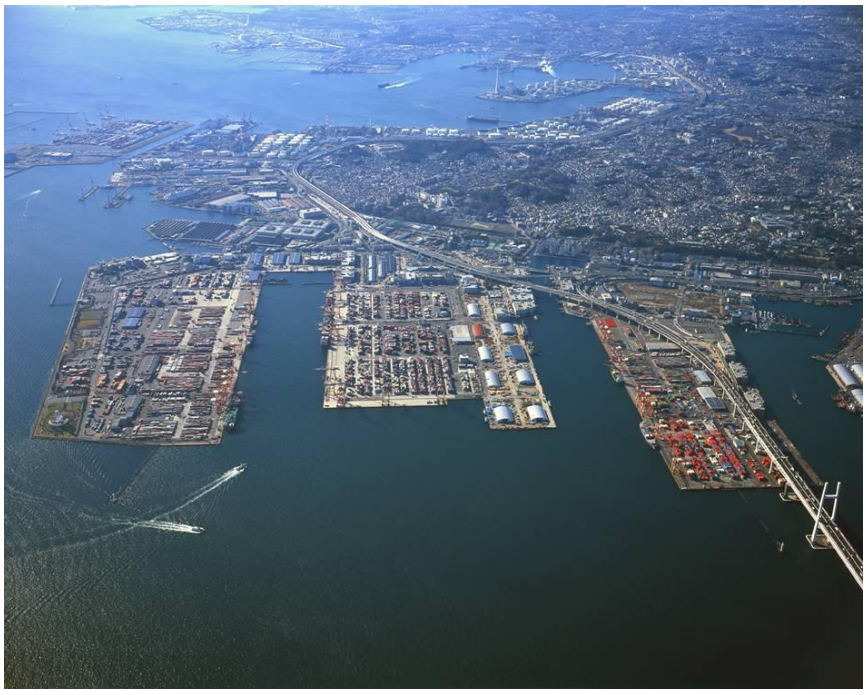
:シシッピーベイを眺めた）

白滝不動

横 18　本牧

本牧ふ頭は大黒ふ頭、南本牧ふ頭と並ぶ三大ふ頭の一つで、今のミナト横浜を代表するコンテナふ頭である。今の本牧ふ頭には、A,BC,D の 3 本のコンテナふ頭があって、四角いカラフルなコンテナがあちこちに山積みされていて活気がある。コンテナ山の間をコンテナを曳くトラックが走り回る。コンテナ山の向こうに、ふ頭があり、コンテナ専用船が横付けしている。岸壁に巨大なガントリークレーンが立って、そのコンテナを船の上に運び上げている。そのクレーンは大きくキリンのようで、大きいので遠くからもよく目立つ。しかし、キリンは岸壁に対して平行にしか動けないので、奥に置かれたコンテナをつかめない。奥のコンテナをキリンの下まで運ぶのはストラドルキャリアーという四足の巨大な箱型クレーンである。箱形のストラドルはお腹の下にコンテナを抱え込んで移動する。

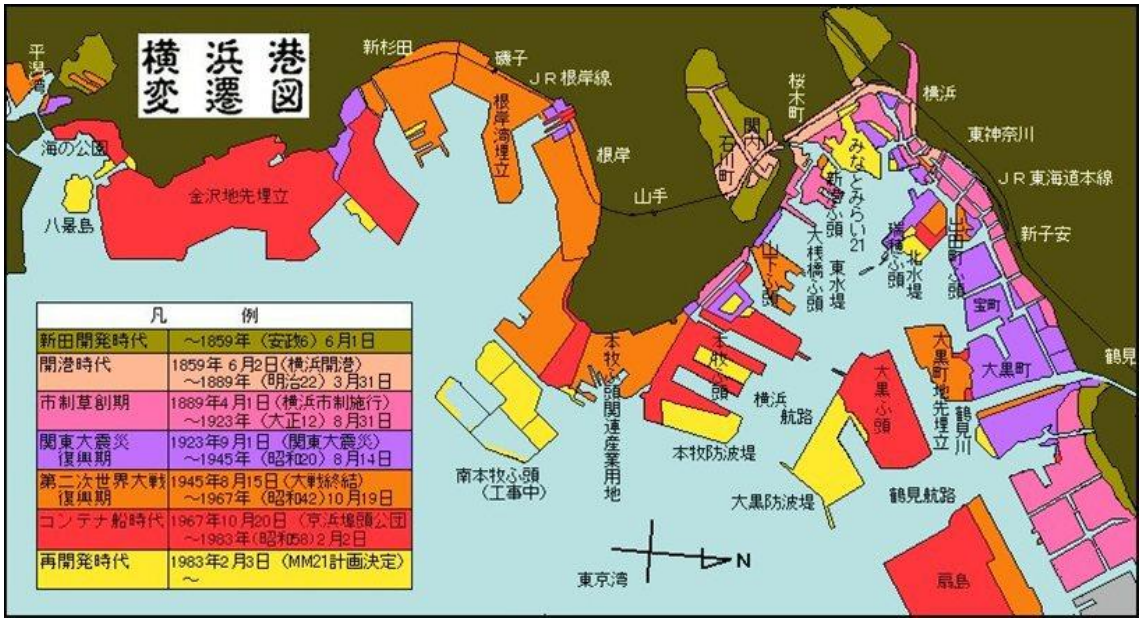
だから今のコンテナふ頭には人影がない。人がいないわけではない。キリンを動かす人、ストラドルを運転する人、船上には持ち上げられたコンテナを置く位置を確認する人、地上で運び上げるコンテナを見ている人などがいるのだが、あまりにも人数が少なく、その上に人が機械に比べて小さいので見えないのだ。以前オランダの港を見た時、無人のコンテナヤードというのがあって、コンテナの積み下ろし全部をコンピューターが操作する無人機で運搬するところを見たことがあった。だから、もっと省力化を徹底すれば港から人影がなくなるのもそう先のことではない。



（今日の本牧ふ頭）

本牧ふ頭は、もともとコンテナ専用バースとして計画されたふ頭ではなかった。ここは本牧海岸と呼ばれた海だったが、昭和 38 年から埋立が始まり 44 年に竣工した。埋め立てをしながら、本牧埠頭の整備も同時進行し、昭和 49 年にはあらかたの整備が終わった。その時の本牧ふ頭は 4 本のくし型ふ頭で、人力で積み荷の上げ下ろしをする在来船対応のふ頭だった。

それが昭和 42 年に北米航路にコンテナ船が走るようになって、急きょ整備途中の本牧ふ頭にコンテナ荷役に対応できるふ頭を作るよう方針変更された。それが昭和 49 年に完成した本牧A突堤である。4 隻の船が同時に着岸して荷捌きできるバースだった。その後船のコンテナ化と大型船化はとどまることなく進んで、平成 17 年には B 突堤と C 突堤の間も埋め立てられて一体の BC ターミナルとして使われるようになった。また同時にD突堤も突堤幅の拡張がすすめられた。だから今の本牧ふ頭は、A ふ頭、BC ふ頭、D ふ頭の 3 本のターミナルふ頭になっている。



（横浜市港湾局HP）

（明治、大正時代の本牧）

横浜港変遷図をみてもわかるが、横浜は開港以来前面の海を埋め立てて拡張し続けた港である。昔の海岸線が残されていることころはもうない。一番昔の海岸線に近い姿で残っているのは、不思議なことに山下公園のあたりである。この海岸も大正 12 年（1923 年）の関東大震災で大きく壊れたが、市内で発生した瓦礫をここへ埋め立てて、昭和 5 年（1930 年）に昔の海岸線をそのまま 30 mほど前へ出た形で臨海公園として整備された。だから一番昔の姿に近いのである。

さて、昔の本牧について。もともとの本牧は、半農半漁の寒村で、12 天像を祀り本牧六カ村の総鎮守府である本牧十二天社を中心にした集落だった。十二天社は本牧岬の先端に張り出した緑豊かな出島に建ち、その周囲は本牧海岸だった。

S7 年頃の本牧地形図

M17 年頃の本牧。

その本牧が多くの人々の前に初めて登場するのは、1865 年慶応元年 9 月 1 日に外国人遊歩道が完成した時である。遊歩道沿いには外国人相手の休憩所も作られ、その一つが十二天社のそばの本牧海岸にあった。ここは夏になると外国人居留民が海水浴を楽しむところだった。

この休憩所が、約 10 年後の明治 10 年 1877 年になると、北方を含めて 30 軒を越した。さらに 5 年後の明治 15 年頃にはチャブ屋と呼ばれるようになって、居留地の外国人だけでなく、外国船の船員たちもリキシャマン（人力車）に乗って頻繁に訪れるようになった。

明治 32 年 1899 年に居留地廃止が決まると、外国人相手だけでやって来たチャブ屋も多くの外国人客を失い、日本人も受け入れるようになった。明治 39 年 1906 年に三渓園が開園され、明治 44 年 1911 年に麦田トンネルが開通して市電が本牧まで延伸されると、本牧和田の山沿いは生糸商人たちの高級住宅が並び、十二天社がある海沿いはチャブ屋街になった。この頃からチャブ屋は本牧だけでなく、関内、伊勢佐木町野毛など市内各所に広がった。

しかし、大正 12 年、1912 年の関東大震災ではほとんどのチャブ屋が被災した。この震災以降、居留地の外国人の多くが神戸や東京へ移住し、船で来る外国人も大幅に減少したため、チャブ屋は公然と日本人の受け入れを始めるようになった。

（戦後の本牧）
昭和に入ると、世界恐慌とそれに続いた軍国主義が次第に強まってきて、本牧チャブ屋街は次第に衰退し、昭和 20 年 1945 年 5 月 29 日の横浜大空襲で灰燼に帰した。

戦後は、終戦直後の昭和 20 年 9 月、小港周辺は米軍が接収し、「米軍海浜住宅 1 号地」として金網が張り巡らされた。そこには「オフ・リミット」の看板が下り、あたかもアメリカの住宅地のような外観を呈した。 進駐軍による本牧の接収は 23 万坪に及び、そのエリアにあった本牧神社までも別場所に移転させ、ここでは電車道だけが接収から免れた。その接収は昭和 20 年から平成 5 年に区画整理事業の換地が終わるまで 47 年間も続いた。

接収は街づくりを止めてしまったが、その分、昔の地形をそのまま残した場所もあった。その典型が本牧十二天社のある出島とその周囲にある本牧海岸である。
かろうじて残された自然海岸だったが、昭和 40 年代になって、この海岸が埋め立てられて、貿易立国日本を支える港湾の一角をなす本牧ふ頭として整備されたのである。

（2014 年 12 月 14 日）

横 19　　横浜市電

1　横浜市電

(歴史)

【創業期】明治 37 年～

民間鉄道としてスタート。最初の市電路線は神奈川駅(青木橋付近)～大江橋(初代横浜駅、現在の桜木町駅前)の約 2.6km。大正時代になると経営難に陥り、大正 10 年(1921 年)、横浜市が買収し、横浜市電になる(横浜市電気局)。

【復興期】大正 12 年～

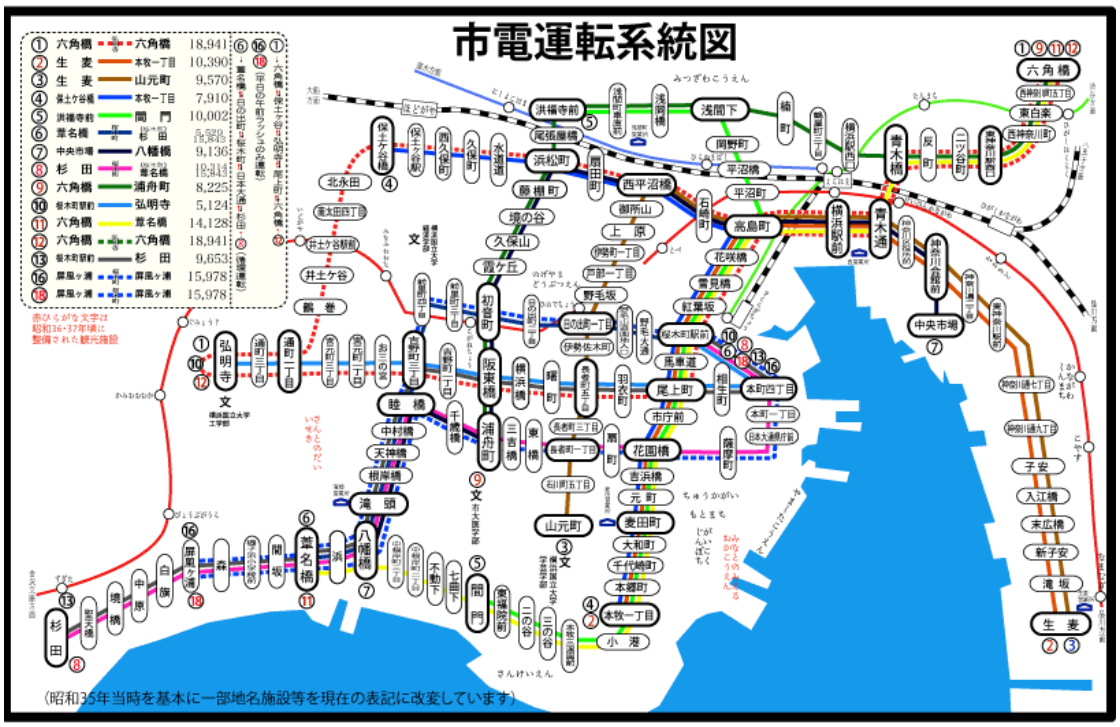
T12 年(1923 年)の関東大震災で甚大な被害を受けた。路線の見直しがされて、昭和初期にかけて横浜市電が最も拡張され、最盛期の路線網になる。

【戦後期】昭和 20 年～

終戦後横浜中心市街地は米軍に接収されるが、市電は市民の足として運行本数も回復し、1956 年 S31 年には生麦～杉田が結ばれて戦前の繁栄を取り脅した。

【廃止期】昭和 40 年～昭和 47 年

モータリゼーションが進み、恒常的な交通渋滞でり正常なダイヤ運行も困難になり、年々縮小された。1972 年 S47 年全面廃止。



（街とともに拡大した線路）

M37 年の開業当初の線路は、第 1 期が神奈川～大江橋区間である。その神奈川は当時、東海道神奈川宿にあって、東京と横浜を結ぶ京浜電車の終点でもあり、とてもにぎわっていた駅だった。これに対して、大江橋は当時の横浜駅（現桜木町駅）で、この駅は大江橋を渡って関内方面へ入る玄関口だった。

一年後の M38 年、第二期の大江橋～西之橋（現元町）が延長された。これ以降の民営化時代の路線延長の一覧表は次の通りである。

1905 年（明治 38 年）	税関線（住吉町～花園橋）開通
1905 年（明治 38 年）	住吉線（馬車道～住吉）開通
1911 年（明治 44 年）	本牧線（花園橋～本牧）開通
1912 年（明治 45 年）	羽衣線（馬車道～駿河橋）開通
1912 年（大正 1 年）	滝頭線（駿河橋～八幡橋）開通
1914 年（大正 3 年）	弘明寺線（駿河橋～弘明寺）開通
1916 年（大正 5 年）	戸部線（戸部 6 丁目～日本橋）開通

しかし、1923 年大正 12 年 9 月 1 日に発生した関東大震災で、横浜は壊滅的な被害を被った。横浜市では、建物全壊が 1.5 万棟、死者 2.6 万人に及んだ。よく東京の被害の大きさが強調されるが、当時の横浜市は面積比で東京の 10 分の 1、人口比で 5 分の 1 程度（東京が 20 万人、横浜 42 万人）だったので、被害は建物数、死者数ともに横浜の方が甚大だった。横浜の場合、特に大

岡川、中村川、掘割側に囲まれた中心部がひどく、その 80%が壊滅した。実際にも市電の線路は全滅状態で、道路、橋梁と一緒に破壊された。それでも震災後 1 か月たった 10 月 2 日の神奈川～馬車道間の復旧を皮切りに、順次復旧が始まった。復旧と同時に、各路線に延伸や改良、路線再編がおこなわれた。

1924 年(大正 13 年)	本牧線延伸(本牧～間門)
1925 年(大正 14 年)	杉田線新設(八幡橋～聖天橋)
1927 年(昭和 2 年)	千歳線(花園橋～千歳橋)、長者町線(長者町 5 丁目～車橋) 浅間町線(青木橋～洪福寺)
1928 年(昭和 3 年)	久保町線(久保町～塩田)、野毛坂線(野毛坂～西平沼橋) 子安線(金港橋～生麦)、杉田線延伸(中村橋～吉野町 3 丁目) 千歳線延伸(～睦橋)、柳町線(神奈川駅西口～東神奈川) 久保山線、長者町線延伸(～山元町)、羽衣線延伸(～尾上町) 本牧線延伸、太田町線、長者町線延伸、六角橋線(東神奈川～六角橋)、万国橋線、本町線、日出町線、
1929 年(昭和 4 年)	青木橋線、日出町線延伸、
1930 年(昭和 5 年)	平沼線延伸、浅間町線延伸、保土ヶ谷線

その復旧や再編を急ぐ様子を見ると、街が市電とともに発展し、機能してきたことを改めて考えさせられる。S30 年代の最盛期の市電路線とその駅勢圏をみると、総延長 52km の線路が現代の 7 行政区にまたがり、当時まだ市域が臨海部の 5 行政区しかなかった時代だったから、市電の駅勢圏が市域全部を網羅しているようだ。当時の横浜の人口は 40 万人程度で、市電が平均 30 万人/日の乗客を運んでいたというから、市の発展と鉄道網は、表裏一体の関係だったと考えられる。

(戦後)

戦争で横浜の町は再び壊滅的被害を被った。それに続いて、横浜港とその周辺を中心にして米軍による接収が始まる。昭和 26 年の平和条約締結によって接収解除が一気に進むかに思われたが、昭和 25 年に始まった朝鮮戦争の激化とともに、返還は遅れ気味になった。しかしし、昭和 27 年の平和条約の発効で、徐々に接収地返還が始まった。次ページの図は昭和 27 年ころの地図だが、まだ山下公園、大さん橋、高島ふ頭、ノースピアなどは空白になっており、接収中だったことを示している。接収中であっても、米軍は市電だけは最大限走らせた。

(2014 年 12 月 24 日)

私が住む六角橋周辺の話

市電六角橋線は 1928 年(昭和 3 年)12 月 28 日に東白楽～六角橋間が開通し横浜駅と繋がり、次の三路線の起終点になった。

① 六角橋から「弘明寺」間を往復する循環線「1 系統」、
② 浜松町を経由し久保山越えし阪東橋から浦舟町までを走る「9 系統」、
③ 高島町から尾上町・麦田町・本牧間門を経由して芦名橋までを走る「11 系統」

「六角橋」は、江戸時代から大綱村と神奈川湊を結ぶ南北の道と、小机と神奈川宿を結ぶ東西の道が交差する交通の中継地だった。明治に入ると、小机・神奈川宿を結ぶ東西路が生糸を運ぶ道としても栄えた。
六角橋が商業地として存在感を持つようになるのは 1917 年(大正 6 年)綱島温泉の誕生と 1926 年大正 15 年の東横線の開通が大きく影響している。特に、東横線が 1926 年(大正 15 年)2 月 14 日に「丸子多摩川～神奈川」間が開通して「白楽」駅が開業し、引き続いて 1928 年(昭和 3 年)12 月 28 日市電が開通したため、来街者が急増したという。

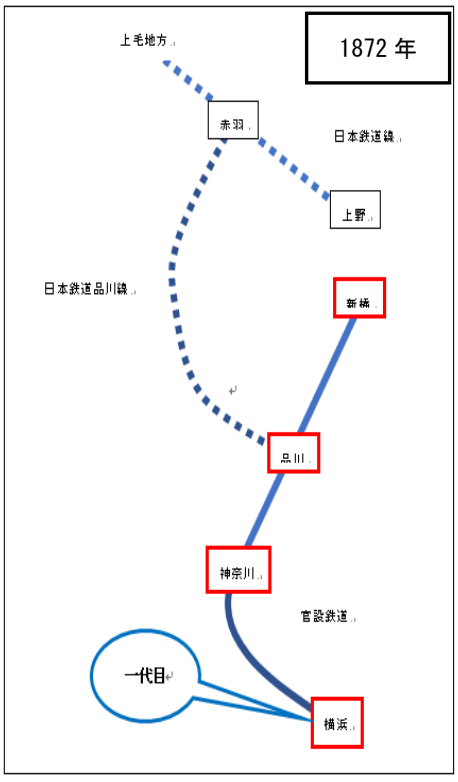
その後、1930 年(昭和 5 年)に「横浜専門学校(現:神奈川大学)」も移転してきた。これにより、六角橋は「学園」の街に変貌し、今日に至っている。

横 20　　横浜駅の変遷

初代横浜駅（現桜木町駅）

(1)　横浜駅の変遷

1872 年に開通した新橋～横浜間の初代の横浜駅は現桜木町駅である。明治政府が鉄道を必要としたのは、横浜港で輸出入する貨物を円滑に流通させるためという「物流」の担い手だった。とりわけ主要な輸出品の生糸を最も早く、大量に開港場の横浜港へ集めることが必要だった。

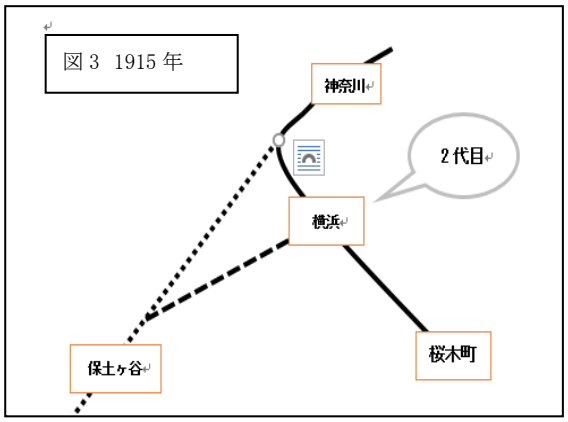


もう一つの開港場だった神戸も同様に「物流」の担い手として、1874 年に大阪～神戸間が開通し、その 3 年後の 1877 年には京都まで延伸されて、京都～神戸が全通した。

この時代に、鉄道の役割として物流のほかにもうひとつ軍事上の役割もまた強く求められていた。特に西南戦争の経験から兵員、武器その他の軍事物資の輸送に鉄道は大いに寄与すると考えられるようになった。

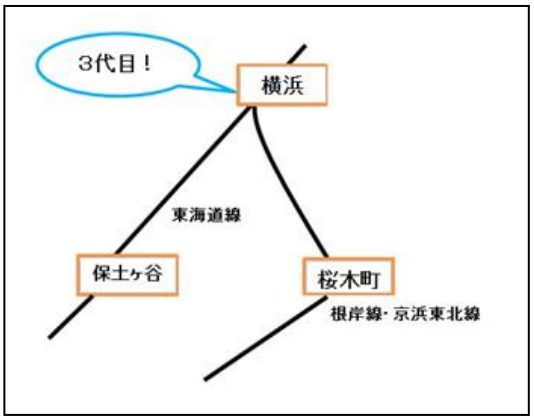
そこで東京～京都を結ぶ鉄道構想が持ち上がった。東海道ルートと中山道ルートが比較検討されて、中山道ルートの場合は上野起点だったため、赤羽～品川で両線の連絡線が構想された（図2）。1886 年に東海道ルートを優先すると決定し、直ちに着工。1889 年に東海道線が完成した。

この東海道線は、最短ルートを採用しため保土ヶ谷駅方向へ直進した。その結果、桜木町を横浜駅とする路線はヒゲ線になった。
そこで、1915 年大正 4 年、現高島町付近へ 2 代目横浜駅を移転し、1 代目の駅名も桜木町駅に改称した。同時にそれまでの神奈川駅を廃止した。



2 代目横浜駅（高島町駅）

次いで、1923 年大正 12 年関東大震災が起きると、2 代目横浜駅は地震に加えて火災も発生して、焼失してしまった。駅の再建をめぐり、再び駅位置問題が再燃した。三角形の 2 辺を通る既存の線形よりも、直線的で運行時間短縮にもなるなどから現在の位置が決定し、1928 年、3 代目横浜駅が誕生した。



3 代目横浜駅(現横浜駅)

(2) 消えた神奈川駅、

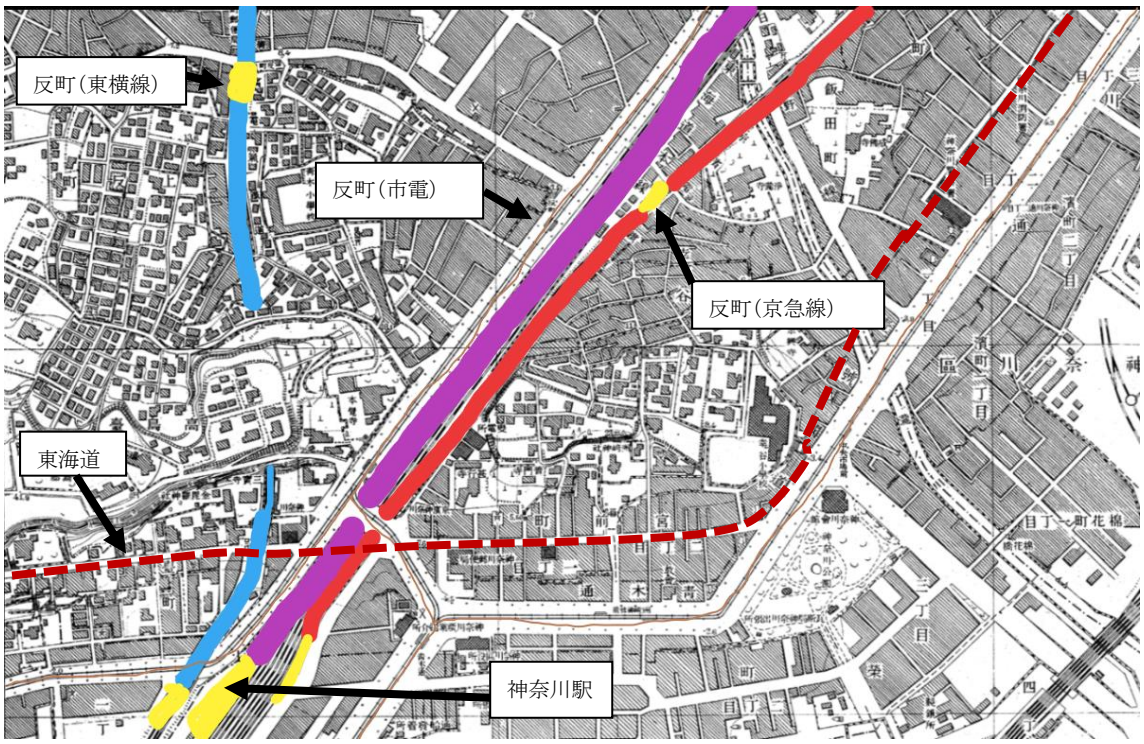
最初の新橋横浜間の鉄道開業の際(1872 年 M5 年)、中間に川崎駅と神奈川駅が設置された。当時の横浜は寒村で神奈川宿側から見ると海の先だったので、宿場町として栄えていた神奈川宿の一角に神奈川駅が設置された。

他方で横浜市は 1904 年 M37 年、横浜電気鉄道会社を作って路面電車を神奈川駅～大江橋(桜木町)まで走らせた。翌々年の 1906 年 M38 年に京浜電気鉄道(現京浜急行)が川崎～神奈川間を開業した。さらに大正 15 年 1926 年、東京横浜電鉄(現東京急行)も丸子多摩川(現多摩川)～神奈川間を開業した。

こうして神奈川駅は国鉄と 2 私鉄、市電の一大交通結節点となった。
国鉄神奈川駅は、現在の環状 1 号線が青木橋から横浜駅西口に向かって大きく右カーブする当たりで、今の線路沿いにあった。京浜電気鉄道の神奈川駅は線路を挟んだ海側で、今の線路敷が膨らんだあたりに作られた。また、東京横浜電鉄の神奈川駅は高島トンネルを反町側から入って抜けたあたりに作られた。

しかし、1928 年昭和 3 年、三代目横浜駅が開業すると、各路線の神奈川駅が影響を受ける。国鉄神奈川駅は廃止される。隣接していた東横線の神奈川駅も高島トンネルの横浜方出口まで一旦、移転するが、やがて 1950 年昭和 25 年に廃止された。京急の場合は、1930 年昭和 5 年、反町駅を廃止して青木橋駅を開設。続いて青木橋駅を京浜神奈川駅に改称。1956 年昭和 31 年に京浜神奈川駅を神奈川駅に再改称して現在に至る。こうして「神奈川駅」の名前は今で唯一、京急「神奈川駅」だけに残されるようになった。

↑　神奈川駅　　↓神奈川宿と鉄道線路


反町(東横線)
反町(市電)
反町(京急線)
東海道
神奈川駅

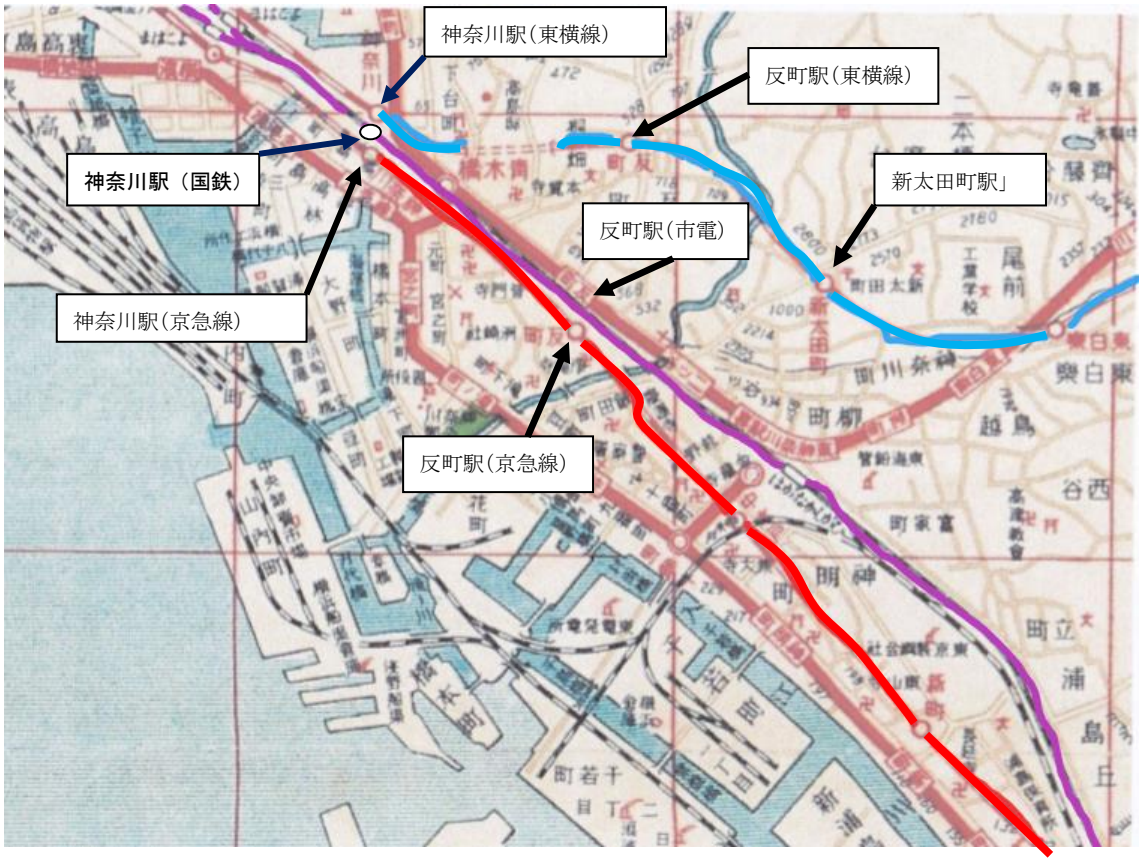
(4) 消えた京急「反町駅」と東横線「新太田町駅」

東横線「新太田駅」は、1926 年大正 15 年東白楽～反町間に設置されたが、1945 年昭和 20 年 5 月の横浜大空襲で被災し、営業を休止後翌年の 5 月に廃止された。1949 年昭和 24 年 3 月、反町公園の「日本貿易博覧会」開催で一時臨時復活されたが、同年 6 月、博覧会の終了と共に再び廃駅になった。今は隣接のマンション敷地に跡地を示すプレート板があるだけになった。

京急「反町駅」については、1906 年 M38 年に川崎～神奈川間が開業した時に、神奈川駅から川崎方向に向かって、反町駅、中木戸駅（昔は「中」を使っていた）、新町駅が作られた。その後、1930 年 S5 年、三代目横浜駅が現在の場所に移転すると、京急反町駅は廃止され、青木橋のそばに「青木橋駅」を新設する。しかし「青木橋駅」はすぐに「京浜神奈川駅」へ改称し、さらに 1956 年 S31 年になると「京浜神奈川駅」から「神奈川駅」へ再々度改称した。

京浜急行の反町駅は 1905～1930 年の 25 年間、横浜市電の反町駅は 1928～1968 年の 40 年間存在していた。そして東横線の反町駅は 1926 年以来今日まで営業を続けているから、3 つの反町駅が同時に存在していたのは 1928 年から 3 年間だけだった。

（2014 年 12 月 25 日）



	国鉄	京急	東急	市電
明治	1872　新橋～横浜開業 M5　（初代横浜駅） 1908 横浜鉄道が八王子 M41　～神奈川間開業 1910　横浜鉄道国有化 M43　横浜線に名称変更 1915　高島町に駅移転 T4　（2 代目横浜駅）	1906 川崎～神奈川 M38　開業		1904　神奈川～ M37　大江橋開業 1905　大江橋～ M38　西之橋開業
大正		1925 駅名変更(京浜 T14　神奈川、仲木戸）	1926 丸子多摩川 T15　～神奈川	
昭和	1928　横浜へ駅移転 S3　（3 代目横浜駅） 神奈川駅を廃止	1929 京浜神奈川駅を S4　移転 1930 京浜神奈川駅を S5　現位置へ再移転 反町駅廃止、 青木橋駅を 浜神奈川へ 名称変更	1927 渋谷～丸子多 S2　摩川開業し 渋谷神奈川直 通運転） 1928 高島町へ延伸 S3 1932 桜木町へ延伸 S7	1928　金港～生麦 S3　東神奈川～東 白楽
戦後		1956　京浜神奈川を S31　神奈川へ名称変 更		1966　生麦線廃止 S41　以降順次廃線 1971　市電全廃 S47

横 21　　山下公園

山下公園は港に面した L750m×W100m の臨海公園である。横浜を訪れる観光客の多くがこの公園へ来るし、横浜のイベントの多くがここを会場にして開催されている。だから市民もよそから観光客もみんな昔から山下公園が横浜の顔と考えている。しかし、この公園は関東大震災の震災復興で国が整備して市が引き継いだもので、昔からあったわけでもなく市民の総意から作られたわけでもなかったが、繁栄する港がみられる珍しい臨海公園として有名になった。

（1）横浜は関東大震災で東京よりひどい被害を被った。

1923 年大正 12 年 9 月 1 日、午前 11:53、関東大震災が発生した。震源は相模湾北部で、マグニチュード 7.9。死者行方不明者 14.2 万人、全半壊 25.4 万戸、焼失 44.7 万戸。うち横浜市では死者行方不明者 1.3 万人、全半壊 2 万戸、焼失 6.2 万戸だった。この震災ではよく東京の被害が強調されるが、当時の横浜は人口 44.8 万人、住宅戸数 9.9 万戸の時代だったから、都市の規模比較でみると、横浜の被害の方がひどいとみることができる。住宅被害を見ると、半壊、焼失などの合計数は東京が多いが、全損が東京 1.2 万戸に対して横浜は 1.5 万戸と上回っているほどである。震源地が相模湾だったので、南へ行くほどひどく揺れたと思われる。横浜の特徴は、その被害が港と都心部へ集中したことである。市内事業所の 90%が罹災し、関内周辺で約 80%の建物が倒壊した。横浜港では、大さん橋をはじめ、岸壁、護岸、物揚げ場、はしけだまり、防波堤が破壊され、

上屋、倉庫も倒壊して、港は壊滅的な打撃を被った。

表１－１　関東地震による住家被害棟数および死者数の集計［諸井・武村，2004 より引用］

府県	住家被害棟数							死者数(行方不明者含む)				
	全潰	(うち)非焼失	半潰	(うち)非焼失	焼失	流失埋没	合計	住家全潰	火災	流失埋没	工場等の被害	合計
神奈川県	63577	46621	54035	43047	35412	497	125577	5795	25201	836	1006	32838
東京府	24469	11842	29525	17231	176505	2	205580	3546	66521	6	314	70387
千葉県	13767	13444	6093	6030	431	71	19976	1255	59	0	32	1346
埼玉県	4759	4759	4086	4086	0	0	8845	315	0	0	28	343
山梨県	577	577	2225	2225	0	0	2802	20	0	0	2	22
静岡県	2383	2309	6370	6214	5	731	9259	150	0	171	123	444
茨城県	141	141	342	342	0	0	483	5	0	0	0	5
長野県	13	13	75	75	0	0	88	0	0	0	0	0
栃木県	3	3	1	1	0	0	4	0	0	0	0	0
群馬県	24	24	21	21	0	0	45	0	0	0	0	0
合計	109713	79733	102773	79272	212353	1301	372659	11086	91781	1013	1505	105385
(うち)												
東京市	12192	1458	11122	1253	166191	0	168902	2758	65902	0	0	68660
横浜市	15537	5332	12542	4380	25324	0	35036	1977	24646	0	0	26623
横須賀市	7227	3740	2514	1301	4700	0	9741	495	170	0	0	665

非焼失の全潰・半潰棟数は、焼失の他に流失・埋没被害も受けていない全潰・半潰棟数である。

(2)　震災復興で山下公園が作られた

関東大震災の場合、震災の翌日に 30 億円の「東京復興四方針」が、東京市長だった後藤新平から国へ提出された。①遷都せず②復興費に 30 億円をかける③欧米の最新の都市計画を適用する④都市計画実施のため地主に確固たる態度をとり不当利益をさせない、というものだった。その 4 日後の 9 月 6 日、閣議で、①総理大臣を長とする臨時帝都復興調査会の設置②復興経費を原則として国費、財源は内外債とする③焦土一括買い上げ、とする案がかけられて、③焦土一括買い上げ条項を除き、了承された。すると、10 月 22 日、復興計画内務省案（10 億円）が提出されて、約 3 か月間の議論を経て 12 月 24 日 4 億 7 千万円で事業計画と事業費が決定された。

注目すべきことは、9 月 1 日に震災発生後、わずか 3 か月半で事業計画と事業費が確定したことである。その事業実施主体は国と地方公共団体が役割分担して進めるというもので、その事業内容を見ると、区画整理は大規模な 15 地区を国、その他 50 地区を都が行う。街路も幅員 22m以上が国で、22m以下が都、3 大公園を国、その他 52 公園を都などと明確に役割分担がされた。それが事業の進捗スピードにも反映されて、約 20 万戸の 3,000ha の区画整理、街路 863km、橋梁 455 橋、3 大公園を含む 55 公園が 1923 年 12 月～1930 年 3 月までの約 6 年 3 月という驚異的な速さで実施されたことにも表れている。

横浜でも事業はほぼ同様に進められた。区画整理は国が 6 地区 165ha,市が 7 地区 165ha、街

路が国 30km,市 13km,橋梁は国 24 橋、市 63 橋、公園が国 3、市 2 という分担で整備された。国が整備した 3 公園が、山下公園、野毛山公園、神奈川公園である。山下公園は、震災がれきを投げ入れて整備された。

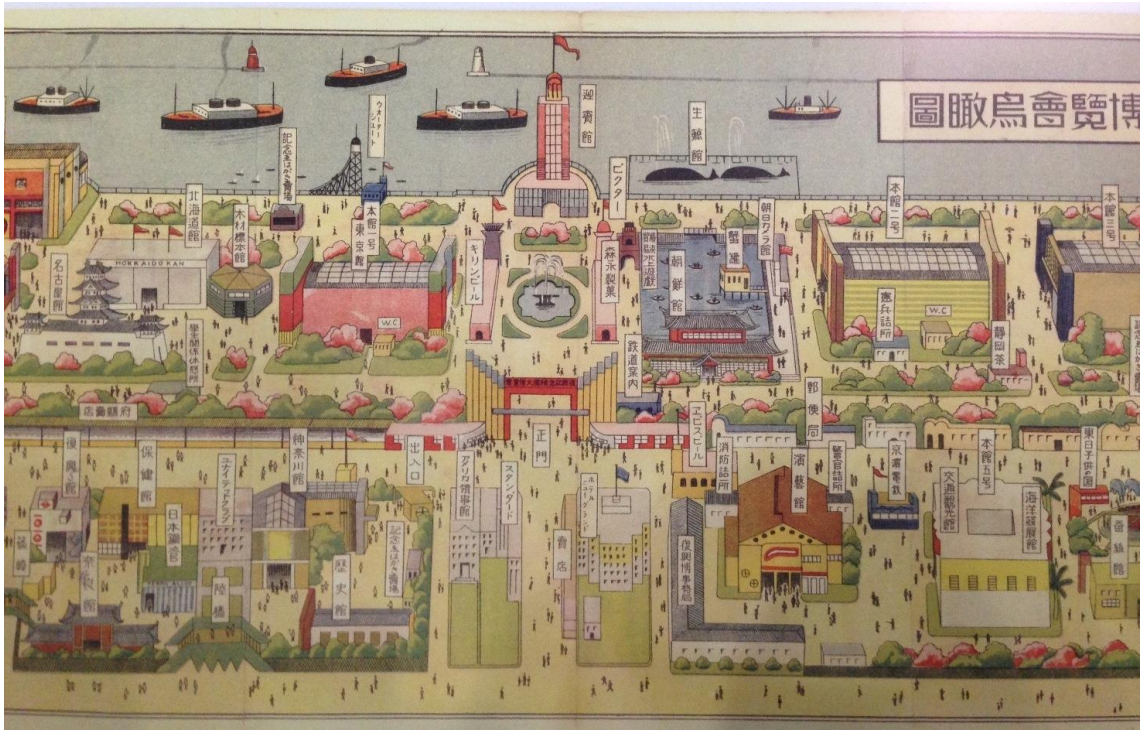
表 1－2　主要な帝都復興事業項目（復興局編「帝都復興事業概観」昭和３年をもとに作成）

	東京市・東京府に関する事業			横浜市・神奈川県に関する事業		
	国施行	東京市市施行	東京府施行	国施行	横浜市市施行	神奈川県施行
土地区画整理事業	15地区570ha	50地区2400ha 町名地番の整理		6地区165ha	7地区165ha	
街路事業	幹線道路（幅22m以上）52線115km 街路舗装 砂利採取場2箇所	補助線街路（11～22m）122線135km 舗装主要街路93km	国道改修（京浜国道他4路線16km）、環状線7線9km、放射線2線2.5km	13路線30km 相模川砂利採取場	10路線13km	京浜国道改修7.2km
橋梁	隅田川六大橋を含む幹線街路96橋 運河改修関連15橋 区画整理関連1橋	補助線街路134 区画整理関連52橋 改築84橋 補修仮橋194橋	六郷橋（神奈川県と共同施行） 千住大橋架橋	街路架設24橋 運河改修に伴う11橋	63橋	
河川運河	改修11路線 新掘1路線／埋立1		護岸擁壁工事	大岡川・帷子川の改修（延長5km）	千代崎川・滝ノ川改修7.5km 他護岸修築等22km	
公園事業	隅田公園13ha 浜町公園3.6ha 錦糸公園5.6ha	学校隣接の小公園51箇所（計15.5ha）		山下公園8.2ha 野毛山公園8.3ha 神奈川公園1.3ha	横浜公園、掃部山公園改修	
地下埋設	丸段坂共同管道270m					
学校建設		鉄筋コンクリート造三階建て112校	中学校等5校新設		小学校31校 商業学校1	商工実習学校等5校新設移転
上水道施設		復旧及び拡張（和田堰浄水池、山口貯水池等）			復旧及び新設拡張野毛山・吾妻浄水場配水池新設等	
下水道施設		復旧及び焼失地全域への付設			186haの汚水排水処理	
ガス施設					ガス製造貯留施設等新設	
塵芥処分施設		塵芥取扱所21所 処理工場2所4工場				
衛生施設		市立病院復旧1箇所 同新設5箇所			伝染病院、隔離所新設、十全病院新築他	
社会事業施設		職業紹介所18／婦人授産場5 託児並びに児童健康相談所10 公衆食堂10／簡易宿泊所10 浴場10／市営質屋7			職業紹介所3／公設市場4 簡易食堂2／託児所2 授産場3／公衆浴場3	
卸売市場		中央卸売市場築地本場 同神田分場・同江東分場			山内町本場5ha 吉町分場0.5ha	
電気事業施設		発電所1、変電所旧新設770台、建物87箇所			軌道復旧66箇所 支庁所復興2他	
地域地区		用途地域変更 甲種防火地区523ha 乙種防火地区58ha			用途地域変更 甲種防火地区62ha	
復興建築		防火地区建築費補助 復興建築助成金社			防火地区建築費補助 復興建築助成金社	

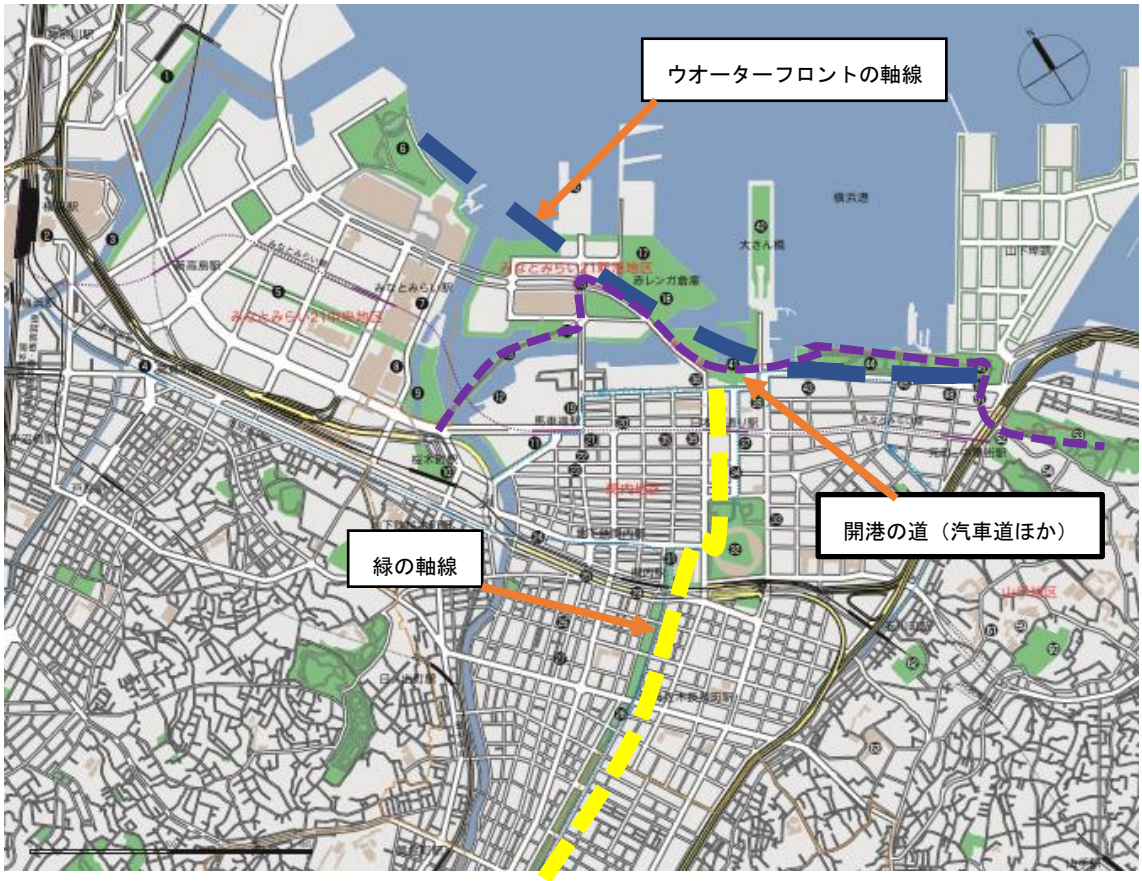
(3)復興記念横浜大博覧会

1935 年昭和 10 年 3 月 26 日～5 月 24 日までの約 2 か月間、山下公園で復興記念の大イベントが開催された。期間中で 329 万人の来場者があったという。山下公園には、1 号館から 5 号館まで各県と団体が出展、付設館として近代科学館、復興館、開港記念館のほか、飛行機と戦車を描いた陸軍館と、1 万トン級の巡洋艦を模した海軍国防館が作られ、館内に近代戦のパノラマがつくられた。特設館は神奈川館のほか満州、台湾、朝鮮などが出展。娯楽施設は真珠採りの海女館、水族館、子供の国などがあり、外国余興場ではアメリカン・ロデオは、カーボーイの馬の曲乗りと投げ縄や、オートバイサーカスなどがあった。

このイベントは、関東大震災から 12 年後に、横浜市が復興を記念して元気になった横浜の産業や貿易の実情を紹介するというのが主目的だった。「震災復興宣言」については、震災 7 年後の 1930 年、昭和 5 年 3 月に内務省と東京府、東京市は終結宣言をしていた。



(4)　ウオーターフロントづくり



整備された山下公園は、近年になっても横浜の顔の役割を果たしている。その事例がウオーターフロント軸の起点になっていることである。

横浜では、1970 年代から「都心部強化事業」に取り組んできた。みなとみらい 21 地区の造成整備に合わせて、横浜駅地区と関内駅地区に分断されてきた都心部を一体的な街に組み替えようという事業である。その目玉事業がウオーターフロント整備だった。港の見える丘公園～山下公園～象の鼻パーク～赤レンガパーク（新興ふ頭地区）～臨港パーク（MM 地区）を各々整備したうえで一体的利用ができるようにするもので、約 3kmの「開港の道」がその地区を貫く軸線になる。
このウオーターフロント軸に対して陸から海へ向かう緑の軸線も同時に整備されて、海と緑を活用した都心部の魅力づくりを図る。緑の軸線の主軸は大通り公園で、1978 年に地下鉄の埋設を機に運河を埋め立てて整備された（幅 30m×延長 1,2km）。その先に、市役所の中庭のような「くすのき広場」、「横浜公園」、さらに「日本大通り」が続く。その日本大通りの先端は「象の鼻パーク」を経由して「開港の道」に接続されている。この緑の軸線は開港のシンボルを結ぶ道ということもできる。

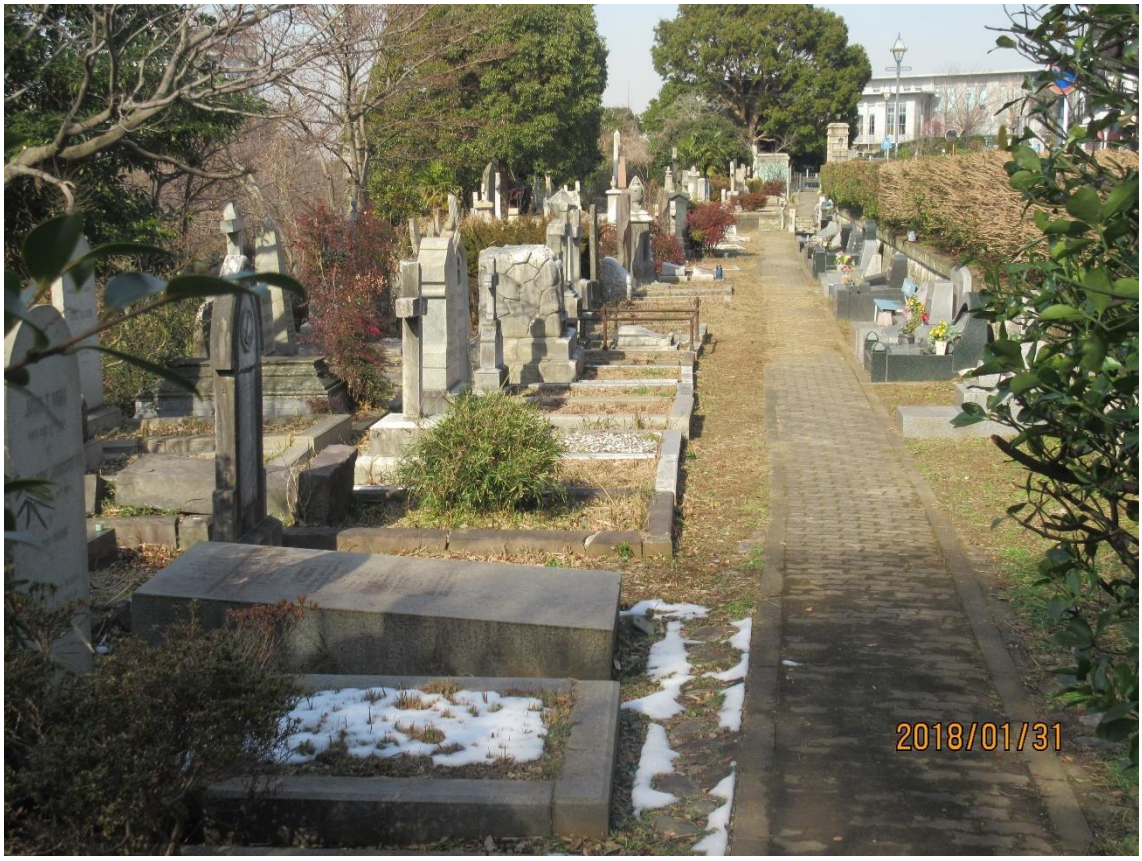
この「開港の道」構想について、私は当初から山下公園の拡大版で、「大山下公園構想」の一部分だろうと考えていた。山下公園は、それがある山下町の一角だけで完結される施設でなく、横浜港を取り巻くようにあるべきだと思ったからだ。「大山下公園構想」は、新興ふ頭や MM 地区へ伸びてゆくべきだし、さらにポートサイド地区、コットンハーバー地区、さらにノースピア地区へも伸びてゆくべきと思うのである。その場合の横浜港は今のコンテナふ頭を含まない、昔からの横浜港のエリアを指す「インナーハーバー地区」と言ってもいい。

山下公園のようなシンボリックな施設は、単体の施設としてとらえるのでなく、ネットワークの中の構成要素という風にとらえる発想が必要だろう。例えば観光事業がそうであるように、昔だったら特定の施設を見るのが観光の主目的だったが、今日では施設の中身だけでなく周辺の状況、背景、歴史、役割を一体的に見せて、人々がその中から自分の関心事を選んでみることが多くなっている。施設だけでなく、そこへ至るルート、その周辺の家々や人々、その歴史なども多面的に見せる演出をすることになると、それらを貫くドラマ、物語性が不可欠になる。横浜の場合、そのキーワードが「港」、「開港」、「もののはじめ」なのだろう。山下公園にはそのすべての要素が詰まっている横浜のシンボル施設だと思う。

（2018 年 1 月 7 日）

横 22　外国人墓地

横浜には 4 つの外国人墓地がある。よく知られているのは観光コースに取り込まれているので有名な山手の「横浜外国人墓地」である。そのほかに、大平台の「中華義荘」、中尾台の「横浜根岸外国人墓地」、狩場の「英連邦戦死者墓地」がある。外国人墓地は横浜に住み、あるいは仕事をしていて亡くなった外国人を祀った墓地である。歴史的に見れば、もともとは山手の墓地で一手引受けていたが、来日する外国人が増えて日本で亡くなる人が増えて墓地不足になったために、4 か所に分散されてきたことがわかる。



(1)　横浜外国人墓地

1854 年ペリーが二度目の来日をした時、停泊中のミシシッピー号で事故死した若い水兵の墓地を幕府に要求し、幕府が横浜村の増徳院(現在の元町 1 丁目付近)の境内の一角を提供した。ペリーがつけた「港が見えるところ」という条件に適合したので、その水兵はここに埋葬された。これが山手の外国人墓地の初めである。

1858 年日米和親条約で、下田が開港されると、下田玉泉寺にアメリカ人専用の墓地が作られて横浜に埋められた水兵ロバート・ウイリアムズの遺体も移された。これで横浜には外国

人墓地は一旦なくなるが、翌年 1859 年今度は批准書の交換に来ていたロシア艦隊の乗組員が本町通りで攘夷派のテロで殺害されて、その遺体が再び増徳院に埋葬された。以降横浜でなくなる外国人がここへ埋葬されるようになり、混雑して日本人墓地との区分もできなくなってきた。そこで、1861 年文久元年、幕府は日本人墓地を移転し、外国人専用墓地の区画が決定された（現在の墓地の元町側入り口付近）。

その後、来日外国人の増加に伴い、1864 年元治元年横浜居留地覚書、1866 年慶応 2 年横浜居留地改造及び競馬場墓地等約書などの取り決めのたびに拡張された（1880 年明治 13 年で確定された）。

この墓地には、生麦事件の犠牲者リチャードソン、井土ヶ谷事件のカミュ、鎌倉事件のボールドウイン、バードや居留地のパン屋、造船所技師、英仏駐屯軍兵士などが眠っている。貿易商らの多くは日本で商売をして儲けて故国へ錦を飾って死ぬ人が多く、横浜で埋葬される人は少なかった。それでも日本近代化に尽くした、フェリス女学院のメアリ・ギター、横浜共立学園ピアゾン、クロスビー、その他にワーグマン、コープランドなどの墓もある。関東大震災や戦災などで一部の記録が焼失したが、埋葬記録は 4, 800 柱あるが、墓石数は 3, 000 柱になっている。

（2）　中華義荘

中華義荘は根岸森林公園の近くの中区大芝台に、1873 年明治 6 年、建設された中国人墓地。通称、南京墓地と呼ばれている。横浜外国人墓地に埋葬されていた華人、華僑が移転した。この墓地には、地蔵王廟、納骨堂（安骨導）がある。地蔵王廟は道教の神様である地蔵菩薩を祀るお堂である。地蔵王は地蔵菩薩の尊称である。中華義荘は当初には中国の故郷へ棺を送るまでの仮埋葬の場だったが、次第に永眠する人が増えた。現在、ここには約 5,000 人が眠っている。

（３） 根岸外国人墓地

1902 年明治 35 年、山手の横浜外国人墓地だけでは収容しきれなくなったため、中区中尾台に根岸外国人墓地が開設された。横浜市営の墓地で、欧米人、中国人などの外国人 1,200 人ほど埋葬されている。墓石は 300 柱ほどである。山手の墓地には開港やその後の

横浜の発展に貢献した人々が数多く眠っているが、この根岸の墓地に眠るのは無名の人たちである。

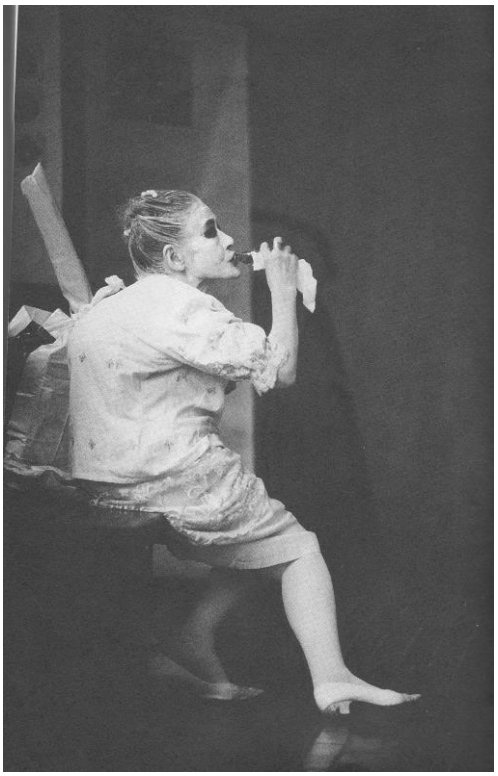
墓地の入り口付近に片翼がない「飛べない天使像」が建っている。1999 年に山手ライオンズクラブが建てたとある。この像は、戦後進駐軍が横浜を接収した時に米兵と日本女性との間に生まれ、秘かに埋葬された 900 体ほどの混血の赤子たちの慰霊碑である。根岸の墓地は、無名の外国人と並んで無名のえい児たちが眠るお墓なのである。

（注）900 体の赤子が埋葬されたというのは、郷土史家（元仲尾台中学校教諭）の田村泰治氏の「強弩横浜を拓く」（PP137～176）による。田村氏は埋葬された赤子は戦後アメリカ軍属と日本女性の間に生まれた子供たちと断定しているが、その根拠ははっきりしていない。

この片翼がない「飛べない天使像」をめぐって作家の山崎洋子氏が「天使はブルースを歌う」という著書で事の顛末を詳しく紹介している。山手ライオンズクラブでははじめ市営のこの墓地に慰霊碑を立てるということで市の内諾を得ていたのだが、実際にはここに眠る大勢の GI ベビーを祀る「飛べない天使」というモニュメントを作り建てることになり、市側では GI ベビーが埋葬されたというのは未確認情報だから建てさせないとなったのだ。＊

山崎氏はその著書で、つい最近まで関内周辺にいた「メリーさん」と 60 年代にはやった GS のゴールデン・カップスを取り上げて、戦後に米軍に占領されていた横浜の生き証人として紹介する。

横浜は長い間、米軍占領下におかれた結果、二つの事態が進行した。多くの女性が娼婦になって暮らしを支えたこと。その代表例がメリーさんである。もう一つは米兵が持ち込むアメリカ生活のまばゆさに若者があこがれて、本牧周辺がアメリカ村になった。その結果、ジャズやブルースがここから全国に発信された。その代表例がゴールデン・カップスである。



この娼婦たちが産んだ GI ベビーの飛べない天使像を GS の元ゴールデンカップスのエデイ藩の歌で顕彰することになる。こうしてメリーさんと GS の二つの戦後が結びつくというのである。

（4） 英連邦墓地

この墓地には、太平洋戦争で日本軍の捕虜になって亡くなったイギリス、オーストラリア、インドなどの 1,800 柱の英連邦兵士やその軍属が祀られている。
イギリスの場合、1917 年以降戦死者は本国に送還せず現地で埋葬し、英連邦戦死者墓地委員会が管理するという原則があって、戦後の進駐軍でイギリスが横浜を所管した時、狩場町の横浜児童遊園地に隣接した広大な土地を墓地にすることが構想された。1956 年 S31 年に英国と日本政府が協定を結び、英連邦が管理することを条件に日本は 1,000 万円で土地を譲渡した。こうして構想通り「英連邦墓地」が整備された。面積が 8 ha あって、スギやヒノキが茂り,緑の芝生が美しい墓地である。園内はイギリス区、オーストラリア区、カナダ・ニュージーランド区、インド・パキスタン区、戦後区の 5 ブロックに分けられて眠っている。
1941 年 S16 年の太平洋戦争開始後、南方で多くの軍人や民間人を捕虜にしたが、1942 年のシンガポール陥落以降、彼らは日本へ送られて、各地の炭鉱や工場で強制労働させられた。戦後日本各地から没した人々が集められたという。
1975 年 S50 年に英国のエリザベス国王とエジンバラ夫妻も参拝に来られた。

（2018 年 1 月 10 日）

横 23　　横浜道（よこはまみち）

（陸の孤島だった横浜村）

開港当時のよこはま村は、大岡川の河口の砂州でできた場所だった。東海道からはかけ離れていて、保土ヶ谷～井土ヶ谷～蒔田～石川中村を経由する陸路のほかには、神奈川宿の洲崎神社横の船着場または戸部野毛浦から渡船によるしかなかった。

（1854 年日米和親条約と 1858 年日米修好通商条約に登場する横浜）

1854 年安政元年ペリーが横浜沖へ再来し、このよこはま村で日米和親条約交渉が始まった。この交渉は 2 月 10 日～3 月 3 日まで行われて、「漂流民保護、薪水食料の提供、下田・函館開港」が決定された。その後下田へ交渉の場が移されて、8 月 23 日に「玉泉寺と了仙寺を宿舎に指定し、遊歩範囲を 7 里以内とする」などの細則が「下田条約」として定められた。これからしばらくのあいだ、よこはま村が舞台に登場することはなかった。

1856 年安政 3 年 7 月 21 日、ペリーがやり残した通商条約を結ぶことを使命にした T・ハリスが初代駐日領事として下田へ着任した。着任したハリスは、再三にわたって通商交渉のために江戸へ上って幕府要人との交渉したい旨の要望を繰り返した。その年の 10 月に

中国でアロー号事件が発生して中国が西欧列強の侵略されるようになると、幕府では危機感が増幅し、ついに 1857 年 10 月にハリスの江戸城出府を認めた。

のために江戸へ上って幕府要人との交渉したい旨の要望を繰り返した。その年の 10 月に中国でアロー号事件が発生して中国が西欧列強の侵略されるようになると、幕府では危機感が増幅し、ついに 1857 年 10 月にハリスの江戸城出府を認めた。

ハリスは江戸へ到着すると、精力的に幕府の高官たちに日本の危機を訴えた。老中首座の堀田正睦（ほったまさよし）は下田奉行井上清直と目付岩瀬忠震（いわせただなり）を全権に命じて、1858 年 1 月 25 日から条約交渉に入って 15 回の協議を経て、2 月 18 日に条約案の決定を見た。

しかし、幕府側の条約締結やむなしの判断に対して、皇室側は和親条約のような恩恵的な条約ならよいが、対等な立場で外国と結ぶ条約では清国日本の従来からの秩序を変更するとして、勅許を与えなかった。このため調印は延期を重ねることになるが、6 月 13 日米軍艦ミシシッピ号が下田へ入港して英仏両国がやがて日本へ侵攻するという情報が伝えられると、時の大老井伊直弼は調印やむなしの決断をし、1858 年 6 月 19 日、小柴沖のポーハタン号の船上で、井上信濃守と岩瀬肥後守を全権にして「日米修好通商助役」と「貿易章程」の調印をした。これにより翌年 1959 年 5 月横浜開港が決定された。

（横浜道の建設）

開港場はもともと神奈川宿が予定されていた。神奈川宿は、当時すでに人口 6 千人を擁する宿場で、ここに外国人を居住させるのは無理だと考えていた。しかしながら、居住させ

るには海の埋め立てが必要だがその時間はないこと、また幕府は交通激しい東海道から離れた場所で雑居でなく外国人専用の居留地を考えていたことなどから、急遽横浜村に変更した。
この開港場の変更をめぐって、外国側から猛反発が生じたが、幕府はそれを強行した。
しかし、その横浜村は陸の孤島だったので、まず神奈川奉行所の建設と東海道から直接アクセスできる「横浜道」建設が必要になった。

横浜道の建設

ルート　東海道芝生村（浅間町）～新田間橋～元平沼橋～石崎橋（敷島橋）
～戸部通り（戸部一丁目交差点）～野毛切通し～野毛橋（都橋）～吉田橋

	浅間下～石崎橋	石崎橋～野毛橋
予算（確定）	4,470 両（5,307 両）	210 両（1,090 両）
請負人	当初　桜井勘七（太田村） 交代　苅部清兵衛（保土ヶ谷）	不明
工期	3 か月	3 か月

横浜道整備に合わせて、横浜道と保土谷道が交差する紅葉坂上に神奈川奉行所を設置した。奉行所跡は今、県立図書館・音楽堂・青少年センター・文化資料館などのある県文化センターになっている。横浜開港直後の安政 6 年（1859）6 月 4 日に開設され、前年 7 月以来開港準備を担当してきた水野筑後守ら 5 人の外国奉行全員が当初の神奈川奉行を兼任し、輪番で行政事務を処理していた。奉行所は、この戸部役所と横浜運上所にあり、前者は貢租徴収、検察裁判などの内政務を、後者は外交事務を行った。　（2018 年 1 月 29 日）

横 24　　井伊直弼像

西区の掃部山公園に井伊直弼像が建っている。台座からの高さが 11m（鋳造一丈二尺、台座二丈二尺）もある大きな青銅像で、衣冠束帯の正装姿で港の方向を見ている。日本の開国の立役者だったということで、この像は開港 50 周年の明治 47 年 6 月 26 日に建てられた。しかし、この像をめぐっていくつかの出来事があった。そのうち主な二つの出来事を取り上げる。

（1）二転三転した設置場所、金属回収令による供出と再建

明治 14 年 1881 年、旧彦根藩士数名から井伊直弼遺勲碑を都内に建設したいとする計画が政府に出された。その時は、旧彦根藩主井伊直弼の開港の功績について悪評価が大勢を占め、次期尚早として先送りされた。

次いで明治 15 年 7 月、横浜設置案も検討されたが、都内案が大勢を占めて否決。以降、都内の上野公園、芝公園、靖国神社、日比谷公園などの都内案が検討されたが、いずれも反対論が強くて拒否された。
最後に明治 40 年 1907 年 2 月、当初の遺勲碑を銅像に変えて、横浜戸部山へ建設することに決定した。（この土地は鉄道省所管地の払い下げを受けた）

当初は除幕式を明治 41 年 1908 年 7 月 1 日開催予定したが、神奈川県知事から中央政府高官が反対しているため中止要請があって延期された。しかし、彦根藩士らは 7 月 11 日に除幕式を強行した。

大正 3 年 1914 年、銅像と公園が横浜市へ寄贈され、市民公園として整備開園。
大正 12 年の関東大震災でも大きな被害はなかった。
昭和 16 年日本が戦争に突入し、昭和 18 年金属回収令が出されると、この銅像も対象になって台座を残して撤去された。（代替に石膏像が作成された）
昭和 29 年 1959 年 5 月 20 日、当初の姿を再現させた新しい銅像が製作・設置されて現在に至る。

（2）銅像の首切り騒動

山川出版社「神奈川県の歴史散歩」（2007 年版）の中で、井伊直弼像は横浜開港 50 年を記念して 1909 年除幕式を行ったが（明治 41 年 1908 年？）、その翌日、銅像は首を切り落とされた、と書かれている（P90）。また、作家の吉川英治氏も 2006 年 5 月 10 日、随筆「横浜散歩～その六」で、銅像の首切りがあったという話を書いている。

この話を知った郷土史家（元仲尾台中学校教諭）の田村泰治氏が、当時の新聞記事や公的機関の刊行物を調べたところ、そんな事実はない。その中で、1935 年昭和 10 年 3 月 4 日、井伊直弼像の首を狙う天照義団という一味が長者橋付近で捕まったという事件があったことがある。彼らは井伊が違勅の不忠義者で安政大獄の張本人だった、また横浜市に銅像撤去を申し入れていたが耳を貸さない態度だったので行動に出た、と述べており、4 名が逮捕実刑を受けた。多分このことを聞いて、吉川氏らは除幕式の翌日銅像の首がはねられたと誤解したと思われる、と推定されている。（田村泰治「郷土横浜を拓く」）

（3）明治政府が作り上げた井伊「悪人説」

井伊は幕末期に大老として幕府を運営した人だが、像の設置場所に関する紛糾にみられるとおり、その仕事に対する評価は善悪両極端に分かれている。当時幕府と対立して「安政の大獄」で弾圧を受けた薩長勢力が政権を取った明治時代には、井伊は強権政治で反対派

を弾圧した悪人だったという評価が大勢を占めて、開国の貢献者という偉人評価が後退させられた。

1857 年安政 4 年 6 月、老中阿部正弘が急死する（39 歳）と、将軍世継ぎ問題をめぐり、阿部が始めた「安政の改革」に反発する譜代大名に「大奥の粛正」に反対する大奥も加わって攘夷派が力を得た。そこへ条約勅許問題をめぐる開国派と攘夷派の対立が加わった。

1858 年安政 5 年 4 月 25 日、阿部のあとを受けて堀田正睦は就任するが、天皇から条約勅許を拒否されて、退陣する。その後に、井伊直弼が就任する。彼の課題は、将軍跡継ぎの選定と条約調印問題の解決だった。
第 13 代将軍家定は 1853 年嘉永 6 年に将軍職についてが、病弱だったうえに子供に恵まれず早いうちから後継者問題が問題になっていた。将軍家定に血筋が近い紀伊の徳川慶福（よしとみ）を擁する彦根の井伊直弼らの南紀派と水戸の徳川斉昭の子の一橋慶喜（よしのぶ）を擁する、越前の松平慶永（よしなが）、薩摩の島津斉彬（なりあきら）らの一橋派が対立した。

（「戊午の密勅（ぼごのみっちょく）」）
井伊直弼は安政 5 年 6 月に家定の名で後継者を紀伊の徳川慶福（家茂）とすると発表。この決定に対して一橋派は開国に反対する天皇と手を組んで反対行動に出た。

8 月 6 日孝明天皇の名で幕府の政治運営を批判する「戊午の密勅（ぼごのみっちょく）」を出し、さらに水戸の徳川斉昭に対してこの文書を諸大名に伝達するよう指示した。

先般墨夷との假条約は、余儀なき次第にて、神奈川に於て調印し使節へ渡され候儀、猶又委細は間部下総守が上京に及ばれ言上の趣に候えども、先達て勅答に諸大名と衆議を聞かされたく仰せ出で候所、詮議も之無く、誠に以て皇國重大の儀を調印の後に言上とは大樹公（幕府・将軍）が叡慮のお伺いの趣意も相立たず、尤も勅答の次第に相背き軽率のお取計いは大樹公賢明の所、有志の心得如何と御不審に思召され候。右のような次第にて、蠻夷狄の者、暫くさし置いて今国内の治乱は如何と更に深く叡慮（天皇）を悩まし候。何卒公武の実情を尽くされ、御合体を永久安全の様にと偏に思召され候。三家或は大老が上京を仰せ出され候所、水戸尾張両家は慎んでこの趣を聞き及び、且つ又其の餘宗室（将軍家）の向きにも同様の御沙汰の由も聞かれたく候。右の者は何等の罪状に候や、計り難く候えども、将軍を補佐の面々は、今こそ外夷はこれからの入港も容易ならぬ時節で既に人心の帰向にも相拘るべく、傍ら宸襟を悩ませ候。かねて三家以下諸大名の衆議を尽くされたく仰せ出され候所、全く永世の安全は公武御合体にて、叡慮を安んじられ候よう思召され候儀、外慮の計の儀にもこれ無く、内憂これ有り候ては、殊更深く宸襟（天史の心）を悩ませ候。かれこれ国家の大事候あいだ、大老や閣老其の他、三家三卿と家門や列藩の外様と譜代ともども、一同群議の評定これ有べく誠忠の心を持って、篤と政道を正して、国内平和をいよいよ長く続かせて徳川家を援けるよう整えて外夷の侮りを受けぬよう思召られ候。早々と商議致すべく、この勅諚を下す。

安政五戊午年八月八日

近衛左大臣　鷹司右大臣　一條内大臣　三條前内大臣　二條大納言

この孝明天皇から出された勅書は、8 月 6 日に初めに水戸藩へ出され、その 2 日後に幕府へ出された。これは、①宮中側では関白の決裁を経ないで出された文書だったこと②幕府へ直接出されずに水戸藩へ出された文書だったこと、から手続き上異例な文書だった。また、内容上も、水戸の斉昭らの処分に疑義を持ち出し、御三家や諸大名とよく話し合って公武合体を実現せよ、というものだった。

（安政の大獄）

幕府の井伊大老は、この文書に対して、水戸の徳川斉昭が朝廷を利用して外様大名や浪士と結託して幕府の転覆を図る企てと考えた。そこで、この勅書に関与した者や一橋派で徳川慶喜擁立に関与した者たちを処罰することにした。これが「安政の大獄」である。

水戸藩では勅書を受け取った家老の安島帯刀や茅根伊予之介、勅書降下に直接関わった京都留守居役の鵜飼吉左衛門父子が死罪に処せられ（安島は表向きは切腹）、そのほか、京都の尊攘激派の中心的存在で朝廷への影響力のあった梅田雲浜（獄死）・頼三樹三郎（死罪）、長州藩の吉田松陰（死罪）、越前藩の橋本左内（死罪）をはじめ、70 名を越える志士・幕臣・諸侯・公家などが拘禁され、やがて遠島・蟄居・隠居などに処せられた。

この弾圧は井伊直弼が水戸の徳川斉昭が反乱の元凶と考えて始まったが、捜査途中で吉田松陰らの統幕計画まで露呈されて弾圧範囲が広がった。政争で敗れた一橋派の水戸の徳川斉昭、越前の松平慶永、薩摩の島津斉彬らは謹慎となって幕府中枢から排除された。この弾圧はついに反幕府勢力全体に広がり、吉田松陰なども巻き添えで処刑された。この時、真の統幕論者だった薩摩の島津は見過ごされて、さほどの処罰を受けなかった。島津グループ」を残して水戸グループだけを弾圧対象にしたことが井伊直弼と幕府の失敗になってゆくのだが、この時はまだ誰にも事態の深刻さが理解されていなかった。

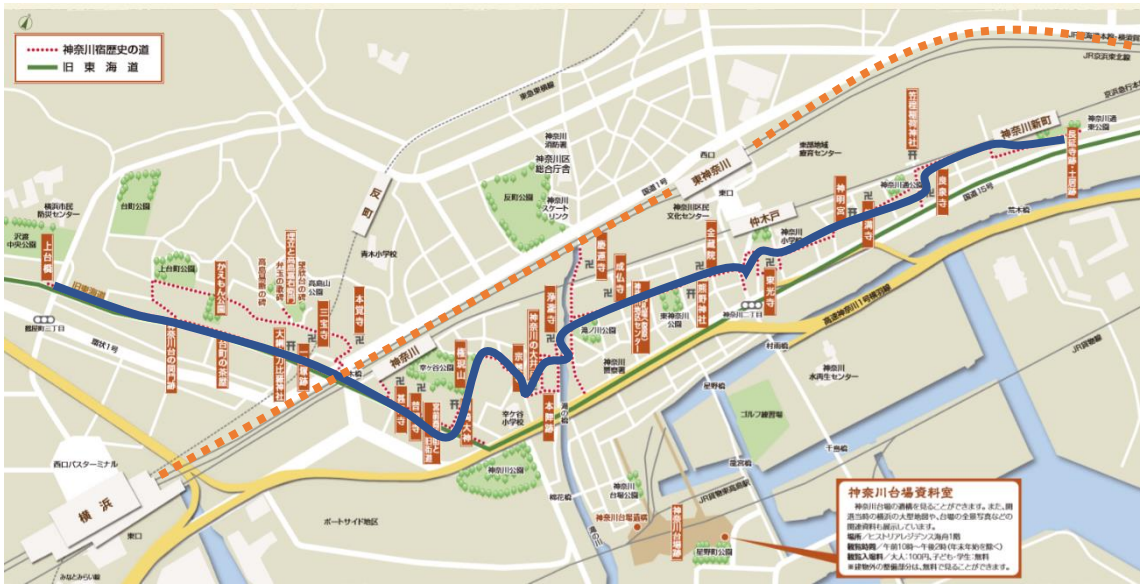
さらに井伊直弼は水戸藩に出された「戊午の密勅」を返納させようと働きかけた。1860 年万延元年 7 年 3 月、これに憤慨した水戸藩士たち 16 人が結集し、脱藩したうえで伊井直弼を暗殺した（桜田門外の変）。

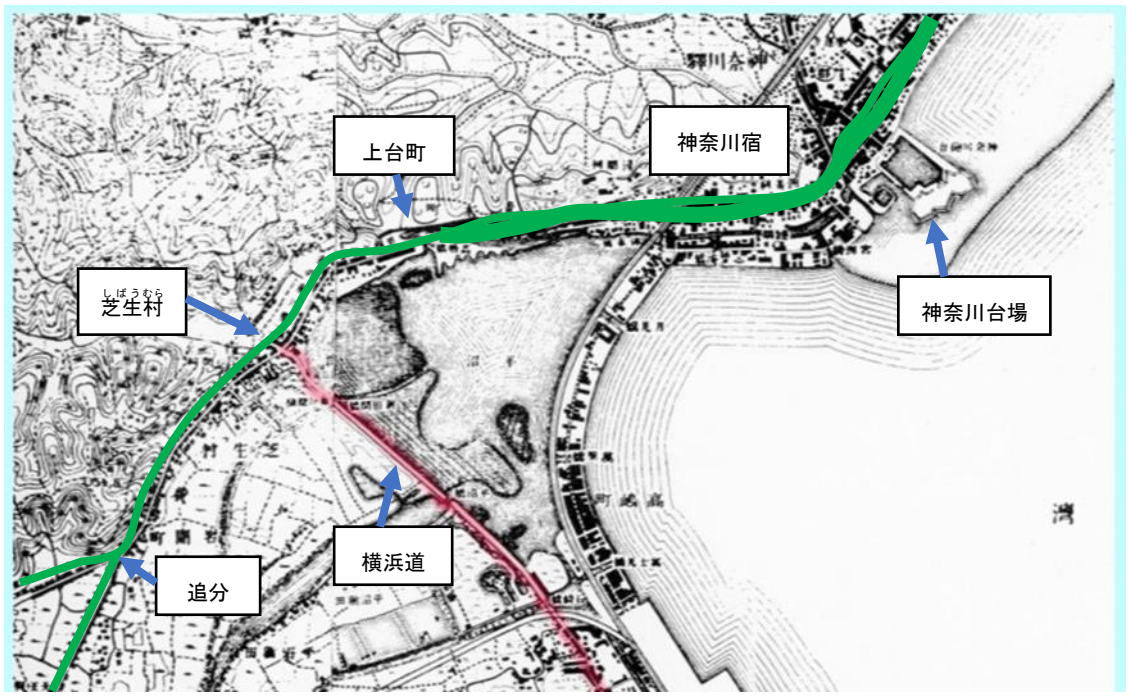
これらの事件により井伊直弼の評価は「開国、近代化の恩人」という視点でなく、「強権政治で尊王攘夷運動を弾圧した人」として語られるようになった。

（2018 年 1 月 30 日）

横 25　神奈川宿

神奈川宿は、神奈川新町の長延寺門前から上台橋までの約 2･8ｋｍ区間である。江戸方見附があった長延寺は幕末期にオランダ領事館になったが、1966 年に緑区三保町へ移転し、今は神奈川通東公園になっている。反対側の戸塚方見附は台町にあったが、今では横浜駅西口線という都市計画道路が建設されたため、この箇所には上台橋という橋がかかっている。まだ横浜駅はこの時期には海の中だった。





神奈川宿には幕末期に国交を結んだ国々の領事館が作られた。領事館と言っても立派な建物を作ったわけでなく、既存のお寺の一部を利用して即席の領事館にしたにすぎなかった。開港地が横浜だったのに、領事館が神奈川宿にできたのは、条約上の開港地＝神奈川を後になって幕府側が一方的に開港地＝横浜に変えたためだった。この開港地をめぐってアメリカのハリス、イギリスのオールコックらと幕府側の岩瀬らとの激しいやり取りが展開された。

その決着がつかないまま、幕府側は強引に横浜整備を開始した。生麦事件が発生するなど攘夷派のテロ活動が一層激しくなって、欧米商人たちは陸の孤島のような横浜へ続々と住まい始めた。それでも外交団たちは神奈川開港に固執し続けた。その結果、各国領事館は神奈川に整備され、商人たちは横浜へ住むという状況が生まれた。

アメリカ領事館　本覚寺

フランス領事館　慶雲寺、甚行寺

イギリス領事館　浄龍寺

オランダ領事館　長延寺（1966 年緑区三保町へ移転、跡地は神奈川通東公園）

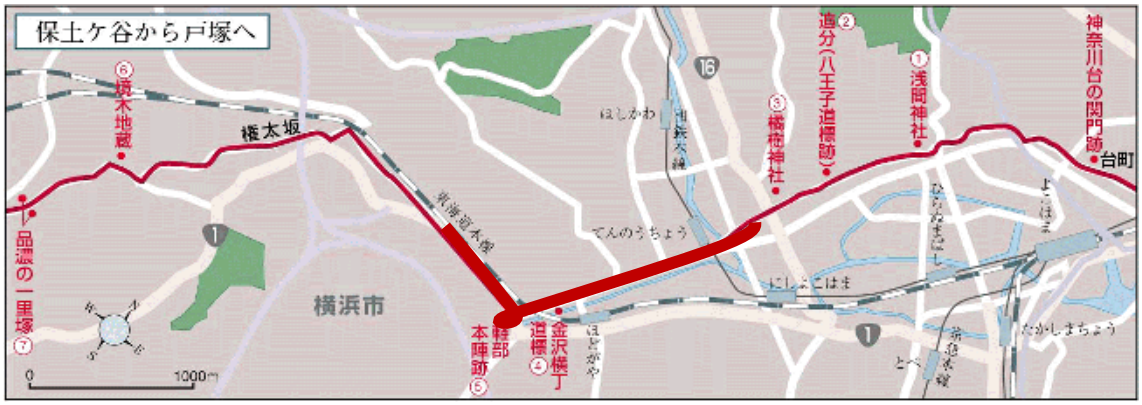
その他に、宣教師ヘボンが滞在した成仏寺、ヘボンが療養所を開いた宗興寺がある。

（2018 年 2 月 15 日）

アメリカ領事館が置かれた本覚寺には条約締結の際に活躍した岩瀬忠震の碑がひっそりと置かれていた。

横 26　保土ヶ谷宿

初の東海道ウオーク（2009 年 8 月～2011 年 11 月）を終わってから 7 年が過ぎた。時々連れのサンチョとそのウオークの記録を読み返して、大変だったけど面白い体験だったね、と当時を振り返ることがある。そうしていると、岡本かの子氏の短編「東海道 53 次」に登場する「東海道人種」の話を思い出す。東海道という道は変化に富んでいて楽しい、だからこの道を何度でも往復して歩きたくなる。東海道に魅せられた趣味人のことを「東海道人種」と呼ぶのだが、私もまたその魔力に引き付けられそうだ。
地元の神奈川宿に続いて、二度目の保土谷宿を歩いた。

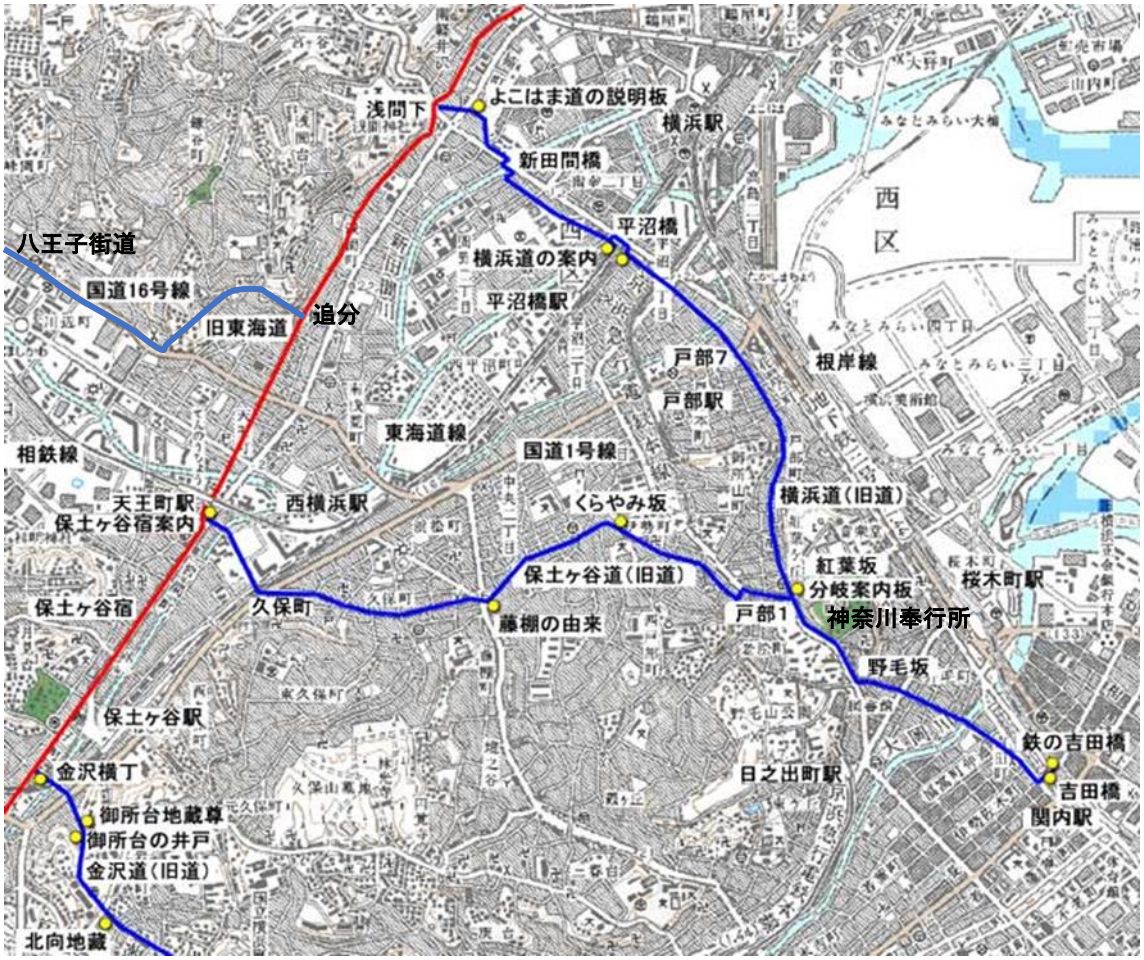


（横浜道、八王子街道、金沢道の分岐）

東海道は川崎で一旦海から離れるが、鶴見川を越すと間もなく生麦の湊になる。ここからまた道の左側が東京湾の海になる。神奈川宿に入っても海沿いの道が続くが、今回の神奈川宿を出て浅間神社下（今の浅間下）まで来ると海添いの道が終わる。今の横浜駅西口周辺の町はたった 150 年前までは大きな内海だったので、幕府が横浜を開港した時には、横浜は今の関内だったから最寄りの神奈川宿から横浜へ行くには渡し船で渡るしかなかった。そこで幕府は 1869 年の横浜開港に合わせて、開港場へ行くために浅間神社下から一本の陸路を建設した。それが「横浜道」である。横浜道は、幅員 3 間×延長約 3.2ｋｍ。

追分まで来ると、ここから相模原、八王子へ向かう八王子街道が分岐する。この道は帷子川に沿って行くが、明治期には信州や八王子から横浜港へ向かう「絹の道」だった。

道の分岐ということで先取りするが、「金沢道」の分岐も少し先の保土谷宿から始まる。釜沢道は 12C の鎌倉幕府の時、三本の鎌倉街道が作られ、そのうちの下道（しもつみち）が鎌倉の外港だった金沢六浦を通って、能見台、笹下などを経て保土ヶ谷と結ぶ古道である。


浅間下
よこはま道の説明板
横浜駅
新田間橋
西区
八王子街道
国道16号線
旧東海道
追分
横浜道の案内
平沼橋
平沼橋駅
戸部7
戸部駅
根岸線
東海道線
国道1号線
相鉄線
天王町駅
保土ヶ谷宿案内
西横浜駅
くらやみ坂
横浜道（旧道）
保土ヶ谷道（旧道）
紅葉坂
分岐案内板
桜木町駅
保土ヶ谷宿
久保町
藤棚の由来
戸部1
神奈川奉行所
野毛坂
保土ヶ谷駅
鉄の吉田橋
金沢横丁
日之出町駅
吉田橋
関内駅
御所台地蔵尊
御所台の井戸
金沢道（旧道）
北向地蔵

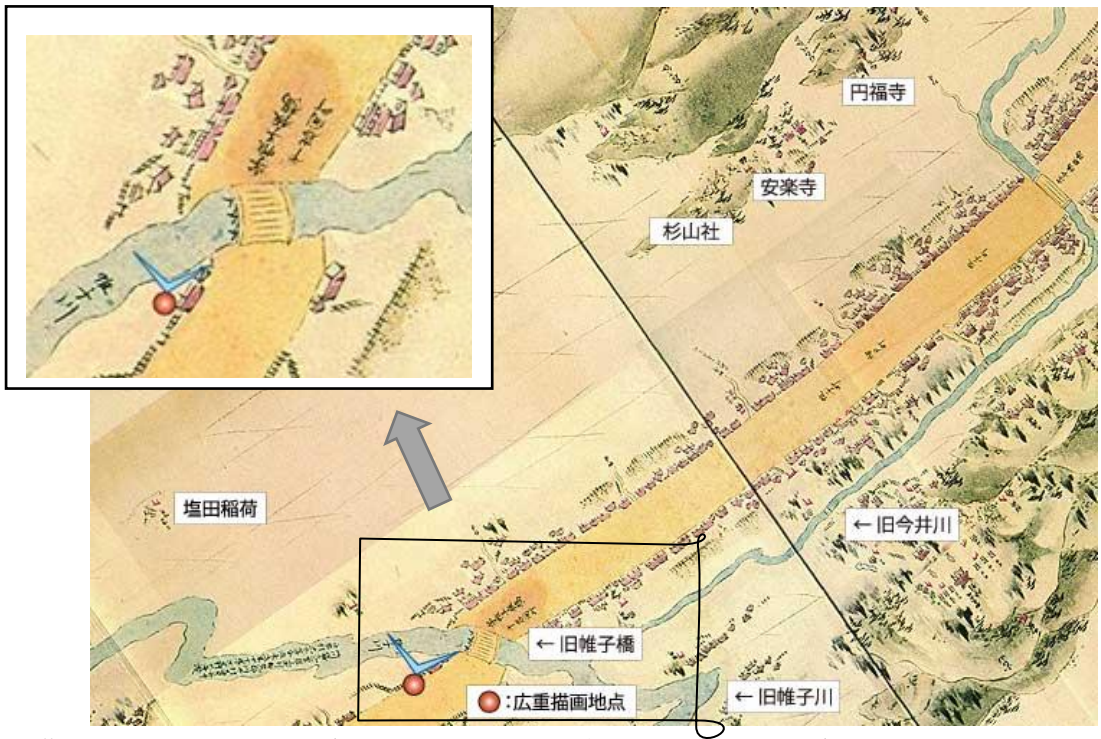
保土ヶ谷宿
お休み処
金沢横町道標四基
2018/02/19

追分から天王町までが「松原商店街」になる。横浜の三大商店街（横浜橋商店街、六角橋商店街、松原商店街）の一つで、毎年年末になるとこの商店街は「ハマのアメ横」というキャッチコピーで安売りキャンペーンを展開する。大変元気な商店街である。

（保土ヶ谷宿）

国道 16 号交差点を越して天王町に入ると、見附跡の標識があり、ここから約２ｋｍが「保土谷宿」になる。相鉄線天王町駅を越すと、東海道は横浜市道環状一号線になる。やがて JR の東海道線の線路を越えると、次に東海道は国道一号線の一部分になる。

さて、下図は有名な安藤広重の「保土谷新町橋」の図である。



安藤広重の浮世絵「東海道 53 次」の「保土谷新町橋」は、東海道が保土谷宿で帷子川を渡る橋を描いた絵である。この絵について、どこでどの方向を向いて描いたものかを検討した人がいる。街道はどの方向を向いているか、川の上流はどちらか、背後の山、田んぼはどこかを調べたのである。神明社宮司さんたちが作成した「保土谷ガイドブック」にあるのだが、その結果、付替え前の帷子川があった現在の相鉄線天王町駅付近から北東に当たる JR 保土ヶ

谷駅方向を見て描いたものと判明した。だから北斎画の上は戸塚宿方向で、下が神奈川宿方向になる。

天王町駅前にある「旧帷子橋跡」に立っている「東海道分間延絵図」にも出ているが、帷子川と東海道は直角に交差していなかったので、橋を川に対して斜めに作ったのである。だから、東海道が川でクランクしているように見える。

（権田坂）

保土谷宿は江戸から 8 里 9 丁（約 32ｋｍ）にある。当時の旅人は一日に 10 里ほど歩いたというので、ここを最初の宿泊地にするには少し早い宿場だった。しかし、この先には東海道最初の難所の権田坂、焼餅坂、信濃坂という大きな坂が連続したので、保土谷宿は丁度いい休息の場所になった。

昔の権田坂は箱根マラソンのコースになる今の一号線の権田坂とは違う。一号線から分岐してわずか 5 百メートルの間に高架橋の保土ヶ谷バイパスのさらに上の約 35m の高さまで上っていく道である。権田坂の頂上にある養護学校から上ってきた道を振り返ると、はるか先にみなとみらいの高層ビル群がよく見える。そこに立つ碑には、戸塚宿から下ってきた昔の旅人は、ここで初めて東京湾（当時は江戸湾）の美しい風景を見て、やっと江戸まで近づいたと実感したらしいと書かれていた。ここから戸塚宿方向へ行くときは、境木立場をぬけると焼餅坂、信濃坂といずれも下り坂になり、信濃口で平地に戻る。

（2018 年 2 月 15 日）

焼餅坂。　別名を「ぼた餅坂」とも呼ばれた。坂上にぼた餅を売る店があったことから名づけられた。

横 27　中華街

横浜中華街は 200 軒の中華料理店を中心に約 600 軒のお店がひしめき合う世界最大規模のチャイナタウンである。近年は東横線が延伸されて、渋谷からも街の入口まで電車で来られるようになったので、休日はもちろんのこと平日も大変な人出で混雑している。赤く塗られた電柱が似合う街である。

（成文のない日米和親条約）

1854 年安政元年 3 月に結ばれた日米和親条約には成文が存在しない。条約文は日本語、漢文、オランダ語、英語で作成された。条約交渉は、大学頭林復斎と米側が広東から連れてきた宣教師ウイリアムズとが漢文で交渉した。しかし、最後の署名の段になると、林は日本語版しか成文ではないと主張し、日本側全権の松崎応接掛は日本語版のみに署名した。他方米側でも、英語版だけが成文と主張し、ペリーは英語版だけにしか署名しなかった。このため、日米和親条約には成文がないことになった。

（買弁）

ペリー以降、来日する西洋人には商売を始めるうえで日本語問題をどうするかが課題だった。長い鎖国時代が終わったばかりだったので、日本語通訳は一人もいなかった。ただ長崎で貿易が許されていたオランダ人には日本語を解する者がいたが、日米和親条約以降日本進出を狙う西欧列強は互いに競争関係にあったので、利害が絡む通訳業務をオランダ人に任せることはできなかった。

そこで、漢文を理解する日本人が多いことから、西洋諸国では日本へ渡航する前に広東、上海、香港で中国人通訳を雇入れて日本へ同行させた。開国とともに来日した中国人は「買弁」と呼ばれた。「買弁」は、清代に広東の外国人商館や外国船に食料などの物品を納入する商人を指したが、アヘン戦争以降は通訳のほかに、外国商社が求める商品について中国国内の取引を請け負って提供した中国人商人を指すようになった。このように「買弁」は租界で外国資本と手を結んで成長した中国商人を指すが、彼らは次第にその商取引の力を生かして貿易、海運、鉄道、金融などの分野で成長して買弁資本家集団を形成するほどになった。

1859 年の開港時、横浜には西洋商人とともに、多くの中国人も来日した。彼らは買弁、通訳に加えてコック、下僕、荷夫などだった。開港して 1 年半後の文久元年には英 54 人、仏 14 人、米 38 人、蘭 20 人、計 126 人の西洋人のほかに中国人約 100 人がいたと言われている。当時西欧諸国と日本間では条約があったが、中国については 1871 年 M4 年の日清修好条約までは明確な在住根拠を持たず、多くの場合は条約国人の随行者であり、その商業活動も限定的だった。しかし、1867 年慶応 3 年「横浜外国人居留地取締規則」が結ばれると、条約未済国人にも住民登録制度が定まり一定の経済活動ができるようになった。なおこの時籍碑（登録）を受けた中国人は 660 人だった。

（横浜中華街の成立）

1867 年慶応 3 年の「横浜外国人居留地取締規則」で中国人の住民登録が行われると同時に、これを管理する神奈川奉行所との連絡、交渉を行う「清国人集会所」が結成された。

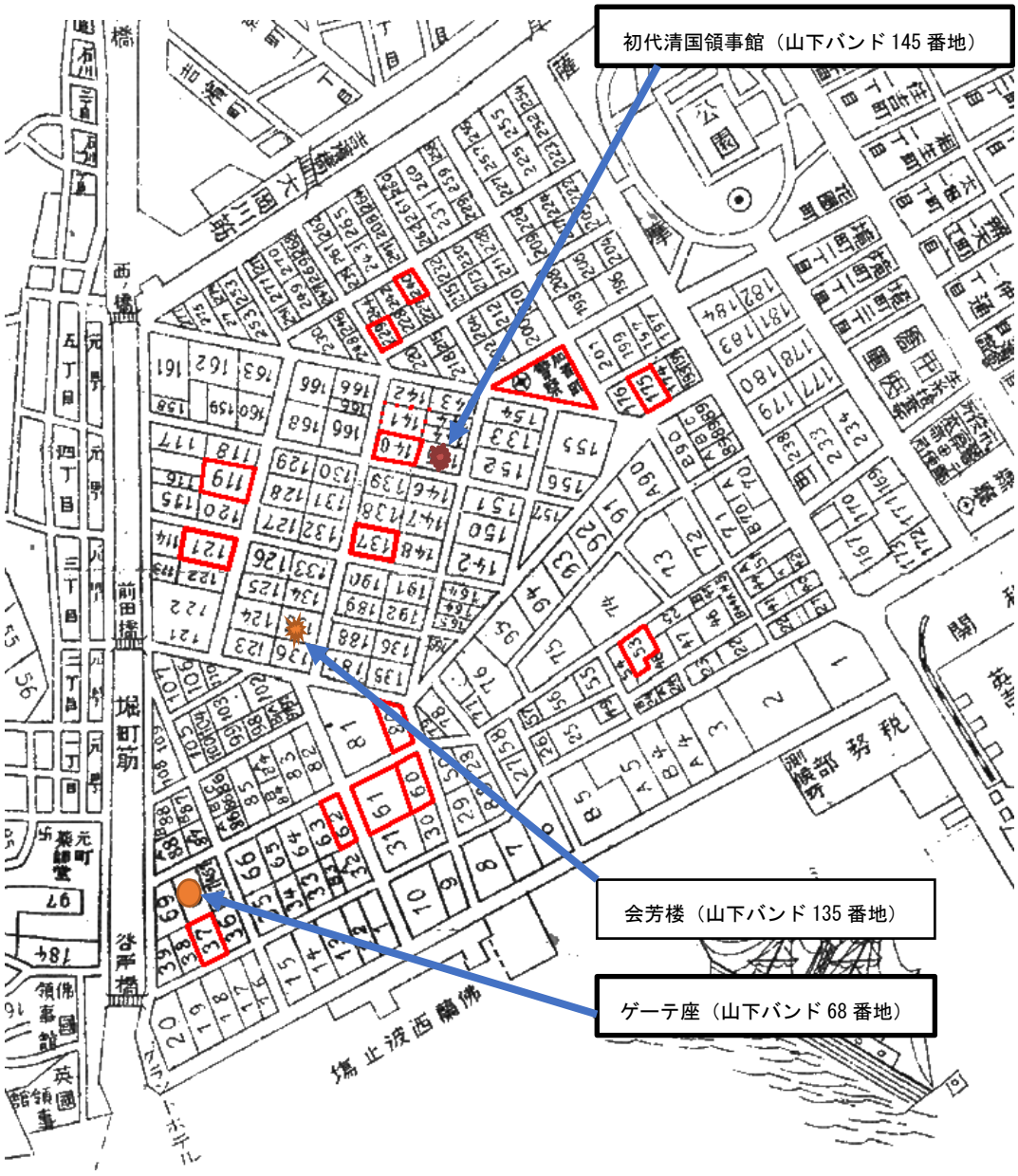
4 年後の 1871 年 M4 年には「中華会館」と改称された。この中華会館は清国人が居留地で安定した社会生活を送るうえで中心的役割を果たした。
1874 年 M7 年の人口登録によれば、清国人は 1,290 人、他の外国人が 1,121 人で居留地人口の半分が清国人だった。1877 年 M10 年の清国人は 1,142 人で、その内訳が上等身分 183 人、下等身分 959 人で、うち上等身分の 4 割 80 人、下等身分の 6 割 600 人、合計 680 人が居留地の 130 番地から 166 番地、今の中華街のあたりに住んでいた。
1878 年 M11 年清国領事館が居留地の 135 番地に設立されると、横浜での生活基盤がさらに整い、居住者はさらに増加し、1889 年 M22 年には 3 千人を超した。こうして横浜中華街が成立した。

（外国人居留地）

外国人居留地とは、1858 年安政 5 年に結ばれた安政 5 か国条約で、条約締結国の人々に居住と営業を許された区域を指す。居留地では外国人に土地種有権は認められなかったが、土地の借地権と建物の所有権が認められた。居留地は 5 か所の開港場と 2 か所の開市場に作られた。横浜居留地は 1860 年万延元年に今の山下町に設けられて、順次山手まで拡大したが（山下居留地と山手居留地)、1899 年 M32 年の条約改正によって廃止された。
居留地は、[settlement]と呼ばれ、中国に作られた「租界」とほぼ同様だった。

先にみたように、西洋人商人たちが多くの中国人の買弁を連れてきたのは、彼らが漢字、漢文で日本人と会話ができたことと商習慣が似ていたからだった。その後上海、香港～横浜間に航路が開設されると、さらに多くの中国人が来日し、居留地の一角に関帝廟や中華

学校なども建てられた。1894 年 M27 年日清戦争が勃発すると多くの中国人が帰国したが、戦後また戻ってきた。戻った中国人たちは「三把刀さんばとう」（料理、洋服、理髪）と呼ばれた刃物を使う商売に特化してその道のエキスパートになる生き方をするようになった。このために中華街に中華料理屋が増えていった。1899 年 M32 年条約改正で居留地が廃止されると、多くの欧米人が帰国し、次第に居留地はチャイナタウン化した。



（山下町バンド 135 番地～会芳楼）

開港から 4 年後の 1862 年横浜新田の埋め立ては終わったが、まだ建物は何も立っていなかった。1863 年最初に「同済病院」が山下バンド 135 番地の 480 坪を借り受けた。同済病院は貧民救済と治療のために中華会館が経営した施設である。しかしこの土地に実際に建てられたのは。1868 年の劇場と料理店を兼ねた「会芳楼」だった。会芳楼では、本格的な

中国芝居や日本人の曲芸、西洋人によるアマチュア劇などが行われて、居留地の貴重な娯楽場になった。最初の本格的劇場の「ゲーテ座」が山下バンド 68 番地にできるのはさらに 2 年後の 1870 年だったので、会芳楼は大いに繁盛した。

しかし、1878 年頃突然会芳楼が姿を消した。しばらくの間は馬車製作所だったが、1883 年ここに「清国領事館」が建設された。もともとは山下バンド 145 番地にあったが、新館を建築するために会芳楼跡へ移転してきた。

この領事館は、以降 1911 年辛亥革命が起きるまでの 28 年間清国総領事館で、その後は中華民国総領事館として活動した。しかし、1923 年の関東大震災で建物が崩壊し、移転。1925 年から 7 年間再び領事館になるが、その後閉館した。以降長い間、この 135 番地の用途は定まらなかったが、戦後 15 年がたった 1960 年、児童公園「山下町公園」として整備された。近年の 2000 年に再整備されて、園内に「東屋会芳楼」もつくられて、現在に至っている。

（2018 年 2 月 18 日）

横 28　戸塚宿

（「東海道中膝栗毛」に登場する戸塚宿）

十返舎一九の「東海道中膝栗毛」は、1802 年享和 2 年に出版された旅行記である。江戸から出発して伊勢参りするのだが、ついでに奈良、京都、大阪へも足を伸ばす。ある日の早朝、借金を踏み倒して遊び人の弥次郎兵衛とその食客の北八の二人が江戸の神田八丁堀を出発する。神奈川宿で抜け参りの子供に騙されてお金を取られてしまう事件もあったが、やがて保土ヶ谷宿へ着く。

保土ヶ谷では、旅籠の客引き女の集団に出会う。彼女たちは揃って、顔はお面をかぶったような真っ白な化粧、井の字の絣に紺色の前掛け姿をしており、通りかかる馬方、旅人、

僧侶、霊場巡礼者など相手かまわず手を引きずり込むようにして誘うが皆逃げていく。その様子を弥次さんが早速狂歌に詠む。

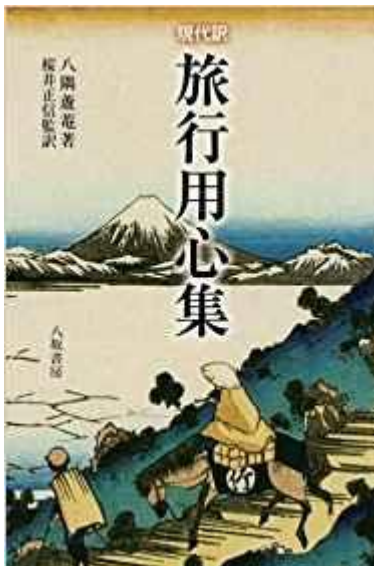
「お泊りは　よいほどがやと　留め女　戸塚まえでは離さざれけり」

（お泊りは保土ヶ谷が丁度いい、次の戸塚宿までとっ捕まえていくよ
といって客引き女が離さない。）

結局二人は戸塚宿で泊まる。そこへ行く道中で、今晩の宿であれこれと飯盛り女を勧められるのが煩わしいから、二人は親子ということにしようと決める。戸塚宿へ入ると大名一行が来たようでどこも断られる。困り果てて、とある宿へ飛び込むと、たまたま今日が開店日で二人が一番目の客だという。きれいな風呂へ入り豪勢な料理と酒に大満足するのだが、仲居さんが息子役の北さんを邪険にし、お父さん役の弥二さんばかりにサービスする。それで北さんが腹を立てて、もう親子関係を切りたいと言い出す。そこで詠む。

「一筋に　親子と思う女より　ただ二筋の　銭もうけせり」

**（親子というから仲居さんにも相手にされなかった。うまくいけばあの女と遊べたのに。
でも、そのおかげで女を買うお金も節約できたよ。）**



（江戸時代の旅行ブーム）

江戸時代原則として旅行は禁止されており、武士でも庶民でも人々の自由な旅行はできなかった。しかしその中で、神社仏閣をめぐる信仰目的の旅は例外的に認められていた。三重の伊勢神宮参詣や香川の金毘羅参りなどがその例である。

（参勤交代で旅のインフラ整備が進む）

江戸時代の旅ブームは 1635 年の武家諸法度改正による参勤交代制度によってはじめられた。「武家諸法度」には、「大名・小名在江戸交替相定ムル所ナリ。毎歳夏四月中、 参勤致スベシ」という規定があって、原則として 1 万石以上の大名は、妻(正室)と子(男子であれば跡継ぎ)は常時、江戸の藩邸に事実上の人質として住まわせ、その代わり藩主は自国と江戸に交互に勤務させる規定である。藩主は 4 月に自領から江戸へ「参勤」し、1 年後の翌年 4 月に江戸から国許へ「交代」した。大名にとって往復や江戸屋敷の維持経費負担は膨大だったが、これにより五街道整備が進み、全国規模で交通や宿場などが発展した。

江戸中期から本格化した商品経済の発展により、全国規模で商品流通が活発化した。その発展の様子は街道整備と水運航路の発展でよくわかる。

（街道整備）

東海道　1624 年（寛永元年）完成、　日光街道　1636 年（寛永 13 年）完成

奥州街道　1646 年（（正保 3 年）完成、 中山道　 1694 年（元禄 7 年）完成

甲州街道　 1772 年（明和 9 年）完成

（水運の航路整備）

菱垣廻船航路　1619 年（元和 5 年）　東回り航路　 1671 年（寛文 11 年）

西回り航路　1672 年（寛文 12 年）　 樽廻船航路　 1730 年（享保 15 年）

この航路整備に合わせて、「舟運」と呼ばれる川を利用して内陸と河口の港を結ぶ流通も発展した。例えば淀川の京都～大阪、利根川の銚子～江戸、富士川の甲府～清水などである。

（「お伊勢参り」を支えた伊勢講）

江戸時代の庶民は現代に比べると神仏を大切にする信仰心が深かった。幕府が仏教を奨励したため、人々はどこかの寺社の氏子になり、ご利益があると聞けば多少遠くてもお参りに出かける風潮があった。江戸時代中期になると、伊勢神宮の神職の一部の人たちが「御師（おし）」になって伊勢参りを PR するようになった。彼らは布教活動と同時に、伊勢講を作って旅行費用を村全体で積み立てして交代で選ばれる代表者が代参することで、村民の誰れもが一生に一度はお伊勢参りができる仕組みを作った。それだけでなく、伊勢参宮や旅の道中の宿の手配や行程管理までも代行し、安全安心な旅を提供した。これにより、「お伊勢参り」は一大ブームになった。伊勢だけでなく、富士山、大山、吉野山、出羽三山なども信仰対象になって「講」もつくられた。しかし何と言いても「お伊勢参り」に最も多くの人々が訪れた。その理由には、日本のほぼ真ん中あたりにあって、大阪、京尾、奈良の有名な観光地に簡単に立ち寄ることができたことなども一つにあったと思われる。

（旅行費用について）

旅の費用について、旅籠代が 1 泊 2 食で 150～200 文（今の貨幣価値で 1,500～2,000 円）、自炊の場合は 50～60 文（500 円～600 円）だった。旅籠に入ると飯盛女がつきもので、その値段が 400～600 文である。安く旅をしても 1 日当たり 800 文（8,000 円）くらいかかったとみられるので、東海道を 15 日間で旅をすると、約 12,000 文＝3 両（12 万円）くらいかかったとみられる。

（旅行用心集）

これに加えて、旅行を促す出版物の発行が江戸時代の旅行ブームをあおった。それがこれまで見た十返舎一九の滑稽本「東海道中膝栗毛」（1802 年、享和 2 年）と歌川広重の浮世絵「東海道 53 次」（1832 年）だった。また、江戸時代の旅の心得が書かれた「旅行用心集」（1810 年）の発行も人々の旅心をあおる役割を果たした。

その「旅行用心集」によれば旅の装束は次のようなものだった。「男性は縞柄の上に藍染めの半合羽を羽織る。下着は褌、着物を尻からげ。素足に草履履き。腰には柄袋のかかった道中差と煙草入れ。肩には振分け荷物。頭には菅傘。女性は髪は島田髷。着物は縞柄の紬。帯は染帯。腰巻は桃色。着物の上に塵除けの浴衣を着て腰紐で結ぶ。桃色の脚絆、足は素足で紐付き草履。手には竹の杖をもつ。頭は手拭いで姉さん被り。」

「東海道中膝栗毛」では、早朝に江戸八丁堀を発った弥次喜多二人連れは、夕刻戸塚宿に到着して宿泊した。旅立ちは通常明け七ツ（午前 4 時頃）に出発して暮れ六ツ（午後 6 時頃）に宿に入ったという。戸塚宿までの距離は 10 里半、約 40ｋｍある。弥次喜多は、当時の男性のスタンダードだった 1 日当たり 40ｋｍを歩いている。早いのだ。

ところで東海道は日本橋～三条大橋間が 486ｋｍだから、男性では片道で通常 14、15 日くらいで歩いた。往復で 1 か月くらいである。しかし、途中の関所や大井川、宮の海上七里などで足止めを受ければ、時間はその分長くなった。
その長い旅に持って行った荷物はどんなものだったか。「旅行用心集」によれば、
「矢立て、扇子、糸針、懐中鑑、日記手帳、櫛、びんつけ油、ちょうちん、ろうそく、火打ち道具、麻袋、印判、カギ・・・」、とある。今の旅行とあまり違わないのだ。

（2018 年 2 月 25 日）

横 29　　鶴見川橋

東海道が鶴見川を渡る橋は「鶴見橋」だった。しかし、T5 年 1926 年に京浜第一国道（国道 15 号線）が開通した時、15 号線の橋を「鶴見橋」としたため、旧東海道にかかるこの橋は「鶴見川橋」へ改名された。今の鶴見川橋は、三代目で H8 年 1996 年に架けられたもので、美しい 2 本のアーチが内側へ傾斜して橋の中央でその間隔が狭くなってカバンの把手のようなアーチ橋である。

（江戸時代も暴れ川）

江戸時代初期、1601 年頃に最初の鶴見橋が架設されたものの、洪水や氾濫で何度もかけ替えられてきた。この川は、川勾配が緩く、水の流れが遅い。川の流域範囲が広いわりに川幅が狭く、何か所も蛇行している。そのため、一旦大雨が降るとしばしば洪水を引き起して氾濫を繰り返す「暴れ川」だった。第二次大戦後、川幅を広げて堤防を高く積み上げるようになって、台風や大雨による洪水、氾濫被害が減ってきたという。

鶴見橋が出来た最初の 90 年間のことはわからないが、元禄時代以降の橋の修繕やかけ替えの記録がある。これによれば、これまでに 6 回の架け替えがあって、今のアーチ橋は三代目であることがわかる。江戸時代の初め 1601 年に橋ができて、文政 9 年 1826 年に江戸時代最後の架け替えがあったのだから、江戸時代の約 200 年間に 5 回かけ替えたので 50 年に一度くらいのペースで架け替えが行われたことになる。鶴見川が相当な暴れ川だったことを示している。

年代	内容
1696(元禄9)年	新規架け替え(3月1日～5月1日)
1701(元禄14)年	敷板朽損(きゅうそん)につき修復
1707(宝永4)年	新規架け替え
1719(享保4)年	修復
1724(享保9)年	行桁(ゆきげた)など取替え修復
1731(享保16)年	修復
1733(享保18)年	新規架け替え
1737(元文2)年	梁木(りょうぼく)・欄干・板取替え修復
1742(寛保2)年	行桁(ゆきだけ)など朽損、外に板・棟間など残らず取替え修復
1744(延亨元)年	往還並木をもって修復
1754(宝暦4)年	修復
1768(明和5)年	新規架け替え
年次不明	(1792〈寛政4〉～1802〈享和2〉年の間) 架け替え工事中に、大水が出たため多くの用材が流された。その後、新規架け替え
1826(文政9)年	新規架け替え
1830(文政13)年	修復

（現代の鶴見川）

鶴見川は、標高が低い丘陵地帯に囲まれて、川の勾配も上流部で 1/250,下流部で 1/1,000 位という緩勾配の川である。昭和 30 年以降の高度経済成長期から流域で一気に市街化が進んだ。流

域内の市街化率は、S33 年人口 45 万人、市街化率 10%だったものが、46 年後の H15 年には人口 188 万人、市街化率 85%にもなり、急速な人口増と市街化が進んだことがわかる。横浜市では「宅地開発要綱」により法令より厳しい基準で宅地の開発事業者にいくつかの規制をかけた。その一つに「調整池」条項もあったが、さほど有効ではなかった。開発により昔からの谷戸や農地が消えて、土地の保水浸透機能は著しく低下し、一旦大雨になると短時間で大量の水が鶴見川とその支流に流れ込むようになった。その結果、鶴見川は江戸時代にそうだったように、現代でも再び「暴れ川」と呼ばれた。

年代		鶴見川の歴史
昭和時代 中期(1946～1965年)		
1948	昭和23	1.- 鶴見川、汐見橋水位観測所観測開始
		9.16 アイオン台風により、鶴見川で国道鶴見橋上下流約10mにわたって決壊
1949	昭和24	8.31～9.1 キティ台風により、鶴見川で2000戸以上の浸水被害
1950	昭和25	6.12～14 豪雨のため鶴見川、早渕川合流点本流左岸で4ヶ所決壊
		8.5 豪雨のため鶴見川合流点本流左岸で2ヶ所決壊
1951	昭和26	1.- 鶴見川鉄橋起工式（工期3年、工費3億円、建設・運輸両省折半）
1952	昭和27	6.- ダイナ台風により鶴見川、佃野町一帯で160世帯の床上浸水
		鶴見川改修・河口工事（5か年計画）
1955	昭和30	6.- 鶴見川水害予防組合会議員が建設省河川局長等に鶴見川早期浚渫の陳情
1956	昭和31	10.31 鶴見川、豪雨で浸水約120戸
		砂利採取法制定
1958	昭和33	9.26～27 狩野川台風により鶴見川各所で決壊。決壊に対して災害救助法適用。床上浸水16,991戸、床下浸水48,766戸の大被害
		鳥山川改修工事着手
1964	昭和39	7.10 新河川法公布

（新横浜多目的遊水地）

河川の洪水対策には、川幅を広くし川底を掘り下げることで流れる水量を増やすことと一定水準を超えた水をダムや遊水地に一時的に滞留させて時間差をつけて放流すること、が定番になっている。鶴見川の場合には、川沿いの都市化が進んでいるので川を大きくすることは長い時間を要する。そこで洪水を調節する遊水地を作って流量調整を進めることを基本にした整備計画が作られた。

新横浜多目的遊水地と川和遊水地が整備計画上の遊水地である。新横浜多目的遊水地は、川が氾濫すると一時的に川の水を引き込んで下流の洪水被害を低減させる機能を持っているが、同時に普段は都市公園としてサッカーや野球その他の運動公園機能も持っている。公園の中に立つ新横浜総合競技場は千本以上の柱に乗る形で建設されていて、洪水時にはスタジアムの下に水を流し込むように作られている。時間降雨量 60mmの雨が降った時に耐えられるように 84ha の敷地内に 390 万㎥の水が貯められる。

川和遊水地も同様で、市営地下鉄グリーンライン川和車両基地の地下が遊水地となっており、2.6ha の敷地に 12 万㎥の水が貯められる。

（2018 年 2 月 27 日）

稲城市
町田市
宮前区
麻生区
高津区
中原区
鶴見川
恩廻公園
調節池
早渕川
矢上川
青葉区
港北区
幸区
都筑区
鶴見川
恩田川
川和遊水地
多目的
遊水地
鶴見川
川崎区
横浜市
鶴見区
神奈川区

遊水地の紹介
越流堤
減勢池
周囲堤
囲繞堤
排水門
高架式道路
大熊川
鶴見川
亀甲橋
新横浜大橋
鳥山大橋
横浜アリーナ
小机駅
JR横浜線
新横浜駅
JR東海道新幹線
遊水地管理センター
（1F 2F：鶴見川流域センター）
ピロティ方式
洪水時に水を貯留する地内地盤
河川区域
公園区域

横 30　六郷の渡し

多摩川の下流域は六郷川と呼ばれていたので、東海道が多摩川を渡る場所は「六郷の渡し」と呼ばれていた。しかし、ここはもともと橋があった。江戸幕府が発足した当時の慶長 5 年、1600 年には六郷大橋が架けられて、大雨のたびに補修を繰り返してきたが、貞享 5 年 1688 年に洪水で橋が流出して以降明治 7 年 1874 年に六郷橋が作られるまで、再び架橋されることなく、舟渡になった。この川渡しと川崎宿の盛衰の様子を見てみる。

（大河川で禁止された架橋）

神奈川県内の東海道では、多摩川、相模川、酒匂川の三つの大河川で橋が架けられなかった。そのため、多摩川と相模川では舟渡、酒匂川では徒歩渡し、馬渡し、蓮台渡しが行われた。大河川で架橋禁止になった理由はいくつかあるが、①関所と同様の軍事上の役割を川に持たせて通行制限をした②洪水のたびに高額な修繕費、高額な橋の架け替えが必要になり、費用負担に耐えられなかった③両岸の宿駅の繁栄と川越人足の生活維持④丈夫な橋梁を作る技術が未発達で橋が脆弱だった、などが指摘されているが、定説はない。しかし、渡船場に関する業務は道中奉行が所管し、渡河の方法、料金が定められた。渡しをする場所は定船場（じょうふなば）ときめられていて、それ以外の場所で渡河することは禁

止された。多摩川の場合には全川で 39 か所の定船場があった。とは言え、下流側から、「羽田の渡し①」「大師の渡し②」「六郷の渡し③」「小向の渡し④」「矢口の渡し⑤」「平間の渡し⑥」「丸子の渡し⑦」などが実際に使われていて、これらの中で幕府が直轄管理する渡しが「六郷の渡し」だった。ここの渡船料は幕府の役人、武士、僧侶、女性等は無料で、無料通行の人数が全体の 3，4 割を占めたと言われている。

（六郷の定船場（じょうふなば））

六郷の舟渡業務は当初江戸町人らが請け負っていたが、宝永 6 年 1709 年から川崎宿が請け負うようになって明治まで続いた。川崎宿の渡船場には、川会所、高札場、水主小屋（かこごや）があって、平底の伝馬船（4 間×1 間半）で人々を運んだ。

（川渡しで宿場復興へ）

川崎宿は 1623 年元和 9 年に宿場として認められた。東海道が作られてから 22 年目に最後に出来た宿場だった。遅れた理由は、人馬を調達する準備が遅れたためだった。宿場になるということは旅行者や大名行列が来て宿やお茶屋でお金を落とすメリットがあった。その代わりに宿場では人馬を手配して、大名行列や旅人の荷物を継ぎ送りする仕事を果たす必要があった。

苦労して宿場になったものの、当時多摩川には橋がかかっており、川崎を素通りする客が多かった。川崎大師に来る人はいたが、大勢来るのは寺に行事があるときに限られた。宿場を素通りする原因は何だったか？何よりも日本橋から見て川崎の位置が近すぎた。日本橋から 4 里半だったので、朝立ちすれば昼過ぎに川崎に着く。泊まるには早すぎて、多くの人々は日本橋から 7 里の神奈川か 8 里半の保土ヶ谷まで行こうと考えたのだ。だから川崎宿はすたれる一方だった。

ところが 1707 年の洪水で橋が流された。橋の架け替えは当時は川崎宿が負担するとなっていたが、宿場側にはその大金を負担する余力はない。すると今度は幕府側から宿場資格をはく奪するという話が来た。宿場側では背に腹は代えられないのではく奪もやむを得ないと決めて、川崎宿は存亡の危機に陥った。

その時、川崎宿本陣の田中屋の当主・田中丘隅（たなかきゅうぐ）が橋の架け替えが無理なら大井川のように川渡しを導入して渡し賃を川崎宿の収入にしたらどうかと、関東郡代に願い出て承認された。こうして渡し場を設置して川渡しの新しい業務が始まり、川崎宿は何とか継続させることができた。

川崎宿は継続できたが、その後も宿場としての繁栄は難しかった。江戸から近いため、川止めなどが発生すると旅の出発そのものを遅らせて、江戸からくる旅人は少なくなった。大名行列も同様だった。そのため宿場に落ちるお金は渡し賃程度だった。しかし元禄頃から庶民の懐も豊かになりだして、川崎大師へ参詣する客が増えだした。川崎宿は東海道の旅人に加えて、川崎大師の参詣客によって息を吹き返した。

（2018 年 3 月 16 日）

横 31　金沢八景

金沢八景駅前に広がる平潟湾周辺は鎌倉時代から風光明媚なところとして有名だった。江戸の元禄時代頃、中国・明から招かれた心越禅師が近くの能見台からここを眺めて、故郷の中国湖南省長沙の瀟湘八景（しょうしょうはっけい）になぞらえて漢詩に詠んだことがきっかけになって、安藤広重が絵にしたことから「金沢八景」という名称が有名になった。このあたりの地名には六浦、町屋、乙舳、平潟、野島などがあるが「金沢八景」という地名はない。金沢八景は京急電車の駅名になっているものの地名ではなくて、この地域の通称名に過ぎない。

（八景）

漢詩における八景は中国山水画の伝統的画法の一つで、風景を八つの切り口で表す手法である。金沢八景の場合は、上の二字が地名又は施設名、下の二字が漢詩の八景からとられている。

称名寺・・・・・・・・・称名晩鐘（しょうみょうのばんしょう）
小泉弁財天・・・・・・・小泉夜雨（こずみのやう）
洲崎神社 ・・・・・・ ・洲崎晴嵐（すざきのせいらん）
寺前海岸・・・・・・・・乙舳帰帆（おっともきはん）
瀬戸神社・・・・・・・・瀬戸秋月（せとのしゅうげつ）
平潟湾・・・・・・・・・平潟落鴈（ひらがたのらくがん）
野島夕照橋・・・・・・・野島夕照（のじまのせきしょう）
内川の入江・・・・・・・内川暮雪（うちかわのぼせつ）

（金沢八景はもともと海だった）

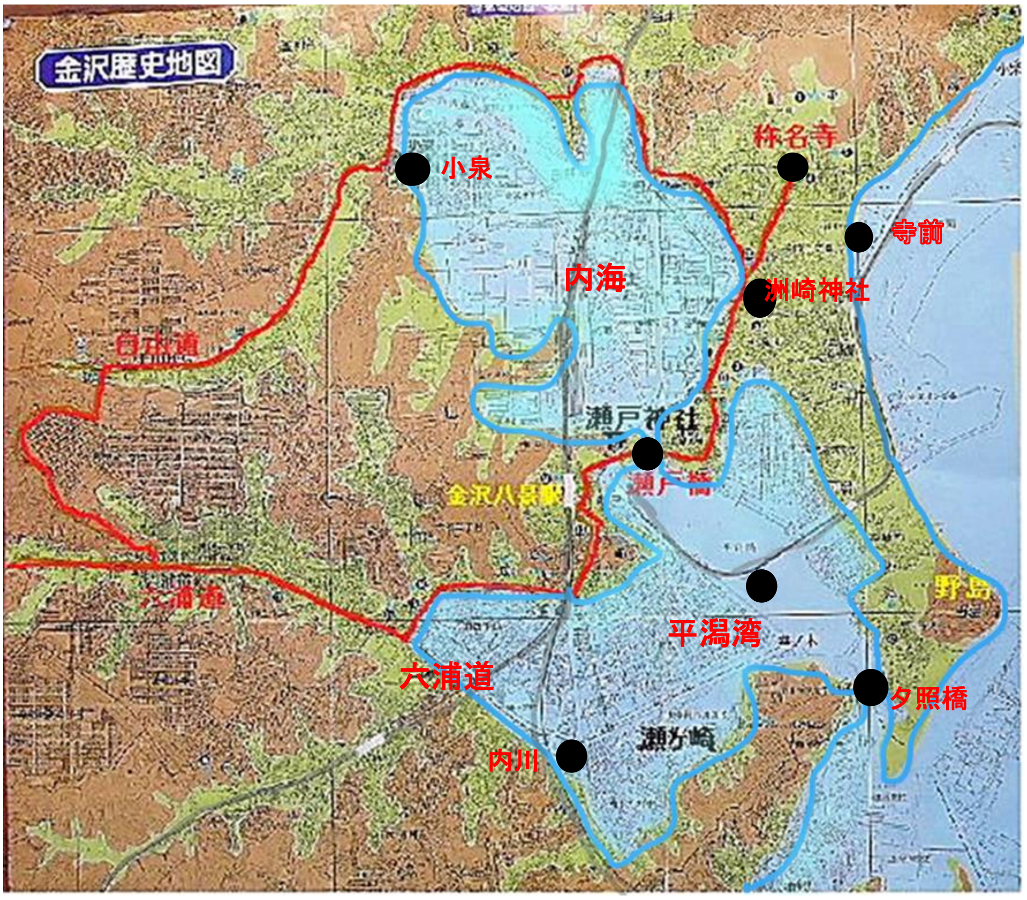
湖南省長沙の瀟湘八景になぞって詠われた「金沢八景」の面影は今はない。大部分の土地が埋め立てられたからだ。そこで埋立前の 1690 年元禄時代頃の地図を見てみる。

鎌倉時代以前から鎌倉と称名寺を結ぶ街道だった白山道（しらやまどう）の「白山道中央」交差点から笹下釜利谷道路の起点の「君ヶ崎」」までの右側はずーと内海だった。宮下橋の東側に手子神社があり、手子神社の東側が小泉（こずみ）である。

昔は手子神社辺りまで内海が入り込み、その浜に竹生島（ちくぶじま）と呼ばれる岩山と大きな笠松があり、晴天の夜でも梢から雫を落としていたと云われていた。これが金沢八景の一つの「小泉夜雨」（こずみのやう）の起源である。さらにその松の根元の石窟に弁財天が祀られていた。これが竹生島弁財天で、現在は手子神社の境内に移されている。

瀬戸橋は、大きな内海が平潟湾と接続する海峡に設けられた橋である。内海側に大きな河川がなかったから、潮の干満によって起きる流れだったろうと思われるが、急流渦巻く交通の難所だったので、隣接して瀬戸神社も設置されて海神を祀って厚く信仰していた、といわれている。

瀬戸神社の前の海に琵琶島弁財天がある。島の形が琵琶のようなことから琵琶島と呼ばれるこの島に祀られている弁天様は立ち姿である。毎年 5 月 15 日には瀬戸神社から琵琶島へ弁天様がお渡りになる神事が行われる。室の木と野島はもともと渡船で結ばれていた。明治 45 年 1912 年に隣接する追浜に海軍飛行場が建設されると（現日産自動車追浜工場辺り）、野島に巨大な飛行機格納庫を作る計画が立てられた。そのために軍では、洲崎と野島の間を掘って「野島運河」を作り、昭和 19 年に野島と室の木間に「八紘橋」を架橋した。戦後この橋の名称は「夕照橋」に変更された。　　（2018 年 3 月 20 日）


金沢歴史地図
小泉
称名寺
寺前
内海
洲崎神社
瀬戸神社
瀬戸橋
金沢八景駅
野島
平潟湾
六浦道
夕照橋
瀬ヶ崎
内川

2018/03/26

横 32　　泥亀新田（でいきしんでん）

（六浦藩は江戸時代に横浜で唯一の大名だった）

よく横浜は歴史が浅い都市といわれる。確かに横浜は、幕末に黒船が来航して、1854 年安政元年 3 月 3 日に日米和親条約を締結した場所として初めて歴史上に登場する。それまではわずかに 80 戸位の家があるだけの寒村だった。

しかし金沢八景には米倉忠仰（よねくらただすけ）を領主とする譜代大名がいた。1.2 万石だったので、城主大名でなく陣屋大名だったが、領地は本陣があった金沢八景を中心とする臨海部のほかに飛び地になるが平塚や埼玉の一部を持っていた。神奈川県全体としては、北半分が「武蔵

国」、南半分が「相模国」に分断されていたが、江戸に近かったので天領と旗本相続地がほとんどを占めていたが、その中で六浦藩（当初は金沢藩だったが、のちに加賀の金沢藩と混同を避けるために「六浦藩」に改名した)、小田原藩、荻野山中藩（厚木市）が残されていた。

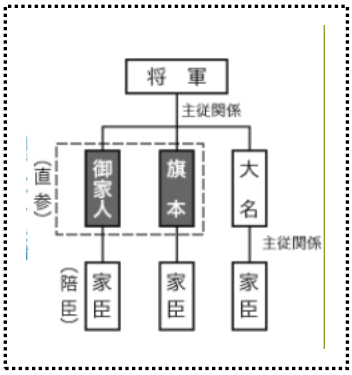
1722 年天保 7 年に米倉忠仰（よねくらただすけ）が皆川藩（栃木市）の陣屋を金沢へ移して藩名も金沢藩に変わった。金沢では、1668 年寛文 8 年頃から走川（現・寺前）と平潟の 2 か所の埋め立てが行われて、埋め立て後も台風や震災で何度か損壊を繰り返していた。そこで、米倉氏はまず、走川・平潟埋め立て地を再整備して、鎌倉時代以来の地場産業だった製塩所にした。ついで、1764 年明和元年頃、田沼時代が始まると、金沢入江新田の開発に着手した。さらに、1846 年弘化 3 年には泥亀新田の開発を開始。これらの埋め立て事業は、このあたりが風光明媚な「金沢八景」と呼ばれた景勝地を一掃してしまったが、台風や地震などで何回も壊されながらもその都度復旧して、米の生産力を高めた。

（陣屋大名）

徳川家直属の家臣は、一万石以上の領地を持つ約 280 人の「大名」と一万石未満の「旗本」（約 5,200 人)、「御家人」（17,400 人）がいた。大名は領国に住んで江戸へ参勤交代した身分で、旗本は領地があってもそこへ住むことはなく江戸へ住みっぱなしだった。旗本は将軍に面会することができたが、御家人は面会することは許されなかった。

大名が領地へ帰った時に住むところが城または陣屋である。「一国一城令」のもとで、すべての大名に対して領地に城は一つとされており、加えて三万石以上の場合に城を持つことが許されていた。

城は軍事拠点だったので、石垣やお濠で囲われたものが「城」で、それ未満のものは「陣屋」と呼んだ。城が大きな屋敷とすれば、陣屋は小さな屋敷になる。だから、陣屋大名から城主大名へ出世するのが大方の悲願だった。



米倉陣屋の場合は、かっての内海（泥亀新田）を取り巻く丘が平潟湾に面する東端に位置し、西や北は丘の森に囲まれ、南に上行寺、東側の足元に六浦道、その先に平潟湾があるという抜群の立地である。この陣屋は今ではごく普通の住宅に変わっているが、1722 年天保 7 年から 1871 年明治 4 年の廃藩置県で藩が廃止されるまでここが拠点だった。

その後、明治 17 年に米倉氏は一旦、子爵になったが、間もなく平民になり、以降現在に至っているという。

金沢藩城主米倉氏の旧宅。今でも末裔の方がお住いのようだ。

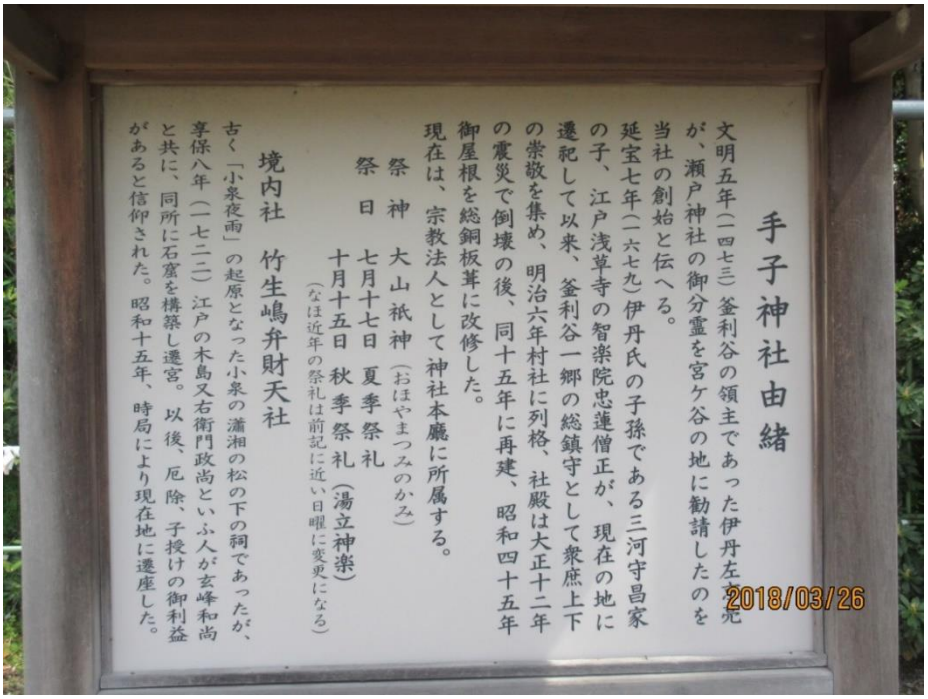
（永島裕伯（すけのり）＝泥亀）

儒学者で医師だった父・長島徳元の長男・永島裕伯（すけのり）は儒学者で湯島聖堂の先生である。父徳元が高齢になり、隠居地として金沢郷を拝領した。1664 年徳元は報恩のため永島裕伯に平潟湾の干拓による新田開発を命じた。

4 年後の 1668 年、祐伯（すけのり）は完成した新田を裕伯の雅号「泥亀」を取って、「泥亀新田」とした。実際には出来た田んぼは塩分が強くて米策には適さず、長い間「れんこん」栽培しかできなかった。また、海水の流入を防ぐために作られた潮除け堤も、大雨や台風でしばしば壊された。それから約 200 年後の 1849 年、子孫の永島亀巣が最終的に事業を完成させた。　　（2018 年 3 月 16 日）

1668 年	永島祐伯がおよそ 3 ヘクタールの新田や塩田をつくる
1703 年	大地震によって新田がこわされる
1741 年	埋め立ての計画がたてられる
1779 年	埋め立ての願いを幕府に出しまわりの村から許しをえる
1785 年	埋め立てを始める
1786 年	およそ 30 ヘクタールの埋め立てが完成する 6 月の洪水で田が流されるが、再び工事をやりなおす
1791 年	津波や高潮のため堤防がこわされ海にもどってしまう
1843 年	また埋め立ての願いを出す
1845 年	まわりの村（坂本村）から埋め立てを反対される
1847 年	埋め立てを始める
1852 年	泥亀新田が完成する

金沢八景の景勝地の一つである「小泉（こずみ）」は手子神社の東側にあった。昔は手子神社辺りまで内海が入り込み、その浜に竹生島と呼ばれる岩山と大きな笠松があり、晴天の夜でも梢から雫を落としていたと伝わっている。これが金沢八景の一つの「小泉夜雨」の起源である。さらにその松の根元の石窟に弁財天が祀られていた。これが竹生島弁財天で、現在は手子神社の境内に移されている。それ以外もすべて現在では宅地化されていて昔の面影はない。



横 33　　塩の道

金沢の平潟湾では鎌倉時代から製塩が盛んで、中世には六浦道（むつうらみち）、朝比奈切通しを経て盛んに塩が運ばれた。その六浦道（むつうらみち）は別名「塩の道」と呼ばれてきた。

1192 年、武家政治の始まりになる鎌倉幕府が誕生すると、頼朝は鶴岡八幡宮を中心にして道路を整備し政府の館を構えた。鎌倉の海は舟運には好都合だったが、遠浅であるうえに一旦海が荒れると船が寄り付けなかったため、1232 年材木座海岸に和賀江港を築港した。しかしこの港も海が荒れると船の係留が難しくなり荷役も滞った。その対策として、波が静かな東京湾にある六浦の湊へ船を回漕して荷役するようにし、六浦から陸路で鎌倉への物資輸送をするようにした。このルートが選ばれたのは六浦には昔から製塩場があって、大量の塩が陸路で鎌倉へ運ばれていたことが大きく影響したという。その後六浦道は、六浦の塩だけでなく、安房、下総、上総方面から集積する物資輸送路に変わり、さらに六浦は景勝地だったので鎌倉人にとって重要な観光地にもなった。

（朝比奈切通し）

六浦道がその機能を変容させたのは、朝比奈切通しの整備による。1240 年六浦道の難所だった朝比奈峠に道路を建設することが決定された。この工事は仁治 2 年（1240 年）4 月に着工し翌 5 月末に竣工と「吾妻鑑」に書かれている。これが「朝比奈切通し」である。
鎌倉時代以降鎌倉では丘陵を切り開いて造成した道を「切通し」と呼ばれている。その代表格が、大仏切通し、化粧坂切通し、亀ヶ谷坂、巨福呂坂、朝比奈切通し、極楽寺切通し、名越切通しの「鎌倉七口」である。
この中で、東側から鎌倉へ入る重要な道が「名越坂」と「六浦道」だった。名越坂は横須賀、三浦方面と鎌倉を結び、昔から「古東海道」と呼ばれた重要な幹線道路だった。

（六浦道は「塩の道」）

① 金沢藩（六浦藩）陣屋跡
金沢藩は今の横浜市の中で唯一の大名である。先祖は会の武田家に仕えた武将だったが、武田家滅亡後は徳川家康の家臣になった。もともとは栃木市（下野国本皆川村）にあったが、1722 年享保 7 年金沢に陣屋を移した。以降明治 4 年 1871 年の廃藩置県まで存続した。金沢藩陣屋跡は金沢八景駅の西側の山側にある。

② 上行寺東遺跡
1984 年ここから大規模な中世のやぐら群が出土した。やぐらとは、鎌倉時代にがけや洞窟に作られたお墓を指すが、ここから 43 基のやぐら,200 体の遺骨も発掘された。このことから、ここは鎌倉時代の遺跡とされている。

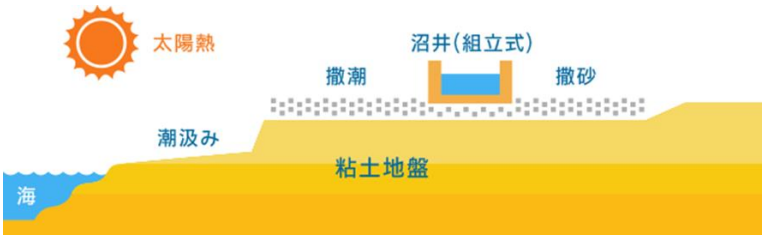
③ 上行寺
鎌倉時代初期の創建。下総若宮の領主富木胤継(とぎじょういん)が房総の二子の浦から海路で鎌倉へ向かった時、その舟に日蓮上人と乗り合わせて船中で仏法について語り合った。その議論は六浦に到着しても終わらず、この寺で議論を続けた。その結果、元は真言宗だった胤継が日蓮に帰依し、上行寺というようになったと伝えられている。この話は「船中問

答の寺」として伝えられている。ところでこの寺はよく鎌倉大町にあるガン封じで有名な「上行寺」と間違えられる。

④ 塩場跡

八景から来た六浦道が原宿方面と六浦方面に分岐するところの山側に光傳寺がある。浄土宗の寺で、1572 年天正元年の創建という。江戸時代頃までは六浦道から南側の海が光傳寺の前まで入り込み、浜では製塩が盛んにおこなわれていた。その「塩場」では海水の塩濃度が 3%だから 3g の塩のために 100 ccの水を蒸発させる必要があるので、海水を浜の砂に撒いて濃い塩水に濃縮し、その濃い塩水を煮詰めて塩の結晶を取り出す方法が使われてきた。

（2018 年 3 月 21 日）



横 34　　姫小島～小栗判官・照手姫伝説

国道 16 号線が侍従川を渡る新瀬戸橋の橋詰めの山側に「姫の島公園」, 海側に「姫小島水門跡」という美しい名前の小公園がある。もともとは一つの公園だったものを国道の道路工事で二つに分割したようだ。昔、このあたりを埋め立てた時、埋立地に海水が逆流しないよう水門が作られた場所で、それが「姫小島水門跡」で、その水門に隣接して、「その昔　照手姫がこの島にて　松葉いぶしの難に遭いたるを　土地の人哀れみ　呼んで姫小島という」とい説明板がある。そういえば、小栗判官を毒殺した相模の横山一族から逃れて照手姫は六浦へ来るが、その時①侍従川②千光寺（ 東朝比奈へ移転）　③小島の松の木が登場する。いずれも六浦にあるもので、六浦は小栗判官・照手姫物語にも主要な舞台として登場する。

（小栗判官（おぐりはんがん）・照手姫（てるてひめ）物語のあらすじ）

1300 年代の室町幕府時代の話。京都の二条大納言兼家に一人息子「小栗」がいた。18 歳の時父が結婚を勧めたが、あれこれ難癖をつけて断り、挙句「みぞろが池の大蛇」と交わり、都中の噂になったため、父から常陸の国玉造（栃木市）へ流される。

ある日その玉造の館に行商人が来て、相模の国（相模原市）の横山大膳に照手姫という観音様の化身のような絶世の美女がいる話を聞く。手紙のやりがとりあって、二人は恋に落ちて、親に無断で結婚してしまう。

怒った横山大膳は、人食い馬と恐れられた荒馬「鬼鹿毛（おにかげ）」を向かわせるが、小栗判官は乗りこなしてしまい、企てが失敗する。次いで、照手姫の兄・三郎が、小栗判官と 10 人の家来を酒宴に誘い出して、全員を毒殺する。小栗の遺体は相模の上野原へ土葬され、10 人の家来は火葬される。他方、照手姫は小栗毒殺を見て逃げ出すが、間もなく追手に捕まり、金沢の侍従川へ捨てられる。幸いにもの野島の漁師に助けられて、一命をとりとめる。付き従ってきた下女は姫が川へ流されたのを見て、後を追って入水自殺する。ところが漁師の妻が救い出された姫に対して激しく嫉妬し、姫を松葉でいぶすなどの仕打ちをする。やがて六浦に住んでいた人買いに姫は売られる。それから姫は転々と売り渡されて、美濃の国の青墓（岐阜県大垣市）の遊女屋へ買い取られる。

他方、冥途へ落ちた小栗は、閻魔大王の前で罪を裁かれる。小栗の臣下が土中に埋葬された小栗を再び娑婆へ戻してほしいと強く願い出ると、遊行寺の大空上人に小栗を助けよというお告げが出されて、上人は上野原で小栗を掘り返す。小栗は「もの言えぬ餓鬼阿弥（がきあみ）」（両足がないオシでメクラ）という醜い姿で地上に這い出した。上人は、小栗をイザリ車へ乗せて熊野の「湯の峰温泉」へ行き、湯治すれば元の体になると言って、引いてゆく。途中で上人と別れたイザリ車は次々と街道の人の助けで東海道を上り、やがて青墓に着く。女郎屋で働く姫は小栗とも知らず、亡き夫の供養のためと考えて三日間の休みをもらい車を草津まで引く。その後車は次々と人変えて、住吉、堺を経て熊野本宮まで行く。最後は道が絶えてしまうと、次に山伏に担がれて湯の峰温泉へたどり着く。小栗はここで 49 日間湯治をして元の小栗の姿に戻る。

元気になった小栗は、金剛杖を持ち山伏姿でまず京都二条の実家大納言兼家に会う。帝とも会って財産を得る。その後小栗は二人を酷い目に合わせた六浦のお婆さんや横山の三郎を処刑し、照手姫を妻に迎える。また、遊行寺には報恩のため焔魔堂を建てた。小栗の死後、照手姫は剃髪して長生尼と名乗って、小栗と毒殺された家臣の霊を弔った、という。

（各地に伝承された小栗判官物語）

上に述べた小栗判官・照手姫物語は、遊行寺にある「長生院縁起」で人が集まれば絵解きをして人々に話して聞かせたものである。これに対してえんま堂がある花応院（藤沢市東俣野）に伝わる話は少し違う。それだけでなく、相模原の榎神社には照手姫の碑（上溝）、大垣市には照手姫の水汲み井戸（岐阜県）、田辺市には小栗判官組成の力石（和歌

山県）、米原市には白清水（滋賀県）、筑西市には小栗判官まつり（栃木県）があるなど多彩な伝承が残されている。

（六浦が舞台に登場する場面）

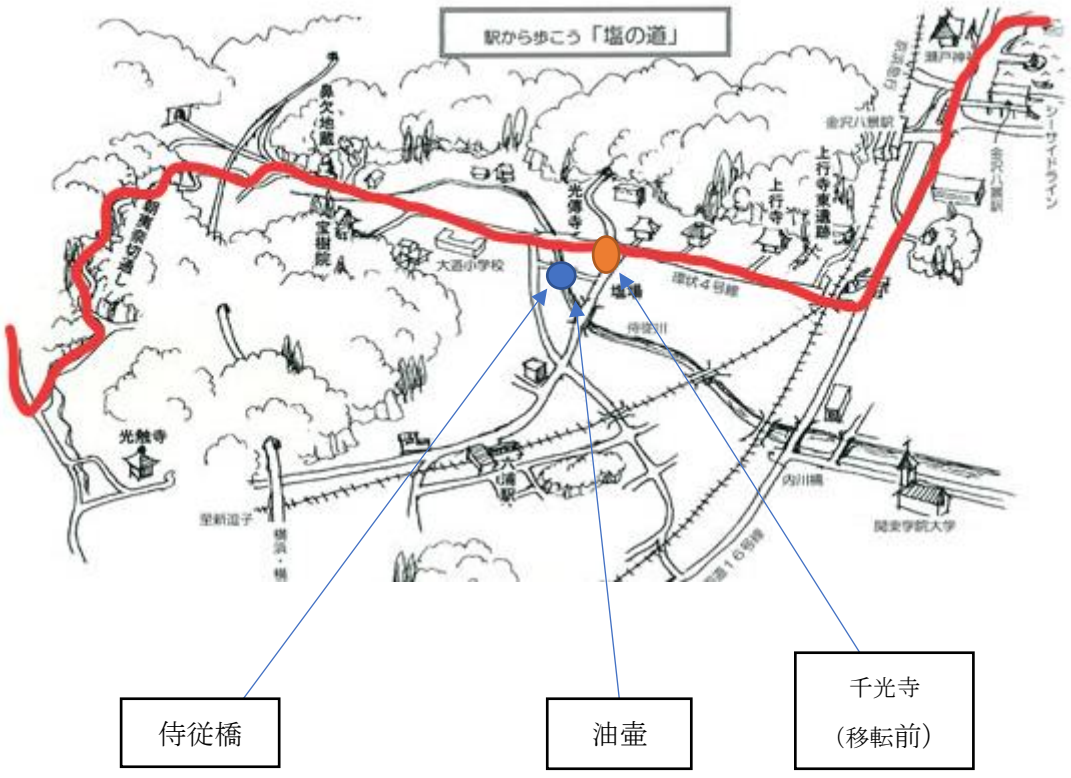
① **侍従川**

相模の国横山を逃げ出した照手姫は、金沢の六浦へ着く。すると追手の数人の荒くれ男たちがやってきて、姫を捕まえて「油堤」というところから川の中へ姫を投げ込む。油堤はすべすべした岩でできていて這い上がれない。絶体絶命になった姫が一心に観音様にお祈りすると、川に近い千光寺の観音様が現れて溺れている姫を救い出した。姫が土手の上の草むらに横になると、観音様は消えていなくなった。

この様子を始めから終わりまで見ていた能島の漁師が、不思議な出来事に驚き、感激して、姫に近づき、姫のお世話をしようと考えて野島の家へ連れ帰った。

数日後、姫の後を追って乳母・侍従が油堤へやってくると、ある日目が悪者たちに川へ投げ込まれた、遺体も上がらないが亡くなったらしい、という話を聞く。大いに驚き悲しんだ侍従は後を追って川へ飛び込む。

油堤は今の侍従橋のある当たりの土手を言い、千光寺は侍従橋の近くにあった寺である。寺はその後東朝比奈へ移転している。この出来事の後、だれ言うともなく、この川を乳母の名をとって「侍従川」と呼ぶようになり、今に至っている。



② **姫小島**

姫は漁師に救われて野島の家へ入るのだが、漁師のおかみさんが姫に焼餅を焼くようになる。ある日、おかみさんは姫を小島の松の木に吊り下げて、足元に松の枝を置いて火をつけて、いぶし殺そうとする。姫は騒がず、また観音様にお祈りすると、不思議なことに煙は横へたなびき、火も消えてしまった。そこで、おかみさんは。なんということだ、いっそのこと人買いに売ってしまおうと考えて、六浦の商人に売り飛ばしてしまう。姫が吊るされた小島が「姫小島」で、今も新瀬戸橋のたもとにある。

（小栗判官伝説について）

「小栗判官伝説」は、恋愛話だが、京都～栃木市～横浜～大垣～熊野と当時では珍しくスケールが大きな展開をする。そのためにあちこちに二人にまつわる話や伝説が残されている。また、この話を何枚かの絵にかいて、今でも昔と同様に、藤沢の遊行寺や東俣野町の花応院などでは日常的に「絵説き」による講話が続いていることにも驚かされる。

（2018 年 3 月 21 日）

横 35　　称名寺

2013 年 5 月、ユネスコの世界遺産登録を事前審査する機関イコモスから鎌倉を「武家の古都」にしたいとする申請について、当時の政庁や町並みなどが残っていないなど不適切な点が多いので取り下げるよう勧告された。最近、初めて申請に使用したという 21 か所の世界遺産リストを見たのだが、その中に金沢文庫の「称名寺」があって、驚いた。

（金沢北条氏の菩提寺）

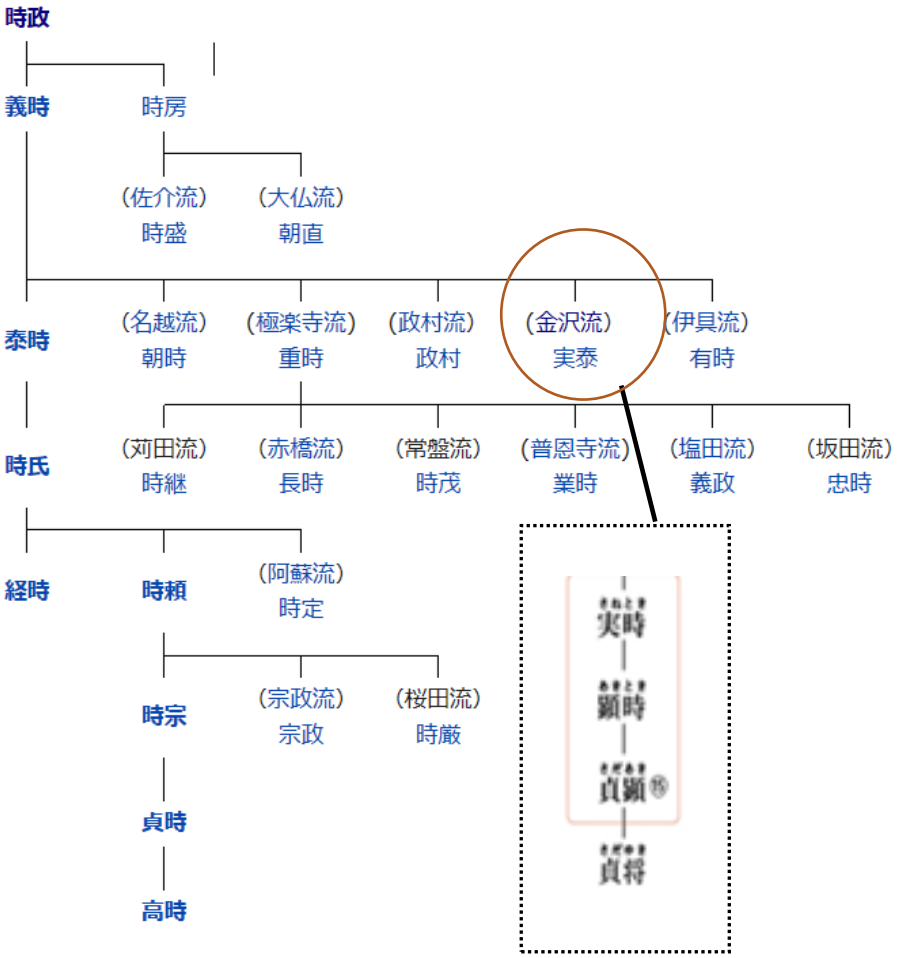
称名寺の創建は確定していないが 1258 年正嘉 2 年頃とされている。それは金沢北条氏の初代・北条実時が金沢の住まいの中に持仏堂（阿弥陀堂）を建てた年である。以降この寺は金沢北条一族の菩提寺として発展した。この金沢北条氏を知るためには、鎌倉時代とその中核を担った鎌倉北条氏のことを知る必要がある。

（鎌倉幕府）

鎌倉時代とは、源頼朝が平安時代末期に平氏政権を倒して鎌倉幕府を開いた 1185 年から、足利尊氏が京都に幕府を開く 1338 年までの約 150 年、鎌倉に拠点を置いた武家政権を指す。源頼朝が鎌倉を拠点にした理由は、①源氏にとって祖父の代から鎌倉は東国の拠

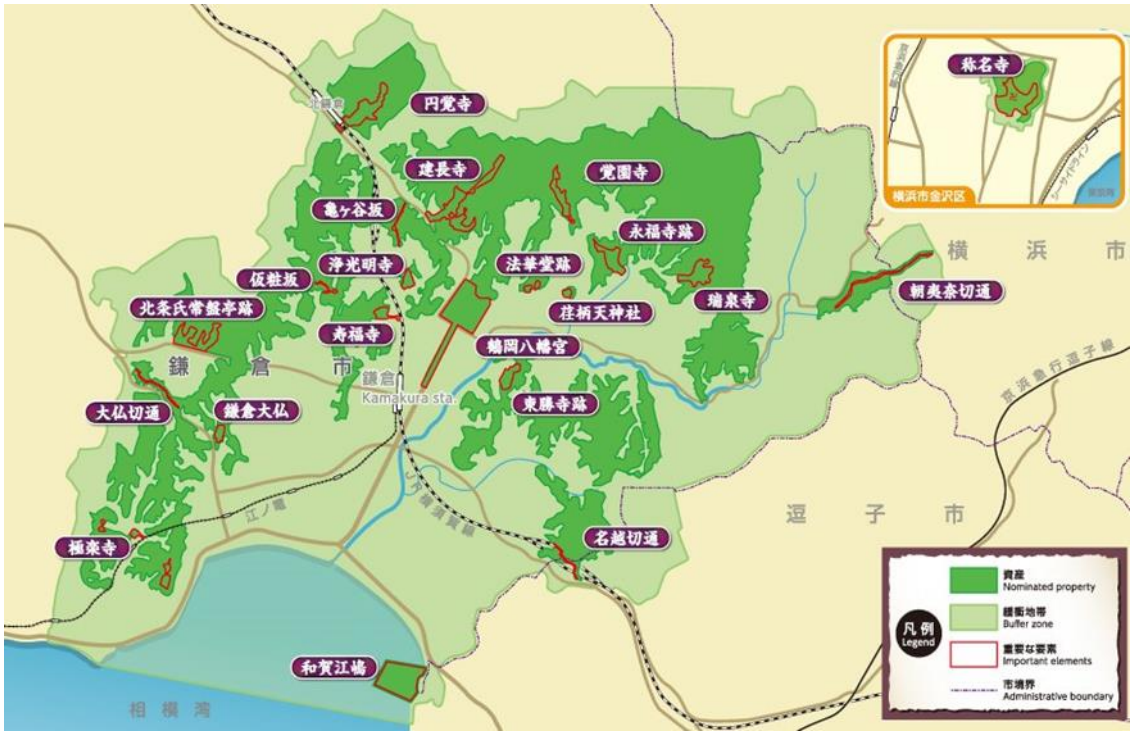
点だった。加えて、平治の乱で父義朝が敗北した時、頼朝は伊豆へ流されるが、その見張り役だった北条時政の娘・政子と恋愛し、結婚して以来、北条氏は頼朝の有力な支援者だった。②京都には強力な朝廷があって、そこに新しい武家社会を作るには朝廷を抑え込んだり駆け引きしたりすることが必要だったので、東国に地盤を持つ頼朝は朝廷から干渉を受けにくく、自分の権力基盤がある鎌倉に幕府を建てた。

源頼朝は、1185 年全国に守護、地頭を配置して、御家人の武士による武力支配を始める。1192 年頼朝は征夷大将軍に就任する。1199 年頼朝が死去すると、その二人の息子に力がなかったので、それまでの軍事独裁政治から 13 人の御家人たちによる合議制による執権政治へ移行した。この執権政治で政子の実父・北条時政が台頭する。
頼朝には政子の間に二人の息子がいた。二代目が頼家、三代目が実朝である。頼家は病死、実朝は暗殺される。源氏将軍が三代で途絶えると、北条時政が力を増すが、「牧氏事件」で実朝暗殺未遂が露呈し、怒った政子により伊豆へ幽閉された。以降執権性は北条政子が掌握する。鎌倉幕府では、将軍職は公家や皇族を京都から迎える形の名目的存在になり、政治の実権を持つ執権職は、三代将軍源実朝暗殺後は北条家が独占し、世襲化した。



父の北条時政を伊豆へ幽閉後、執権は北条政子が握るのだが、この幕府の混乱に乗じて後鳥羽上皇が「承久の乱」を起こす。
「承久の乱」は、1221 年後鳥羽上皇が王権回復のため、統幕の兵をあげたもので、朝廷方は北面の武士（御所の北側にいて御所の警備をした武士団）、社寺の僧兵が中心だった。幕府は、北条泰時、時房を大将にして 19 万人の軍隊で京都を攻めて、1 か月で反乱は鎮圧し、圧倒的勝利をした。これにより後鳥羽上皇は隠岐に流され、土御門上皇は土佐へ、順徳天皇は佐渡へ流された。天皇側に味方した御家人も処罰され、後鳥羽側の所領は没収されて、地頭も代えられた。また、京都や西国の監視のため六波羅探題が新設された。この乱の結果、政権は交代し、武家勢力が全国に展開されるとともに、北条一門による執権政治が強力に行われるようになった。

8 代執権・北条時宗の時、1274 年に「文永の役」と 1281 年に「弘安の役」の二度「元寇」が発生した。蒙古襲来では九州北部が戦場になり、武力では弱体だったが防塁などで防戦し台風などの力で追い返した。「弘安の役」から 3 年後の 1284 年、34 歳で時宗が死去し、9 代北条時貞になると、蒙古襲来で債務を負った御家人たちが天災も加わって疲弊したため 1297 年に「永仁の徳政令」を出す。御家人たちが抱える債務を帳消しにするものだったが、幕府財政の悪化は止まらず、多くの庶民も幕府に不平を感じるようになった。1333 年後醍醐天皇が南朝の初代天皇に即位して、鎌倉時代は終息した。



（金沢と鎌倉の関係）

始めに人脈上のつながりを見る。
北条氏では、時政以降、得宗と呼ばれる宗家を中心にして名越、赤橋、常葉、塩田、金沢、大仏などの諸家に別れ、一門で執権職、連署職（副執権＝執権の補佐役）六波羅探題、評定衆などの要職を独占した。また諸国の多くの守護職も一族から送り出した。

金沢北条氏の開祖は、2 代執権・北条義時の 5 男・実泰である。しかし実泰は早くに出家したため、2 代実時が宗家の信頼を得て有力御家人になった。3 代顕時は霜月騒動で一時失脚するが、北条貞時が 9 代執権に復帰すると、顕時も幕政に復帰する。4 代貞顕は 14 代執権高時を支えただけでなく、自らも 15 代執権に就任した。

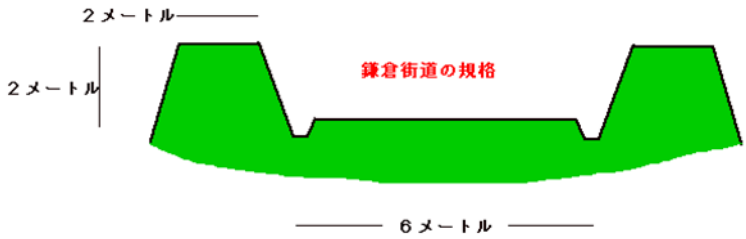
このように金沢北条氏は人脈上も宗家につかず離れずの形で北条家を支えた。特に 2 代目実時は、隠居後に金沢に住み、政治、歴史、仏教などの和漢書を収集して菩提寺・称名寺に置いて、金沢文庫の基礎を作った。

＊金沢北条氏滅亡後は、菩提寺の称名寺に文庫の管理がゆだねられたが、寺運の衰退とともに蔵書も次第に散逸した。中で徳川家康や前田綱紀の持ち出した数はかなりあったと言われる

次いで経済上のつながり。
鎌倉に都ができると、全国から租庸調などの税金が集まるようになった。これらの物資輸送は陸路と海路の二通りで運ばれた。

（道路）
鎌倉時代の主な街道は、奈良・平安時代に作られた道と同じようなルートだが、鎌倉幕府が関東の武士が源頼朝を中心に置いて作った「武士の政府」だったので、京都を中心とする朝廷勢力と戦争になった時の対策として、「いざ」という時に関東中の御家人と食料を

いち早く集めるために、関東を縦断する三本の軍事道路を建設した。これが「鎌倉街道」である。



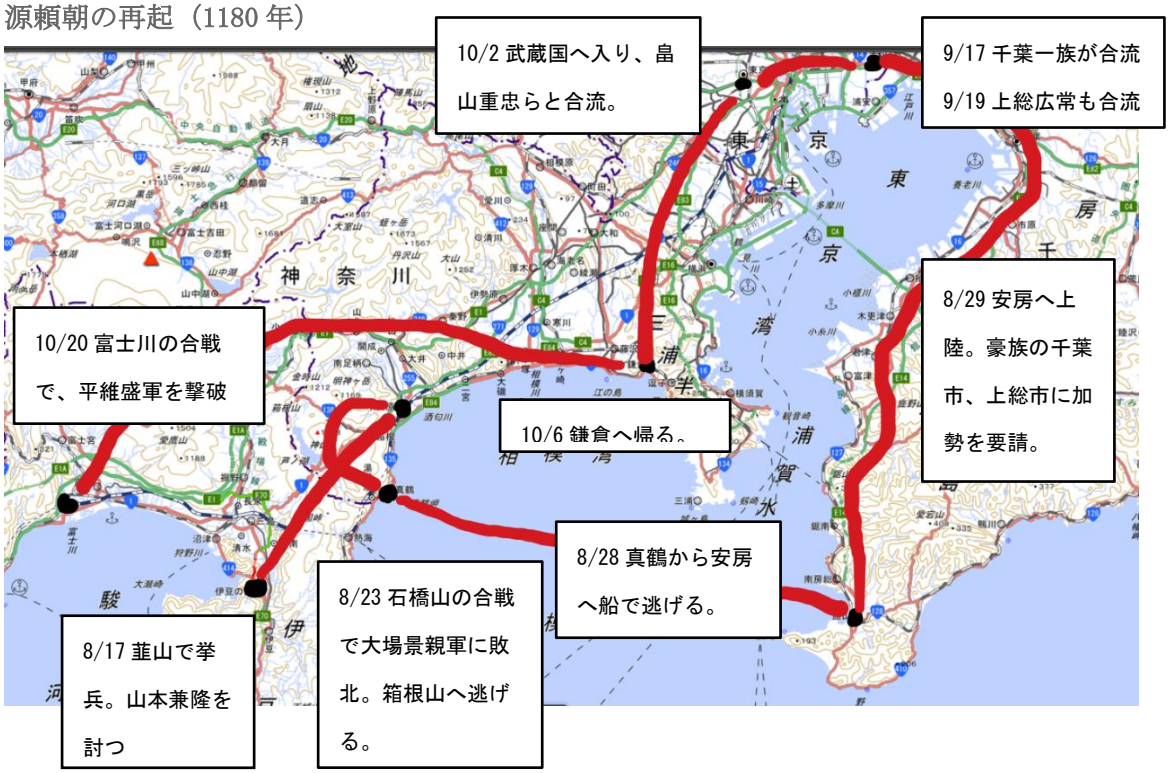
鎌倉時代に作られた鎌倉街道は群馬県、栃木県、埼玉県、東京都、神奈川県をタテに貫いて鎌倉へ集中している。たくさんの武士や食糧を短時間で鎌倉へ集めるための計画道路だったので、直線道路が多い．幅は約 6mで伝路とほぼ同じ規格だが，面白いのは丘陵部に入ると図のように両側が壁のようになる掘り割り道になった。馬に乗った武士が進軍するところを見えないようにするためという。この壁は平地の部分にも土を盛って土塁（どるい）として築かれた場所もある．

（海路）

相模湾に面した鎌倉は、和賀江島港をメインポートにした。しかしここは遠浅の海で大船を寄せることができなかったし、太平洋に面しているので一旦海が荒れると何日も使えない港だった。そのため、東京湾側の六浦津が鎌倉の外港になった。ここはもともと源家が房州と親密な関係があったことの大きな要因である。

（2018 年 3 月 21 日）

源頼朝の再起（1180 年）



横 36　　鎌倉街道

横浜に住んでいると、上大岡駅前の広いバス通りを「鎌倉街道」と誰もが気軽に呼ぶ。横浜と鎌倉を結ぶ道という程度の理解で、起終点はどこか？とかいつごろできた道か？などと聞くとたちまち答えられなくなる。「金沢の古道」を調べていて、その鎌倉街道というのは鎌倉幕府が軍事上整備した道で、三本あることを知った。今の上大岡駅前を通る道路は、県道 21 号線・横浜鎌倉線で、通称「鎌倉街道」と呼ぶ。この道は鎌倉市滑川～横浜市中区本町三丁目を結ぶ。しかし、古道としての鎌倉街道ではない。では「かまくら古道」はどこを通っていたのだろうか。

（鎌倉街道には三ルートあった）

古道としての鎌倉街道は、鎌倉時代に幕府が置かれた鎌倉と各地を結ぶ道路網で、幕府の御家人が有事の際に「いざ鎌倉」といってはせ参じるために整備した道である。鎌倉街道は無数にあったが、その主要な幹線道路は、「吾妻鏡」では、①鎌倉と京都を結ぶ東海道②鎌倉と武蔵、下野を結ぶ中路③鎌倉と上州を結ぶ下道などがあった。実際にはこれらの道はさらに先へ伸びて、奥州、信州などとも接続していた。

鎌倉街道という呼び名は、鎌倉時代からあったわけでなく、江戸時代の文化文政年間に編纂された幕府作成の地図に登場する。その頃江戸やその周辺の住民たちが鎌倉街道だと呼

んでいたためだろう。その頃から鎌倉街道には上道（かみつみち）、中道（なかつみち）、下道（しもつみち）の３つの主要道があったと言われてきた。その語源ははっきりしないが、吾妻鏡の中に「中道（なかつみち）」「下道（しもつみち）」と書かれている。

鎌倉街道上道は、鎌倉から武蔵西部を経て上州に至る古道で、鎌倉→化粧坂→瀬谷→小野路→府中→所沢→入間→高崎へ至るルートである。
鎌倉街道中道は、鎌倉→巨福呂坂→戸塚→中山→荏田→渋谷→中野→王子→与野→岩槻を経て下野、宇都宮へ至るルートである。
鎌倉街道下道は、鎌倉→朝比奈切通し→六浦→能見台→栗木→笹下→永田→保土ヶ谷→神大寺→日吉→丸子→江戸を経て奥州街道へ至るルートである。

鎌倉街道の三ルートについては諸説ある。その理由は鎌倉街道という名前が後世の江戸時代になってから作られて、後付けで呼ばれるようになったという歴的経緯があるためである。

上道、中道、下道という言い方は埼玉や茨木で呼ばれたのでなく、鎌倉とその周辺で呼ばれたにすぎない。鎌倉時代には鎌倉街道という言い方はしなかった。それは江戸時代になって鎌倉時代の古道という意味で使用された（江戸の文政時代の「新編武蔵風土記」などによる）。だから、各路線ともその延長線上に別の街道が作られている。たとえば上道の延長として倉賀野を経て信濃善光寺へ至る信濃街道、下道の延長では宇都宮を経て奥州へ至る奥州街道、平塚から小田原を経て箱根越えする東海道、平塚から曽我を経て足柄峠を越える東山道がある。その際に、鎌倉街道は、特定な道を指す言葉でなく、鎌倉へ向かう道という意味で使用されていた。そう考えたのは柳田国男が全国各地に鎌倉街道と呼ばれる道があって、その多さに呆れたためと言われている。

（下道は安房との深いつながりを示す道）

下道については二つの説がある。一つは、鎌倉から朝比奈切通しで金沢へでて、その後は能見台、笹下、弘明寺、上大岡を通って保土ヶ谷で東海道へ出て江戸、下総、常陸へつながる道である。二つ目は、金沢の六浦から東京湾を横断して安房の鋸南町へ渡り、上総、下総など房総半島を縦断して、常陸と結ぶ道である。

千葉の房総半島には、源頼朝に関する伝説が多く残っている。その理由は、

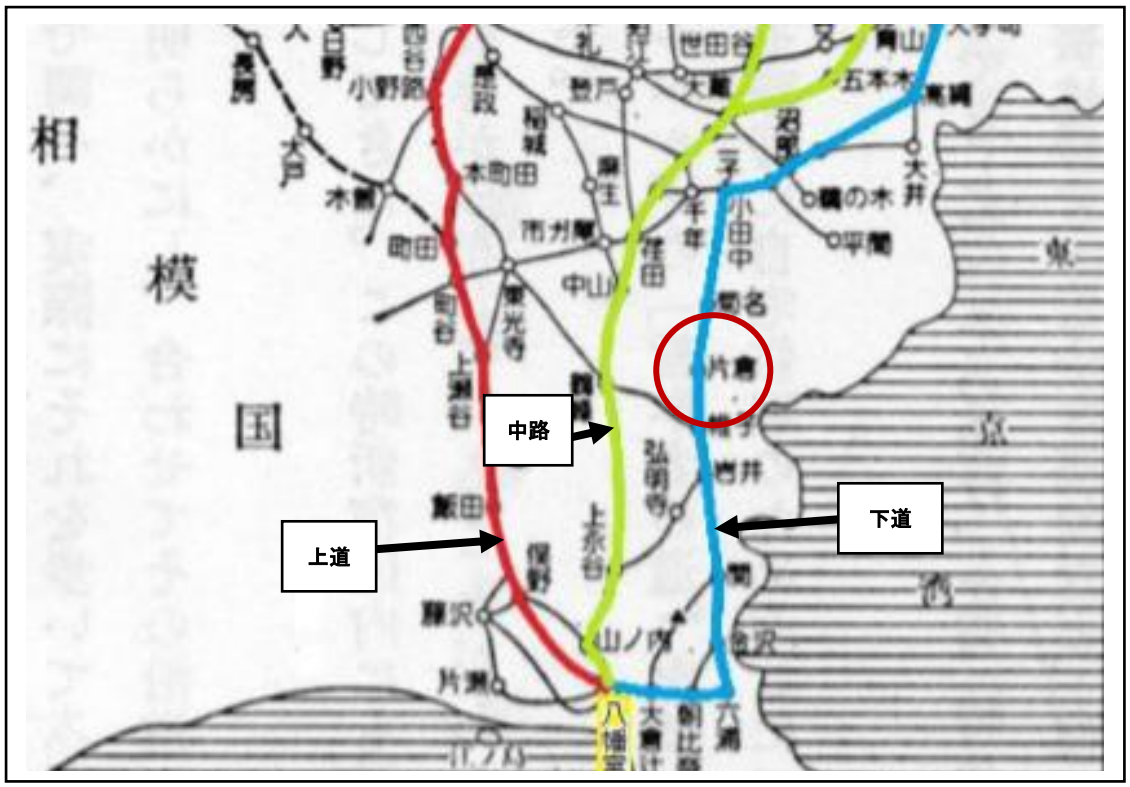
① 1159 年平治の乱で平清盛に敗れた源頼朝は伊豆に流され、北条時政の庇護を受ける。再起し、1180 年石橋山の合戦で再び平清盛と戦って敗れる。真鶴から船で安房鋸南へ逃げ延びる、しかしすぐに、安房の安西景益、上総広常、千葉常胤ら有力な豪族と組んで反撃に転じると、破竹の勢いで京へ上り、平家を西国へ追い詰めて滅亡させた。このことから政治的に源氏一族は房総半島を中心とする東国の豪族たちと深く繋がっていた。

② 鎌倉幕府では、仏教が尊重されて、特に忍制が東国に広めた真言律宗（極楽寺、金沢称名寺など）と、栄西が広めた禅宗の一派の臨済宗が盛んだった（円覚寺、建長寺などの鎌倉五山）。これらの幕府の庇護を受けた寺社が安房に寺社領を得て寺の経営を賄っていた。円覚寺では館山市西長田、称名寺は鋸南町、極楽寺は館山市宝貝に広大な所領を持っていたために、鎌倉と安房は仏教交流、文化交流、経済交流の面でも深くつながっていた。

鎌倉と安房の深いつながりを結んだのが下道だった。六浦の湊から安房の鋸南、館山が海路で結ばれていたのである。

（下道は我が町神大寺を通っている）

下道 2 ルートのうち金沢から北上して栗木、打越、保土ヶ谷を上る道について詳しく見る。


中路
上道
下道

地図
航空写真
OpenStreetMap
岸根公園
片倉町駅
神大寺小学校
中丸小学校
市民病院
三ツ沢公園
裁判所通り
Google

かまくら道は 1192 年の鎌倉幕府成立後、鎌倉と関東、東北、信州を結ぶ街道として順次形成されてきた。神奈川区を通るかまくら道は「かまくら下道」だが、中世の古道が実際にどこだったかを再現するのは難しい。古文書にはかまくら道の途中の地名が記されているが、地名と地名を結ぶ道がどこにあったかを書いている記録がほとんどないからだ。点と点を結ぶ線について、記録がない以上はその土地の伝承に頼ることになる。そうだとしても、現代の道が古道のままとは限らないし、道の付け替えや改廃などは時の経済社会情勢に応じてよく行われるので、古い寺、遺跡、城跡、城館などを参考にして、探すしかない。だから古道を特定し鎌倉街道であることを立証するのは難しい作業なのだ。

この難問に取り組んだ人がいて、神奈川図書館からその著書を借り出して読んだ。

「中世を歩く（東京都その近郊に古道・鎌倉街道を探る）」　北倉庄一
「旧鎌倉街道探索の旅　下道遍」　芳賀善次郎

その著作から「かまくら下道」を地図に落としてみた。すると、保土ヶ谷区から神奈川区へ入ると、市民病院と三ツ沢公園の間を通って岡沢橋で第三京浜を越えて、三ツ沢上町の交差点に出る。そこをキャベジンコーワの看板の立つビルと布川病院の間の急坂を上る。畑の先に中丸小学校があって、その学校の脇を抜けて片倉台団地の外周道路に入る。坂を下って神大寺小学校とゴルフセンターの間を抜ける。通りを渡ってさらに直進すると、また上り坂になる。そこを上ると一面の畑になる。緩い坂道を上ると水道道へ出る。ここを右折して左側が岸根公園になる。公園は道路に対して一段低いので、道から公園を見下ろすようになる。

この区間は私が普段利用する道である、市民病院から中丸小学校までは私が市民病院に行く時に通る道である。中丸小学校から片倉台団地の道は私の二人の娘たちが通学路として通った道である。さらに神大寺小学校から岸根公園の道は今でも私が岸根公園まで散歩するときに利用する道で、四人の孫たちが横浜へ来ると自転車で走る道である。800 年も昔の時代に戦姿の武将たちが「すわ鎌倉へ」と叫びながら走った道だったかと思うと感慨もひとしおである。

（2018 年 4 月 1 日）